博 多 155

－博多遺跡群第200次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1290集

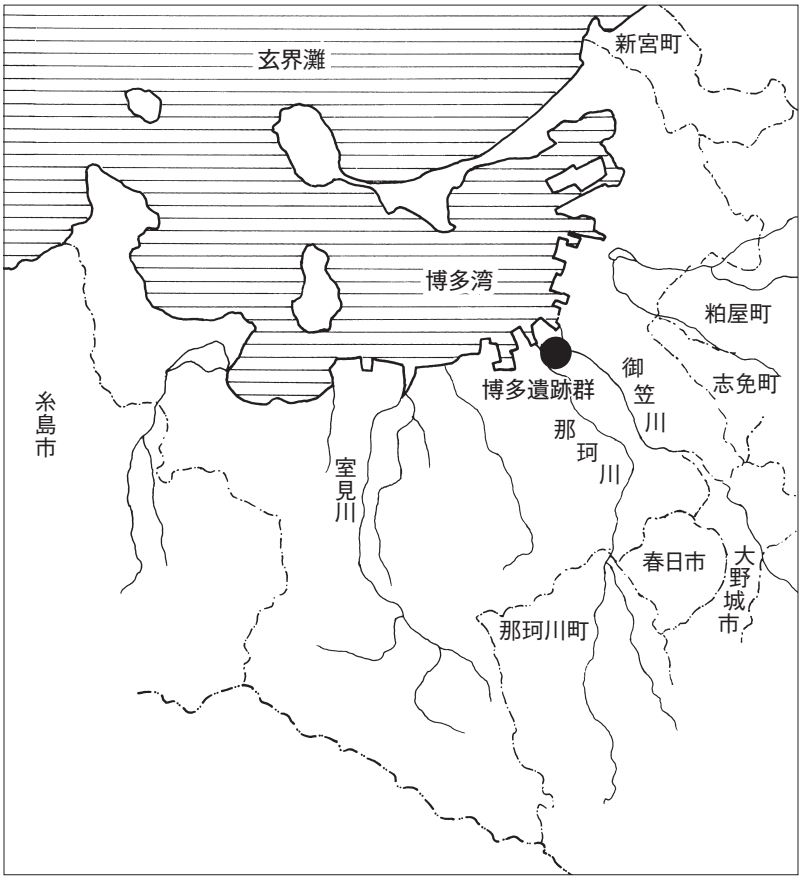
２０１６

福岡市教育委員会

博多（はかた）155

－博多遺跡群第200次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1290集



遺跡略号　HKT－200
調査番号　1339

２０１６

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄して来ました。その証拠を示す貴重な文化遺産が市内には数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの責務であります。

博多は大陸交易の窓口として古代から繁栄してきた地域です。博多地区での調査は昭和52年の地下鉄建設に伴う調査が最初です。以後急激に進む再開発に対して、本市は記録保存の調査を行い、文化財の保護に努めていますが、それらの調査によって博多が弥生時代から現代に至るまで連綿として続く大遺跡であることが判明してきています。

本書は、博多区冷泉町内で計画された事務所ビル建設に先立って、平成25・26年度に実施した、博多遺跡群第200次調査の成果を報告するものです。調査では弥生時代の集落跡や中世の井戸群を検出しており、井戸から多量の中国陶磁器が出土しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、九州リオン株式会社をはじめとして、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成28年３月25日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

凡　　例

(1)　本書は、福岡市教育委員会が平成25・26年(2014・2015)度に福岡市博多区冷泉町222～225で調査を実施した発掘調査報告書である。

(2)　発掘調査は上記の主体により行われ、調査は吉武学、佐々木蘭亭(現九州国立博物館)、山崎龍雄が担当して行った。

(3)　遺構・遺物の実測は吉武、佐々木、山崎が行った。遺物実測は一部本課職員朝岡俊也の協力を受けた。

(4)　本書に使用した図面の浄書は吉武、山崎が主に行い、一部山崎賀代子の協力を受けた。

(5)　調査で出土した中世輸入陶磁器の分類については太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡 XV －陶磁器分類編－』(2000年）による。

(6)　遺構・遺物の撮影は吉武、佐々木、山崎が行った。

(7)　出土金属器の処置は本市埋蔵文化財センターの上角智希に依頼して行った。

(8)　出土獣骨の分析は本課職員屋山洋が行った。

(9)　本書に使用した方位は国土座標北である。

(10)　土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。

(11)　本書の執筆・編集は吉武の協力を受けて、山崎が行った。執筆は吉武が第1面の調査を、残りを山崎が担当し、出土獣骨については屋山が行った。

(12)　調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
1　調査に至る経緯…… 1
2　調査の組織…… 1
Ⅱ　遺跡の調査の概要 …… 1
1　遺跡の立地と歴史的環境…… 1
2　調査の概要…… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 4
1　第１面の調査…… 4
2　第２面の調査……18
3　第３面の調査……35
4　第４面の調査……50
5　包含層・その他の遺物……52
6　出土動物遺存体の分析……54

挿　図　目　次

Fig.1　博多遺跡群と周辺の遺跡（１/25,000）…… ii
Fig.2　第200次調査地点位置図（1/6,000）…… 2
Fig.3　調査区北東壁土層（1/60）…… 3
Fig.4　第１面遺構全体図（1/100）…… 4
Fig.5　井戸 SE001（1/60）…… 5
Fig.6　SE001出土遺物（27は1/2、11～14･22･24は1/4、他は1/3）…… 6
Fig.7　井戸 SE002（1/60）…… 7
Fig.8　SE002出土遺物①（1/3）…… 8
Fig.9　SE002出土遺物②（1/3）…… 9
Fig.10　SE002出土遺物③（90・91は1/4、92･93は1/5、他は1/3）……10
Fig.11　土坑 SK004･005･009～012（1/40）……12
Fig.12　SK004･005･009･010出土遺物（127･137･138は1/4、他は1/3）……13
Fig.13　SK011・012出土遺物（1/3）……14
Fig.14　土坑 SK013･014･020･027･030･036（1/40）……15
Fig.15　SK013･014･020･027･030･036出土遺物（194は1/4、他は1/3）……16
Fig.16　不明遺構 SX028（1/60）、SX028出土遺物（1/3）……17
Fig.17　第２面遺構全体図（1/100）……18
Fig.18　SE106･133･146、SK076（1/60、1/40）……19
Fig.19　SE106出土遺物①（1/3）……21
Fig.20　SE106･133出土遺物②（1/3、1/4）……22
Fig.21　SE336・380、SK236（1/60）……23
Fig.22　SE146・336出土遺物①（1/3）……25
Fig.23　SE336出土遺物②（1/3）……26
Fig.24　SE336出土遺物③（1/3、1/4）……27
Fig.25　SK064・100・103・113・122・137・242・286、SX171（1/30、1/40）……28
Fig.26　各土坑出土遺物①（1/3）……30
Fig.27　各土坑出土遺物②（1/3）……31
Fig.28　各土坑出土遺物③（1/3、1/4）……32
Fig.29　各土坑出土遺物④（1/3）……33
Fig.30　各土坑出土遺物⑤（1/3）……34
Fig.31　第２面ピット出土遺物（1/3、1/4）……36
Fig.32　第３面遺構全体図（1/100）……37
Fig.33　SE176･179・207・279～281（1/80）……38
Fig.34　SE174･176出土遺物（1/3）……39
Fig.35　SE179出土遺物（1/3、1/4）……41
Fig.36　SE179･207出土遺物（1/3）……42
Fig.37　SE207・279･280出土遺物（1/3）……43
Fig.38　SE279･280･281、SK076出土遺物（1/3）……44
Fig.39　SE279・281･380出土遺物（1/3）……45
Fig.40　SK216･321（1/40、1/50））……46
Fig.41　SK216･217･219出土遺物（1/3、1/4）……47
Fig.42　SK321出土遺物（1/3）……48
Fig.43　各土坑、SX171、ピット出土遺物（1/2、1/3、1/4）……49
Fig.44　第４面遺構全体図（1/100）……50
Fig.45　SC233･417（1/60）……51
Fig.46　第４面出土遺物（1/3）……51
Fig.47　包含層・その他の出土遺物（1/3、1/4）……52
Fig.48　各遺構出土石製品・金属器（1/3）……53
Fig.49　SX028出土骨製品（2/3）……54

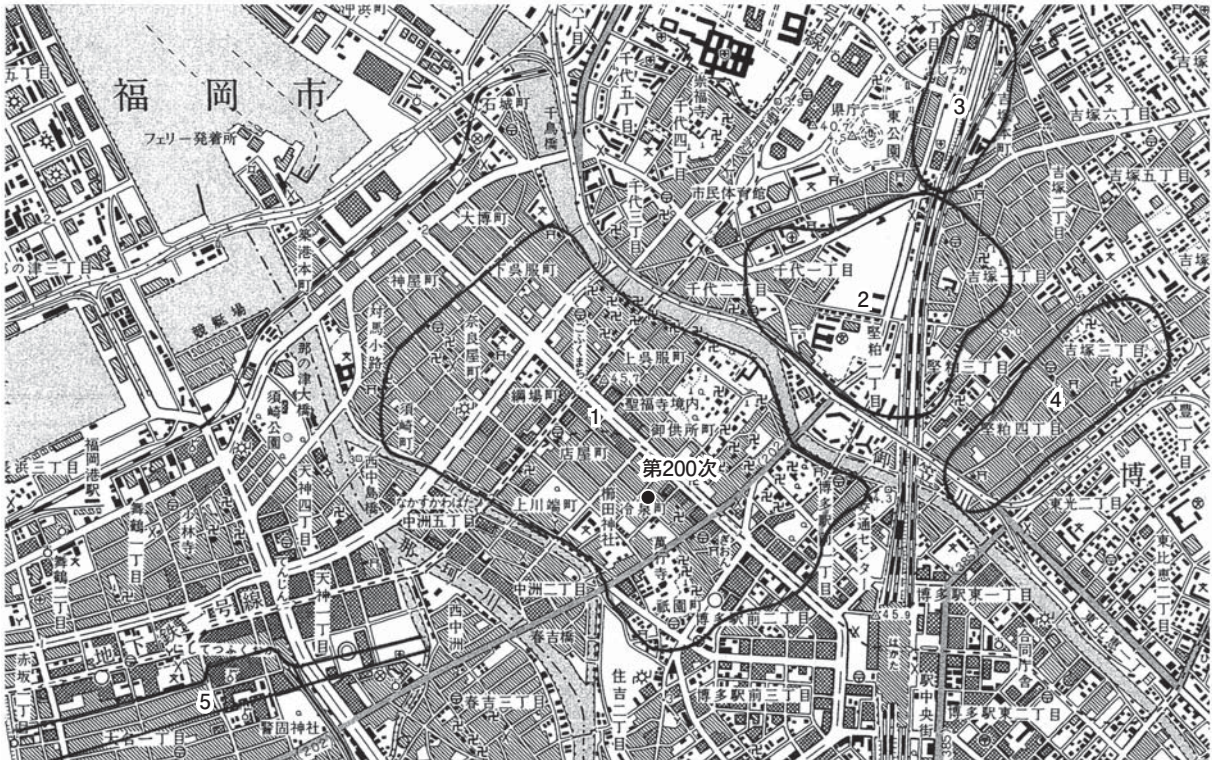
表１　各遺構出土動物遺存体一覧 …… 54

図　版　目　次

PL.1　(1) 第1面全景（南から）　(2) 第1面北東側（南から）……55
PL.2　(1) 第1面北西側（南から）　(2) SE001（南から）　(3) SE002検出状況（北西から）
(4) SE002井筒検出状況（南から）　(5) SE002瓦井筒検出状況（北東から）……56
PL.3　(1) 第2面北側全面（南から）　(2) 第2面南側全景（西から）……57
PL.4　(1) 北東側井戸群検出状況（南東から）　(2) SE336（北東から）　(3) SK064（南から）
(4) SK100（西から）　(5) SK137（南から）　(6) SK103（東から）
(7) SK113（南から）……58
PL.5　(1) SK236（南から）　(2) SK242（南から）　(3) SK286（南東から）
(4) SX171礫群（南から）　(5) 第3面北側全景（南から）……59
PL.6　(1) 第3面南側全景（西から）　(2) SK236・321、SE380（南から）……60
PL.7　(1) SE133断面など（南から）　(2) SE176・177（北から）　(3) SE280（北から）
(4) SK321遺物出土状況（南東から）　(5) SK321完掘（西から）　(6) SC233（西から）
(7) SC417（東から）　(8) 東側土層（西から）……61
PL.8　各面出土遺物、銭貨……62

博多200次調査基本情報

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
HKT-200	1339	福岡市博多区冷泉町222～225	326㎡	228㎡	社屋ビル建設	2014年2月18日～6月20日	吉武学、山崎龍雄、佐々木蘭貞



1．博多遺跡群　2．堅粕遺跡　3．吉塚本町遺跡　4．吉塚遺跡　5．福岡城肥前堀

Fig.1　博多遺跡群と周辺の遺跡（1/25,000）

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市博多区冷泉町222～225における社屋建設の為の埋蔵文化財の有無についての照会があり、福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課では、平成25（2013）年10月15日付けでこれを受理した（審査番号25-2-767）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれており、確認調査を行った結果、現地表下140㎝で遺構を確認した。このため、遺構の保全などについて申請者と協議を行ったが、社屋建設工事による埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。平成26年１月21日付けで九州リオン株式会社を委託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、同年２月20日から発掘調査を開始した。調査は６月20日まで実施し、翌平成27年度に資料整理および報告書作成を行った。

調査にあたっては、遺構面までの廃土の鋤取りと持ち出し、安全対策、現場事務所の設置などの条件整備について、委託者の協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

２．調査の組織

調査委託　九州リオン株式会社

調査主体　経済観光文化局（発掘調査：平成25～26年度、資料整理・報告書作成：平成27年度）

調査総括　文化財部埋蔵文化財調査課長　宮井善朗（25年度）、常松幹雄（26～27年度）
同課調査第１係長　常松幹雄（25年度）、吉武　学（26年度）
同課調査第２係長　榎本義嗣（27年度）

調査・整理担当　同課主任文化財主事　吉武　学（25年度）
同課　文化財主事　山崎龍雄（26・27年度）
同課埋蔵文化財調査員（嘱託）　佐々木蘭貞（25・26年度調査）

庶　務　埋蔵文化財審査課　管理係長　和田安之（25年度）、内山広司（26年度）
大塚紀宜（27年度）
管理係　横田　忍（25・26・27年度）

事前審査　埋蔵文化財審査課事前審査係長　加藤良彦（25年度）、佐藤一郎（26・27年度）
主任文化財主事　佐藤一郎（25年度）、池田祐司（26・27年度）
文化財主事　森本幹彦（25年度）、板倉有大（26・27年度）

整理補助員・発掘作業員　古賀美江、萩尾朱美、浅井伸一、今井純江、上野美知子、梅野真澄、岡村まどか、久保サヨ子、坂口寿美子、柴田喜八郎、柴田春代、辻節子、中島秀司、枦山恵子、松本順子、三谷朗子、満田隆、安武陽子、山下直美

Ⅱ　遺跡の調査の概要

１．遺跡の立地と歴史的環境（Fig.1）

博多遺跡群は博多湾を臨む海浜部に立地し、中世都市博多として国内でも著名な遺跡である。市内で有数の大遺跡で各種開発に伴う調査も多く、報告書も多数刊行されている。それらの報告書で、立地や歴史的環境については詳細に述べられているので、本報告では詳細な記述は割愛する。

遺跡は博多浜と息浜の２か所の砂丘上に立地する。遺跡の歴史は博多浜部が古く、弥生時代から古代の遺構が確認されている。甕棺墓や住居跡などが祇園町や御供所町一帯で検出されている。古墳時

代も同様で、前方後円墳が第28次調査地点で検出されている。古代も博多浜では、帯金具や、墨書土器、硯など、官人の存在を予想させる遺物が出土しており、古くから鴻臚館関連の施設があったのではないかと言われてきた。中世は博多遺跡群の中心となる時代である。博多綱首の時代で中国（宋）商人が博多に居住し、東アジア各地との貿易を行い、多くの外来の文物が将来する。鎌倉時代後期、世界帝国の蒙古が文永と弘安年間の２回日本に襲来し、博多は壊滅的な破壊を受ける。最初の文永の役後、息浜の砂丘上に、石築地（元寇防塁）が築かれる。再度の襲来に備えるため、異国警護を兼ねた鎮西探題が博多に置かれる。室町・南北朝期以降、息浜部の勃興・発展が著しく、遺跡の主体は息浜部に移る。博多は大内氏、大友氏の有力守護大名の管理するところとなり、大名の庇護のもと、博多商人が東アジア諸国と交易を行うが、戦国期になると、博多が北部九州の有力大名の争いの舞台となり、度々焼き討ちにあい荒廃するが、天正15年の豊臣秀吉による島津討伐後、秀吉により博多の再整備がなされ、秀吉の大陸出兵の拠点となる。江戸時代以降は、1600年の関ケ原合戦の恩賞として筑前国主となった黒田氏によって、福岡城下町と博多は双子的都市として整備されていく。

２．調査の概要（Fig.2・3）

本調査区は博多遺跡群の中央部やや南側、博多浜北部に位置する。櫛田神社より北東約150m離れた地点にある。近代的ビルが建ち並ぶ大博通りからはずれた狭い路地に面し、古い博多の面影をまだまだ残す場所である。調査は試掘成果に基づき、深さ1.5mまで表土を重機で掘り下げ、その廃土は場外搬出した。調査は調査区を南北二分割し、調査中の廃土を反転し作業を行った。遺構面までの土層は試掘成果によれば、地表から0.4mがアスファルト・バラスなど近現代の地盤面、以下1.4mまでが暗褐色土で木炭や焼土などが含まれる近世から近代の層である。遺構が確認できるのは深さ1.6m位からということで、深さ1.5m迄表土除去を行うこととなった。調査時における土層はFig.3の通り。

遺構面は試掘では４面ということで調査を行ったが、調査区全体に井戸など大型で深い遺構が多く、調査時の廃土量が多く、廃土の場内処理という条件から廃土置場に苦慮し、井戸など深い遺構は安全

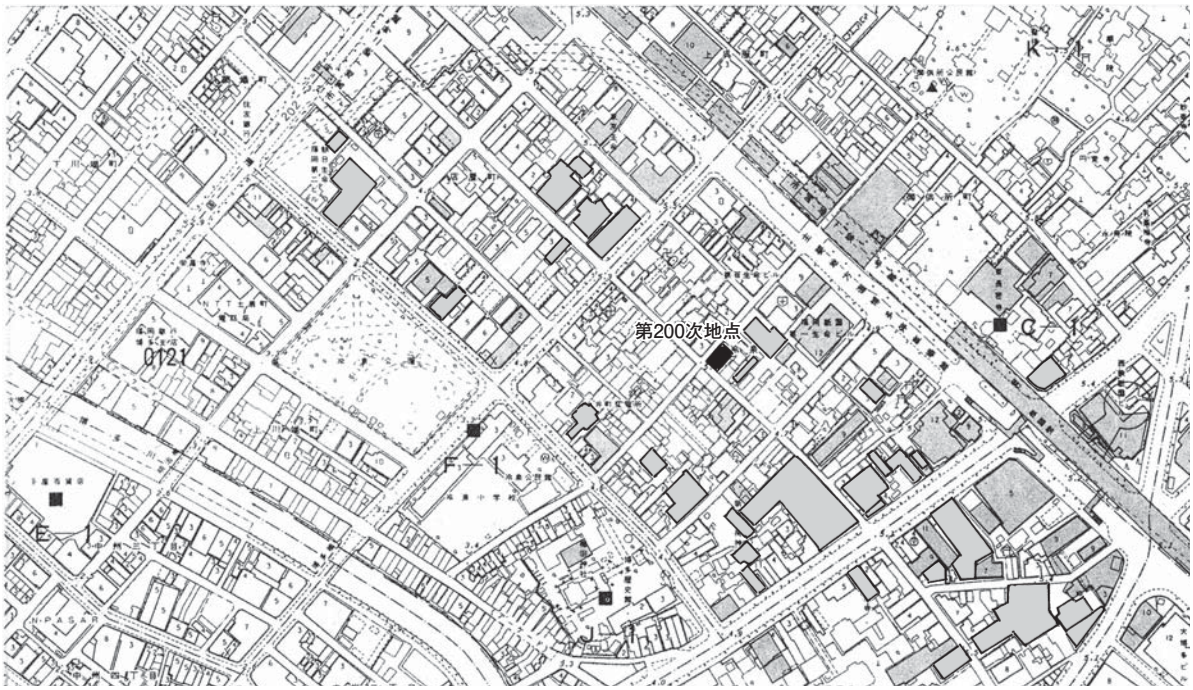
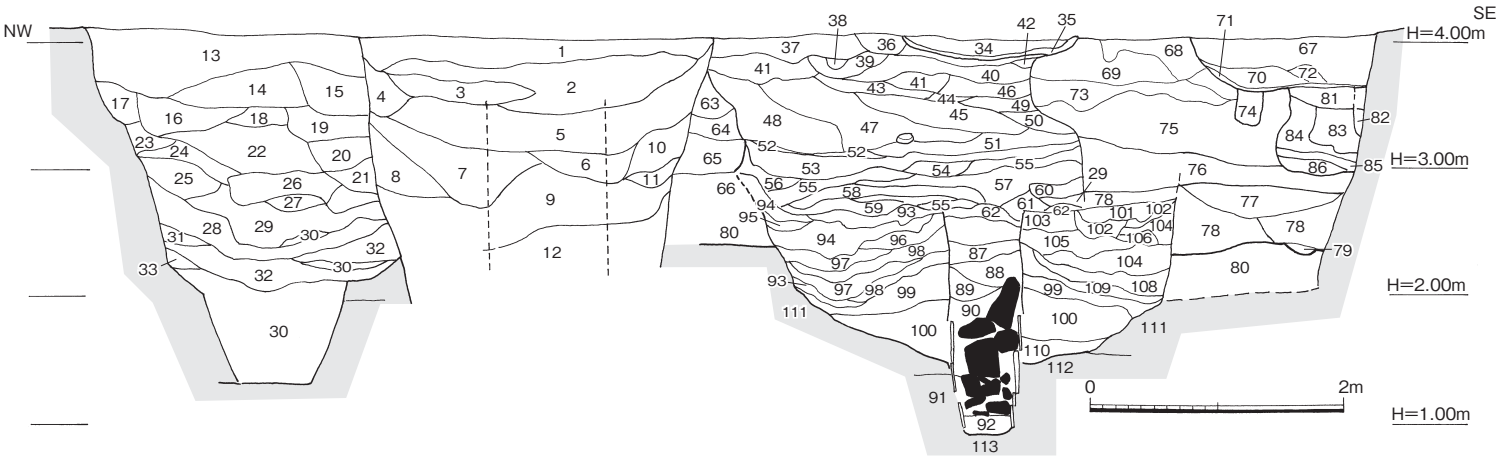


Fig.2　第200次調査地点位置図（1/6,000）



調査区北東壁土層
1．黒褐色土で炭化物・焼土を少量混入
2．灰黄色細砂で黒褐色土小ブロック混入
3．暗オリーブ褐色砂質土で焼土粒子・炭化物多く混入
4．暗灰黄色細砂質土に黒褐色土小ブロック混入
5．黒褐色土と焼土・炭化物ブロックの混合
6．灰黄色細砂で黒褐色土ブロック混入
7．暗オリーブ褐色砂と黒褐色土ブロック混入
8．鈍い黄色砂で黒褐色土小ブロック少量混入
9．黒褐色粘質土と黄褐色砂の混合
10. 黒褐色粘質土大ブロックで黄褐色砂少量混入
11. 黒褐色粘質土と黄褐色砂の混合
12. 浅黄色細砂で黒色粘土小ブロック少量混入
13. 黒褐色土（撹乱土）
14. 黒褐色土（マンガン粒子含む）
15. 黒褐色土で14よりやや明るい
16. 黒褐色粘質土
17. 黄灰色砂質土
18. 黒褐色砂質土
19. 灰味を帯びた黒褐色砂質土
20. 暗灰黄色砂質土
21. 灰黄色細砂で黒褐色土小ブロック混入
22. 暗褐色砂質土
23. 灰黄褐色砂質土（鉄分混入）
24. 黒褐色砂質土（粘性あり）
25. 褐色細砂で黒褐色土小ブロック混入
26. 明黄褐色砂で黒褐色土小ブロック混入
27. 26より黒褐色土ブロックの混入多い
28. 暗灰黄色砂で黒褐色粘土の小ブロック、東側では縞状に挟む
29. 黒褐色土（やや粘性あり）
30. 浅黄色細砂（少し汚れる）
31. オリーブ褐色細砂
32. 明黄褐色細砂で黄灰色細砂をブロック状に挟む
33. オリーブ褐色細砂に黒色土小ブロック少量混入
34. 黒褐色土でやや灰味で粗砂多く含む
35. 鈍い黄色粘土（遺構床面貼付粘土）
36. やや灰味帯びた黒褐色土で粗砂粒多く含む
37. 黒褐色土で炭化物小粒子少量混入
38. 暗灰黄色砂
39. 黄褐色砂で鉄分沈着、42をブロック状に混入
40. 灰黄褐色砂で黒褐色土小ブロック少量混入
41. 褐灰色砂で黒褐色土ブロック少量混入
42. 明黄褐色砂
43. 黒褐色土で暗灰黄色粗砂を薄く挟む
44. 暗灰黄色砂で黒褐色土薄く挟む
45. 暗灰黄色砂で黒褐色土小ブロックを挟む
46. 黄褐色砂で黒褐色土小ブロック少量混入
47. 黄褐色～暗灰黄色砂に黒褐色土小ブロック少量混入
48. 暗灰黄色中～粗砂で黒褐色土ブロック少量混入
49. 黄灰色砂と黒褐色土、黄褐色砂の混合
50. 暗灰黄色砂で黒褐色土小ブロック混入
51. 黒褐色土で黄褐色砂ブロック状に混入
52. 褐灰色砂で黒褐色土やや多く混入
53. 暗灰黄色細砂で黒褐色土小ブロック少量混入
54. 黄灰色細砂に黒褐色土ブロック少量混入
55. 暗灰黄色砂で黒褐色土小ブロック混入やや多い
56. 黒褐色砂質土で炭化物少量混入
57. 55より黒褐色土ブロックの混入少なく、やや明るい
58. 55より黒褐色土の混入少ない
59. 黒褐色土で灰黄褐色砂混入
60. 黒褐色土と暗灰黄色砂の混合
61. 黄褐色砂で暗オリーブ褐色土小ブロック混入
62. 黒褐色土
63. 黒褐色土
64. 暗オリーブ褐色砂質土
65. 64にオリーブ褐色砂混入
66. 黒褐色土（細砂混じり）
67. やや灰味強い黒褐色土で砂礫・炭化物・焼土混じり
68. 67より暗い
69. 黒褐色土で砂礫・炭化物・焼土混じり
70. 68で下に硬い鉄分層を含み、やや砂質
71. 明黄褐色土で鉄分多く含む
72. 暗褐灰色粘質細砂（シルト質、鉄分含む）
73. 暗褐灰色砂質土
74. 67で上部に鉄分層沈着する
75. オリーブ褐色砂（粒子比較的細かい）
76. 暗灰黄色細砂
77. 黒褐色砂
78. オリーブ褐色砂（鉄分沈着）
79. 黒褐色砂
80. 明黄褐色細砂（明るく粒子細かい）…風成砂
81. 暗黄灰色砂質土
82. 暗灰黄色砂で81を混入
83. 黒褐色土で炭化物・焼土ブロック混入(やや砂質)
84. 83より炭化物・焼土ブロックの混入少ない
85. 灰黄色細砂
86. 黄灰色細砂（やや締る）
87. 黒褐色土で炭化物混入
88. 暗褐灰色砂で黒色土粒子わずかに混入
89. 黒褐色土で炭化物混入
90. 88より黒色土粒子の混入多い
91. 黒褐色粘質土（灰味おびる）
92. 灰黄褐色細砂（少し汚れる）
93. 浅黄色砂で黒褐色土を薄く挟む
94. 黒褐色土で浅黄色砂ブロック少量混入
95. 94より浅黄色砂ブロック多く混入
96. 浅黄色砂で黒褐色土を縞状に薄く挟む
97. 94に浅黄色砂ブロック状に混合
98. 黒褐色土と浅黄色砂の混合
99. 暗灰黄色細砂で黄灰色細砂、縞状に挟む
100. 暗灰黄色細砂で黒色土粒子少量混入
101. 浅黄色細砂で黒褐色土薄く挟む
102. オリーブ褐色砂と黒褐色土ブロック混入
103. オリーブ褐色砂で浅黄色砂ブロック混入
104. 黒褐色砂質土と黄褐色砂の混合
105. 暗灰黄色で黒色土小ブロック混入
106. 黄褐色砂で黒色土を薄く挟む
107. 黒褐色砂と暗灰黄色砂の混合
108. 暗灰黄色細砂で黒色土小ブロック少量混入
109. 浅黄色砂で黒色土少量混入
110. 暗灰黄色細砂（汚れる）
111. 浅黄色細砂（下粒子が粗く互層状となる）
112. 明黄褐色細砂
113. 明黄褐色粗砂礫（鉄分沈着）湧水あり

Fig.3　調査区北東壁土層（1/60）

対策に配慮して、十分な掘り下げが出来なかった部分もある。各遺構面の時期は、第1面が江戸時代から室町時代、第２面が中世前半、第３面が古代から中世前半、第４面が弥生時代後期から古墳時代頃である。古い時期の遺構ほど井戸によって破壊を受けており、残りは悪かった。検出した遺構は井戸、土坑、竪穴住居跡、ピットなどである。当地には水脈があったようで、各時期に井戸が掘られる。井戸は切り合いがあり、実際には報告書に掲載した以上にあったと思われる。第２面以降の井戸の報告については、調査の段階では明確な遺構範囲が確認できず、別番号を付し遺物を取り上げているので、報告書では遺構上に重なる複数の遺構は整理してまとめている。遺物も一括して報告している。出土遺物はパンコンテナで150箱に及ぶが、時間や報告書ページ数の制約から、遺構出土遺物の整理を主点に行い、遺構面掘り下げ中に出土した遺物については、特別なものを除いて、取り上げ、実測の図化は出来なかった。

Ⅲ　調査の記録

１．第１面の調査

（１）概要（Fig. 4、PL. 1）

調査前は駐車場で、その前は九州リオン株式会社の社屋と駐車場だった。さらにその前は煉瓦造りの建物があったようで、地表から1.5mまでは煉瓦等の瓦礫を多数含む攪乱土である。近隣住民によると、戦前は防火水槽と相撲の土俵があったという。試掘調査では地表下2.4mに地山砂層を確認しており、４面に分けての調査を予定した。排土場内処理のため南西側を排土置き場とし、この部分は反転調査する予定であったが、第１面については近世遺構が大半を占めたため反転部分の調査を省略した。

第１面の調査は２月18日の表土鋤取りに始まり、まず地表から1.5mまでの攪乱土を搬出した。25～28日に条件整備等を行い、３月３日から作業員による発掘調査を開始した。19日には第１面の全景撮影を行い、第２面の調査を開始した。

第１面の主な検出遺構は、中世後期の井戸１、土坑13、近世の井戸２（うち１は瓦井戸）、土坑少数、近代の井戸２以上、煉瓦建物基礎、地下室２（一つは防空壕か）である。また攪乱坑から黒田家の家紋である藤巴紋軒丸瓦863が出土したほか、弥生時代中期土器、奈良時代須恵器等も出土した。

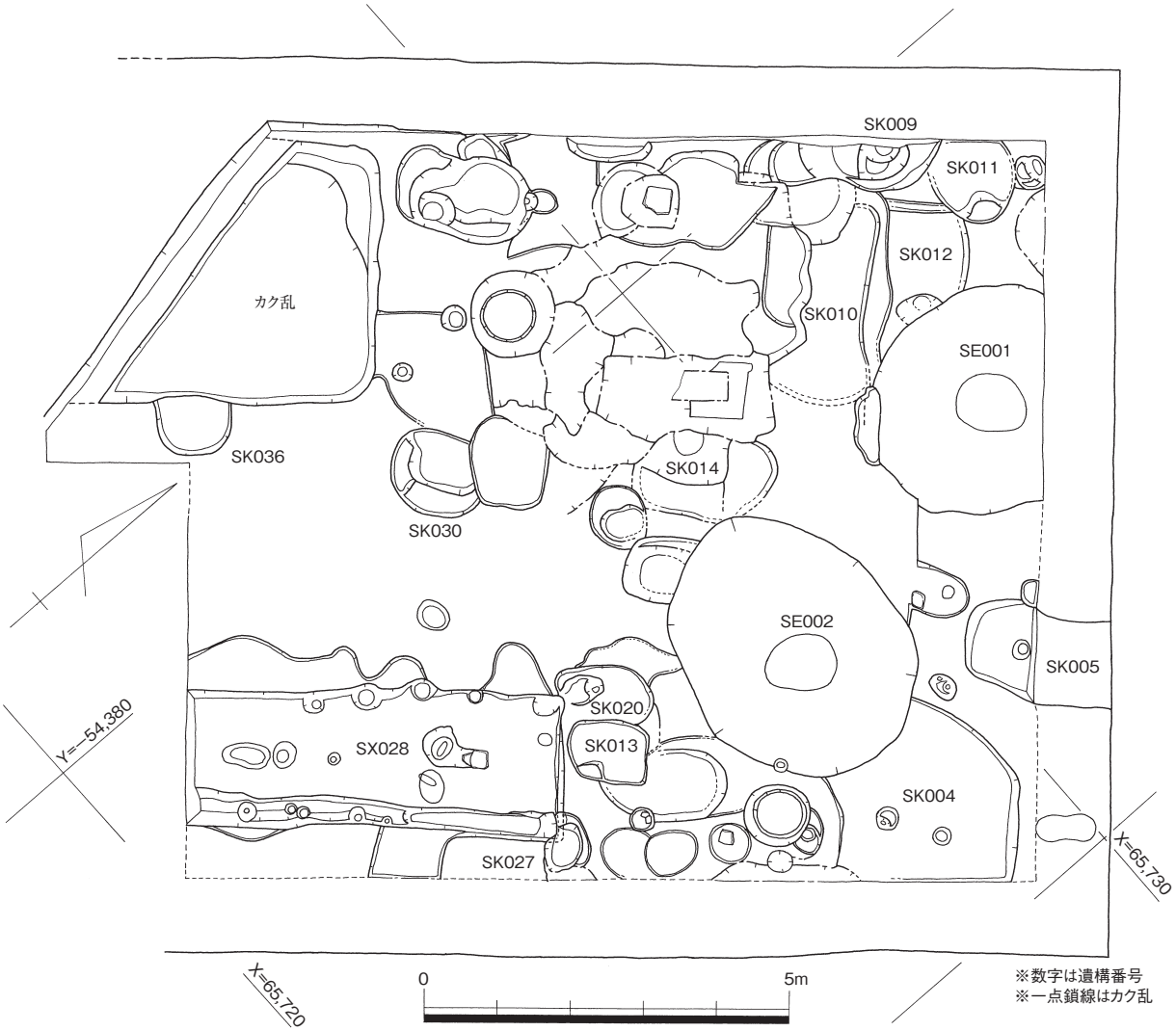


Fig.4　第１面遺構全体図（１/100）

（２）井戸

井戸 SE001（Fig.5、PL.2-1・2）

調査区の北東部に位置する。土坑 SK012を切る。井戸掘り方は調査区壁にかかるが、井戸側は調査区内におさまる。掘り方平面形は円形プランをなし、南北径3.3mを測る。断面逆台形を呈する。調査区壁に接するため、安全上の配慮から底まで下げていない。井戸側は桶で、径75cmの円形を呈し、木質は残らない。

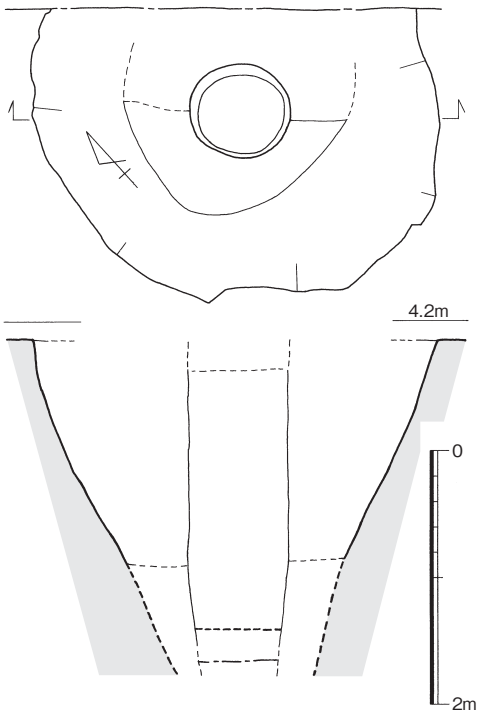


Fig.5　井戸 SE001（1/60）

SE001出土遺物（Fig.6）

弥生土器、古墳時代土師器、中世土師器、土師質・瓦質土器、瓦器、中国産陶磁器（白磁、越州窯・龍泉窯系青磁、青花）、国産陶磁器、石製品がコンテナ２箱出土した。

１～４は土師器小皿で、４は体部が直立する。**５～８**は土師器坏である。**９**は古墳時代の土師器高坏で、ミガキを施す。**10**は土師質土器火鉢か。**11**は同じく土師質土器で鍋。**12**は瓦質土器擂鉢。**13～16**は国産陶器である。**13**は甕で、外面から口縁内面に施釉する。**14・15**は擂鉢で、14は内面に煤が付着し煮炊きに使用している。**16**は鉢で、体部外面下半は露胎である。**17～21**は中国産白磁である。**17・18**は碗の小片である。**19**は器種不明の体部小片で、外面に毛彫りで施文する。**20**は皿の底部で、高台を削ってアーチ状とし、外底露胎。**21**は碗の底部で、外底露胎。縁辺部を打ち欠いて遊具に使用している。**22**は越州窯系青磁大碗で、平高台の外縁と内底に目跡が付く。体部外面下半露胎。**23**は龍泉窯系青磁碗で、細身の鎬連弁文を施す。**24**は龍泉窯系青磁大皿で、ヘラ彫りで施文する。**25**は青花大皿である。**26**は滑石製石鍋の破片に加工を施した石製品である。**27**はガラス小玉である。

中世末から近世初頭の井戸とみられる。

井戸 SE002（Fig.7、PL.2-3～5）

調査区の東部に位置する。周囲の遺構を全て切る。掘り方平面形は東西に長い楕円形で、長径3.8m、短径3.1m。断面逆台形を呈する。井戸側は瓦で、径75cmの円形を呈する。底面近くまで掘り下げたところで、この井戸に切られている別の井戸を検出した。この井戸は桶側井戸で、SE002よりも底面がやや上位にある。井戸側は円形で径75cm。

SE002出土遺物（Fig.8～10）

弥生土器、古式土師器、古代土師器、須恵器、国産陶磁器（陶器、白磁、青磁、染付）、中世土師器（小皿・坏）、土師質・瓦質土器、瓦器、中国産陶磁器（白磁、青白磁、同安窯系・龍泉窯系青磁、陶器）、土製品、石製品がコンテナ24箱出土した。

28は弥生土器甕。**29**は古式土師器の小型丸底で、磨滅が著しいが内面にヘラ削り痕を留める。**30～32**は古代の土器で、**30**は土師器甕、**31**は須恵器坏、**32**は緑釉陶器碗である。**33～40**は土師器小皿。**41～46**は土師器坏。**47**は東播系須恵器の片口鉢で、使用により内面が磨滅する。**48・49**は中国産白磁碗。**50**は青白磁もしくは白磁の梅瓶。頸部内面以下は露胎。**51**は青白磁の合子で、外面に型押に

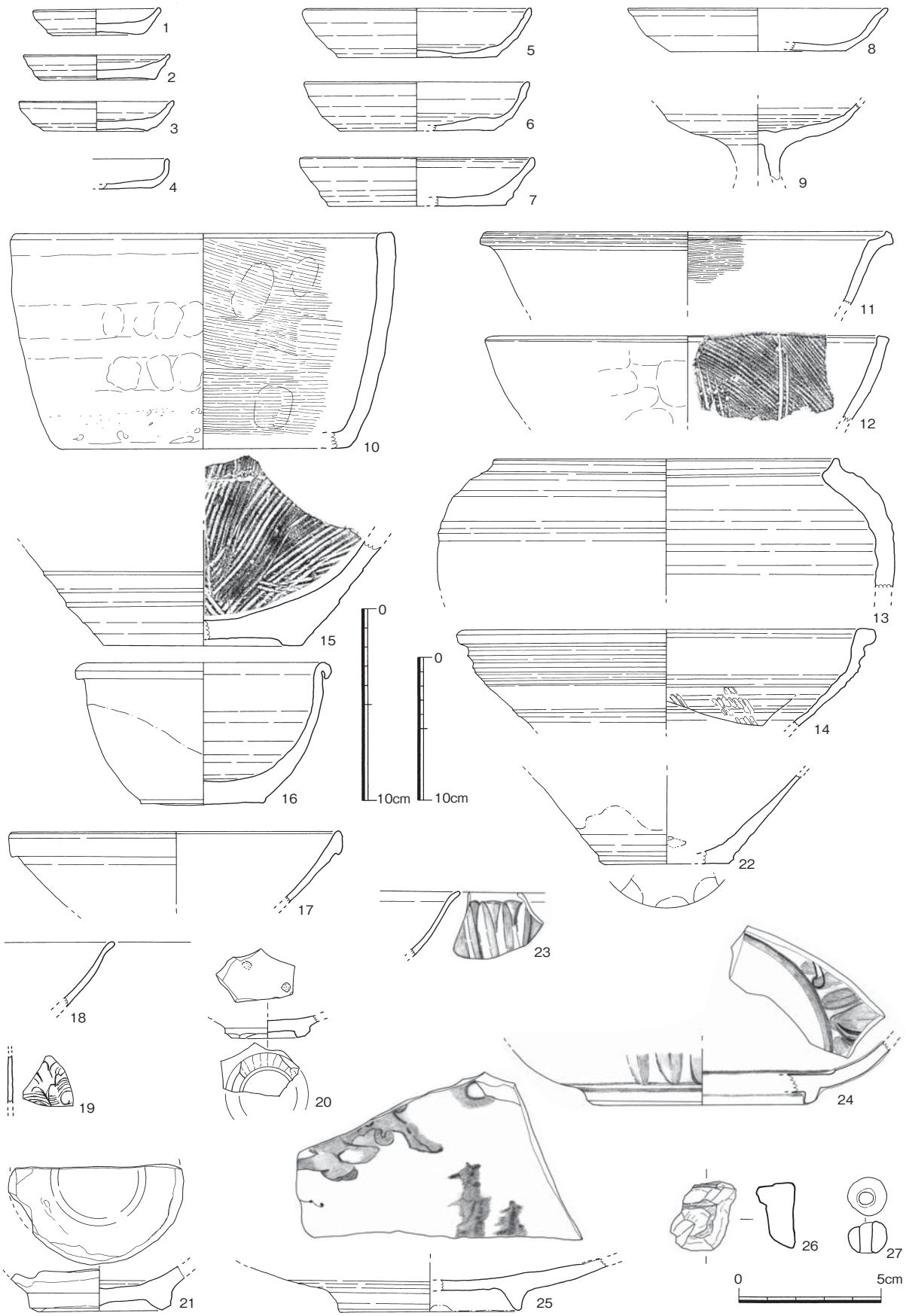


Fig.6　SE001出土遺物（27は1/2、11～14・22・24は1/4、他は1/3）

よる梅花文を施す。52～59は中国産青磁である。52は同安窯系青磁皿で、内面に櫛描文を入れる。53は碗で外面にヘラ彫りで施文する。外面露胎で、見込みは輪状釉剥ぎする。54～59は龍泉窯系青磁である。54は碗で見込みにヘラ彫りで施文し、外底に墨書があるが内容不明。55も碗で体部外面に不鮮明な連弁文を入れる。56は皿で内外面にヘラで施文する。57は稜花大皿で、内面に草花文を施す。58も大皿で、内面にヘラ彫りで施文する。59は腰折れ皿。60は青磁香炉で国産品か。61は中国産陶器の黄釉鉄絵盤で、内底に施文し外底露胎。62は中国産陶器の瓶。63～82は国産陶磁器である。63は唐津陶器腰折れ皿。64は施釉陶器碗。65は肥前系施釉陶器碗。66・67は現川焼の碗で、白泥土を刷毛塗りする。68は施釉陶器碗で全釉、畳付に目跡がある。69は唐津焼の大鉢である。70は施釉陶器の土瓶で、接合しないが注口が付く。釣り手が剥がれた痕がある。体部外面に白泥土で施文し、外面黒色釉が氷裂により亀甲状に細かくはじける。71・72は肥前系施釉陶器の平灰である。73は国産施釉陶器の瓶類。74は肥前系の白磁坏。75も同じく小坏。76～82は肥前系染付で、76～80は皿、81はそば猪口。82は銅板刷り印判染付碗で明治期のものであろう。

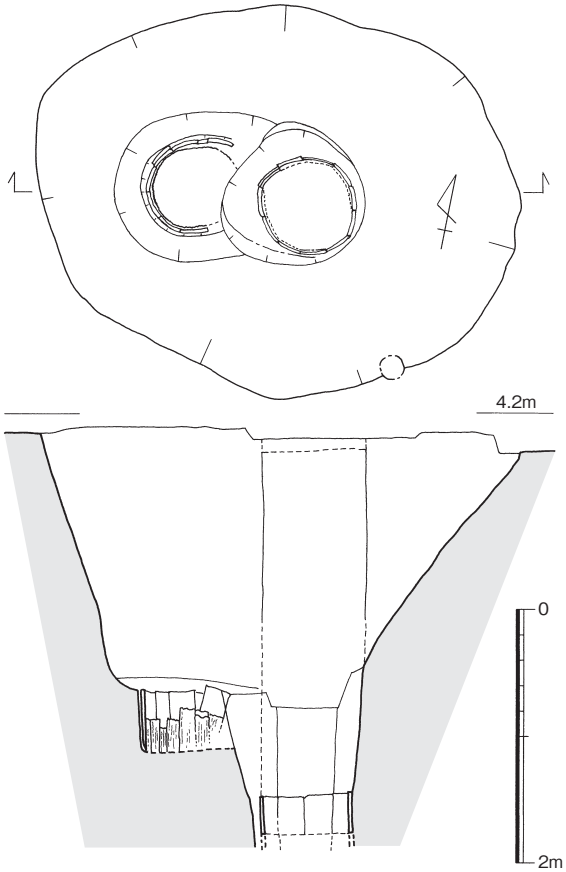


Fig.7　井戸 SE002（1/60）

83はフイゴ羽口、84・85は土錘である。86は長径2.8㎝の黒色の丸石で、碁石か。87～89は滑石製石鍋である。90は挽臼の上臼で、底面は著しく磨り減ってスリ目が残らない。側面には把手用の方形孔が残る。91は軒平瓦小片で、瓦当に均整唐草文を配する。92・93は井戸側に用いられた平瓦である。他にも多数出土したが、長さ25.0～28.0㎝、幅21.0～23.0㎝と法量にバラツキがあり、微調整を行いながら井戸側を組み上げたのものと考えられる。

明治期に使用・廃棄された井戸であろう。

（３）土坑

土坑 SK004（Fig.11）

調査区の南東隅に位置する。南東側は調査区外に伸び、西側は近代井戸 SE002に、南側はコンクリート井戸に切られ、全形不明。東西幅2.4ｍ以上。断面逆台形で深さ20㎝。

SK004出土遺物（Fig.12）

弥生土器、古式土師器、古代須恵器、中世土師器、中国産陶磁器（青磁）がコンテナ１箱出土。

94は弥生土器甕、95は古式土師器高坏、96は古代の須恵器坏身である。97～100は土師器小皿、101～105は土師器坏。106・107は龍泉窯系青磁皿。108は青磁碗の底部片で見込みに印花文を施す。縁辺を打ち欠いており遊具に転用したものであろう。中世後期の土坑であろう。

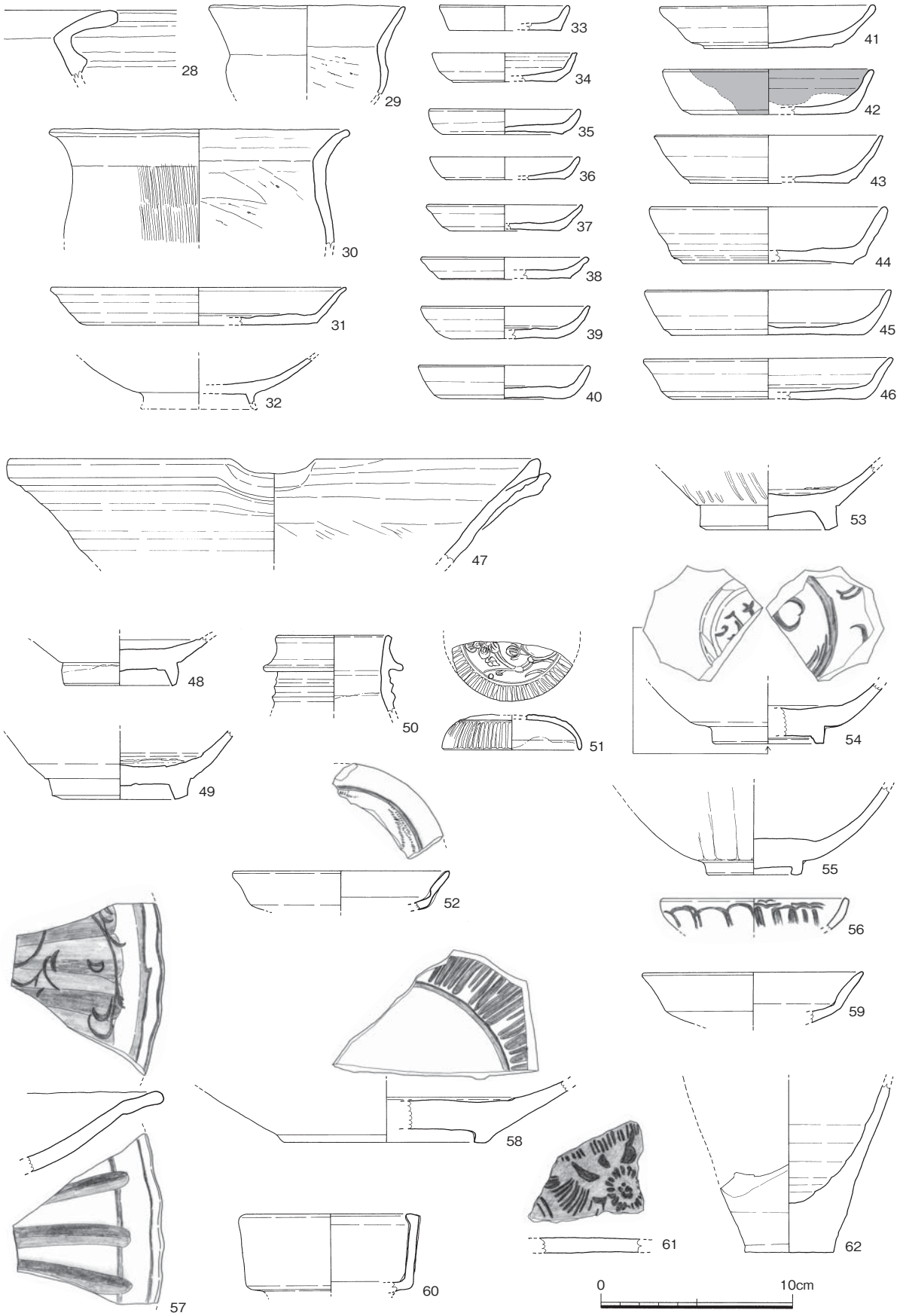


Fig.8　SE002出土遺物①（1/3）

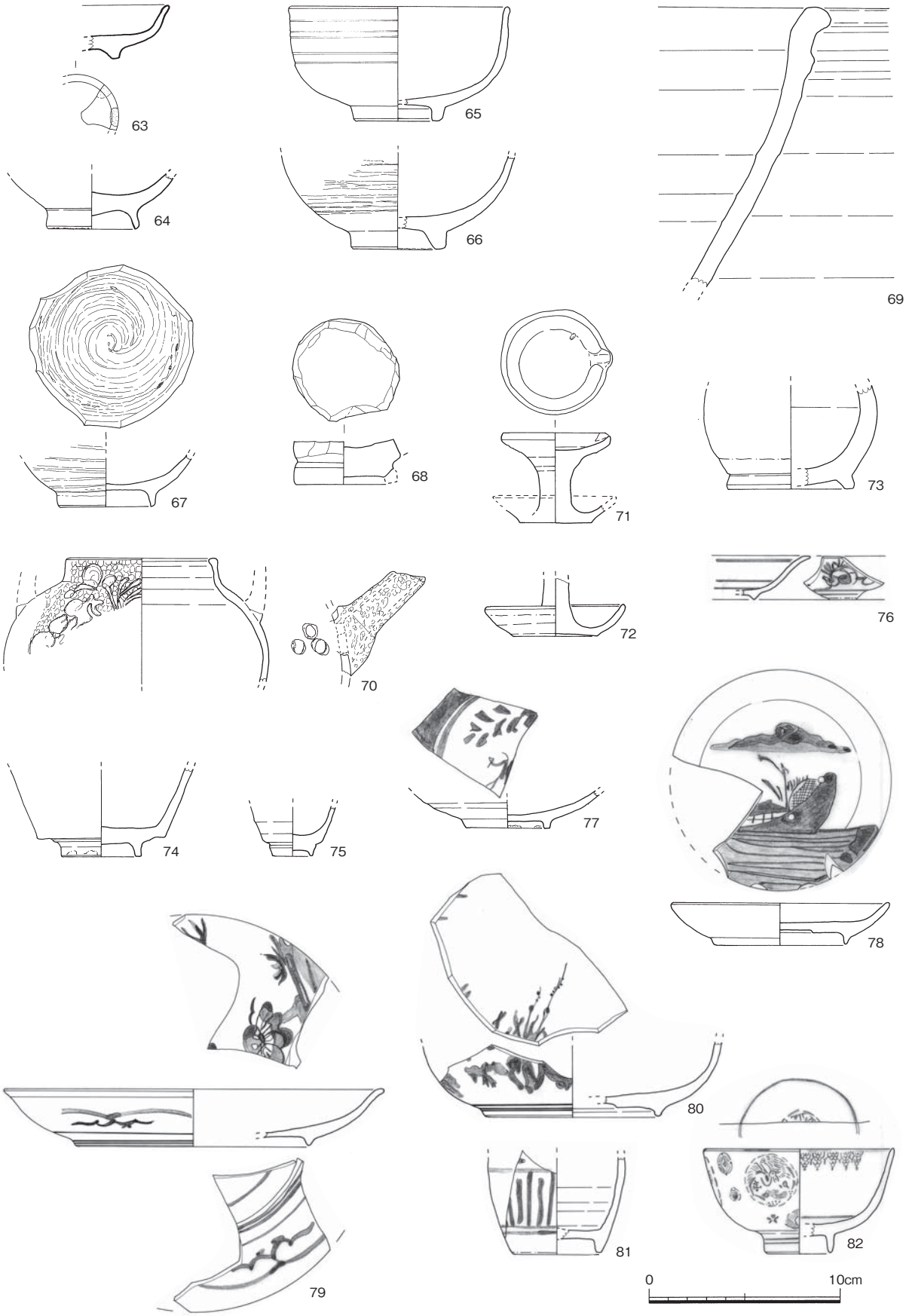


Fig.9　SE002出土遺物②（1/3）

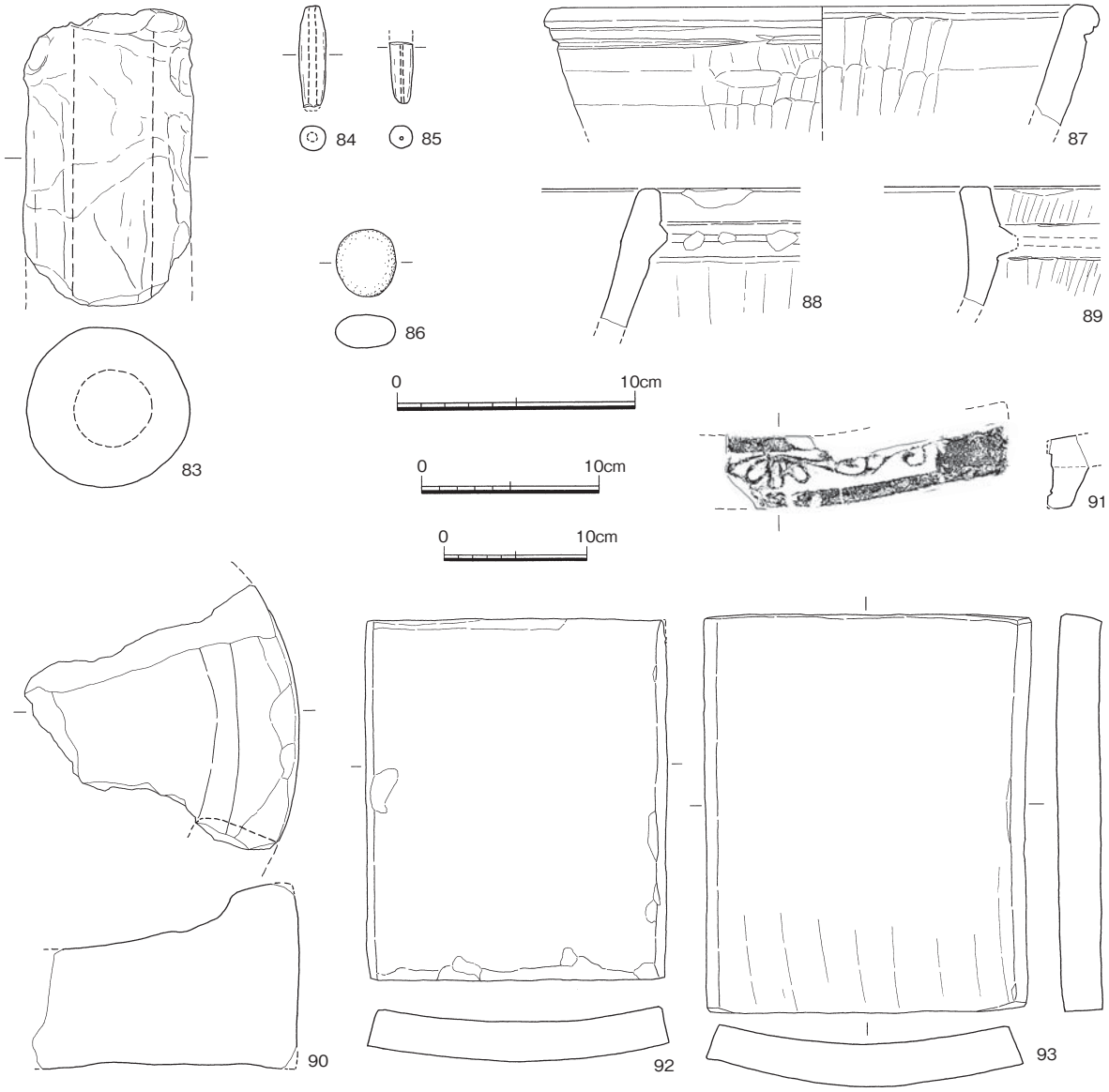


Fig.10　SE002出土遺物③（90・91は1/4、92・93は1/5、他は1/3）

土坑 SK005（Fig.11）

SK004の北に隣接する。東側は調査区の引き部分にあたるため未掘で、さらに東の調査区外に伸びている。長径2.0m以上、短径1.2m。断面逆台形をなし、深さ30cm。底面に小ピットひとつがある。

SK005出土遺物（Fig.12）

中国産陶磁器（青磁・青白磁）、瓦が少量出土した。**109**は龍泉窯系青磁碗で外面に鎬連弁文を施す。**110**は青白磁灯火器か。**111**・**112**は瓦玉である。中世遺構だが詳細時期不明。

土坑 SK009（Fig.11）

調査区の北隅に検出した。楕円形プランの土坑とみられるが、1/2は調査区外にあるため未掘である。長径2.7m以上となる。断面形は皿状を呈しながら段状に落ち、最深部で遺構面から60cmを測る。

SK009出土遺物（Fig.12）

中世土師器、中国産陶磁器（白磁・同安窯系青磁）が少量出土。**113**・**114**は土師器小皿。**115**は白磁碗で、見込みを輪状釉剥ぎし、外底に墨書があるが判読不能。**116**・**117**は同安窯系青磁碗である。

土坑 SK010（Fig.11）

SK009の南に接し、これに切られる。南西側は攪乱坑に大きく破壊される。南東壁はプランが不明瞭である。隅丸長方形プランとみられ、長径3.0m以上、短径1.2m以上。断面形は逆台形状で、深さ15㎝。北西側の深い部分は別の土坑の可能性がある。遺構検出面から深さ45㎝を測る。

SK010出土遺物（Fig.12）

土師器、須恵質土器、国産陶器、土師質土器、中国産陶磁器（白磁・青磁）、近世陶器、石製品がコンテナ４箱出土した。**118～121**は土師器小皿、**122～126**は土師器坏。**127**は須恵質土器鉢。**128**は常滑焼甕。**129**は土師質土器捏鉢。**130**は唐津焼小片。**131**は白磁皿、**132・133**は白磁碗。**134**は龍泉窯系青磁皿、**135**は同じく碗。**136**は石製硯。**137・138**は滑石製石鍋。近世遺構であろう。

土坑 SK011（Fig.11）

SK009の北側に隣接し、これに切られる。楕円形プランの土坑であるが、北西側は調査区壁にかかるため未掘である。長径1.2m以上、短径1.2m。断面逆台形で、深さ30㎝。

SK011出土遺物（Fig.13）

土師器、中国産陶磁器（白磁）等がコンテナ２箱出土した。**139～142**は土師器小皿で、142は口縁の一部を押し上げる。**143～145**は土師器坏で、143は片口が付く。**146**は白磁碗。中世遺構であろう。

土坑 SK012（Fig.11）

SE001、SK010、SK011に囲まれ、これらに切られる。隅丸長方形プランの土坑とみられ、長径2.1m以上、短径1.3m。断面逆台形をなし、深さ65㎝。下層部分は第２面でSK043として調査を行った。

SK012出土遺物（Fig.13）

土師器、中国産陶磁器（白磁・青磁・青花）、朝鮮半島産陶磁器、瓦等がコンテナ３箱出土した。

147・148は土師器小皿。**149～152**は土師器坏で、152は墨書がある。**153・154**は白磁碗。**155**は朝鮮王朝青磁。**156～158**は青磁碗。**159・160**は明代青花。**161・162**は瓦玉。16世紀代の遺構か。

土坑 SK013（Fig.14）

調査区中央部の南壁寄りに検出した。隅丸長方形プランを呈し、長径1.1m、短径0.9m。断面逆台形で、深さ13㎝である。

SK013出土遺物（Fig.15）

土師器、土師質土器が少量出土した。**163**は土師器小皿、**164**は土師器坏。**165**は土師質土器捏鉢である。中世遺構であろう。

土坑 SK014（Fig.14）

調査区の中央付近に位置する。北西側を攪乱坑に大きく切られるが、楕円形プランか。長径2.0m、短径1.2m以上。深さ15㎝の断面逆台形をなし、西側が深く遺構検出面から最深部まで70㎝。

SK014出土遺物（Fig.15）

土師器、中国産陶磁器（白磁）、国産陶磁器（陶器、白磁、染付）、瓦がコンテナ２箱出土した。**166・167**は土師器小皿、**168・169**は土師器坏。**170**は常滑焼甕で接合しないがSK010の128と同一個体か。**171**は陶器の雪平鍋で、把手に人物像を型押しする。把手と器内面に異なる釉を施す。**172**は白磁碗。**173**は肥前系染付皿、**174**は同蓋である。**175**は瓦質の円盤状土製品。18世紀代の土坑か。

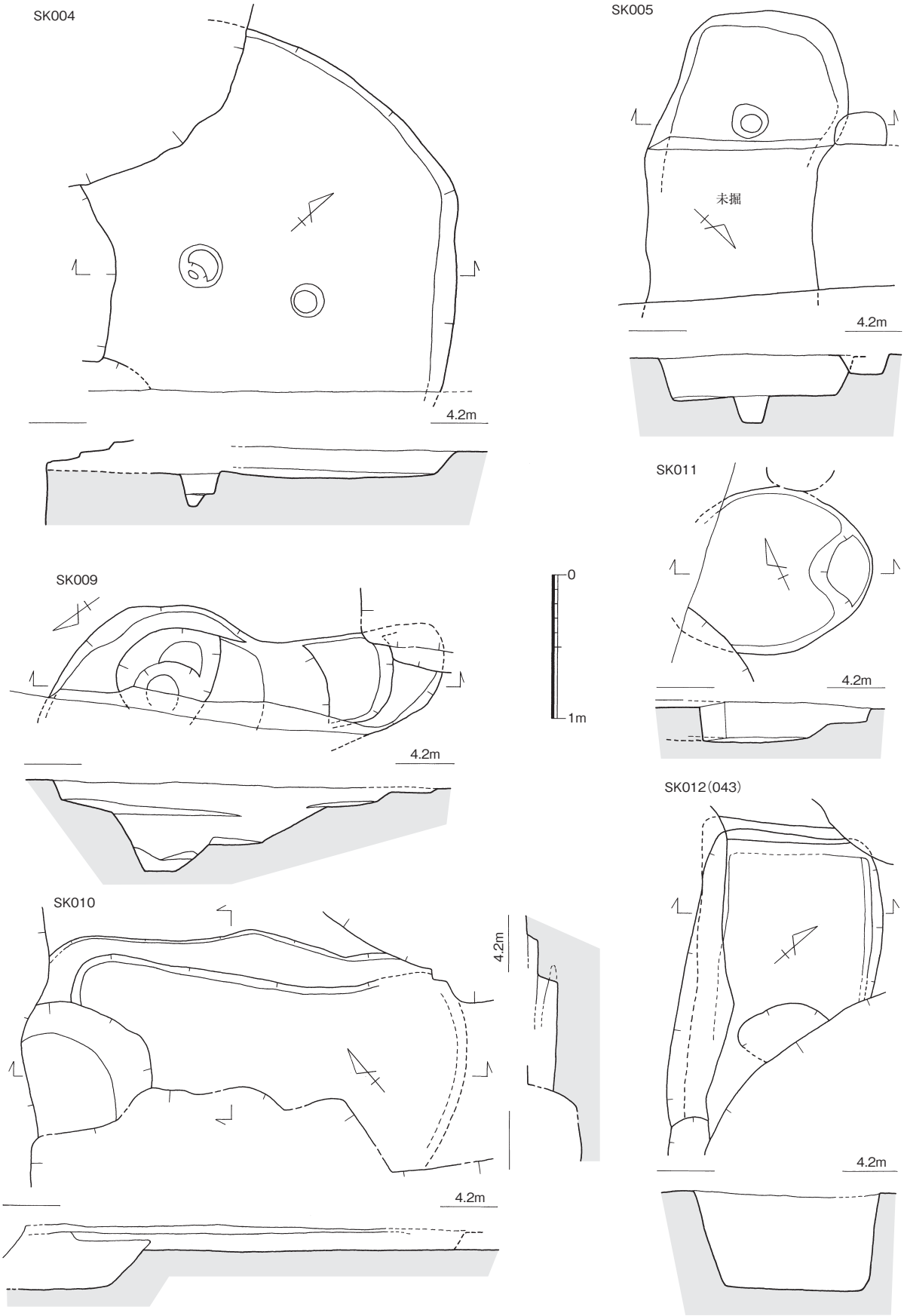


Fig.11　土坑 SK004・005・009～012（1/40）

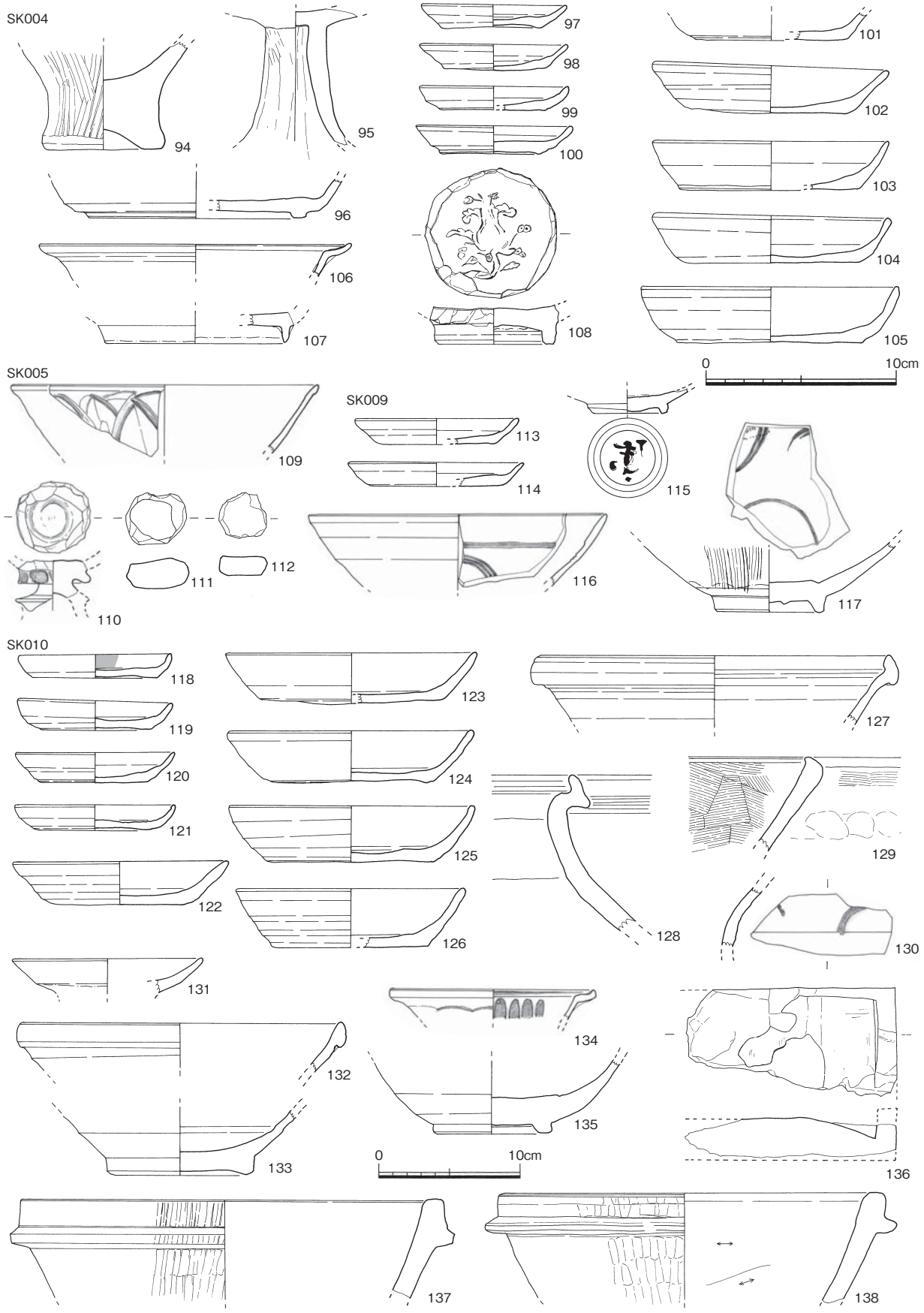


Fig.12　SK004・005・009・010出土遺物（127・137・138は1/4、他は1/3）

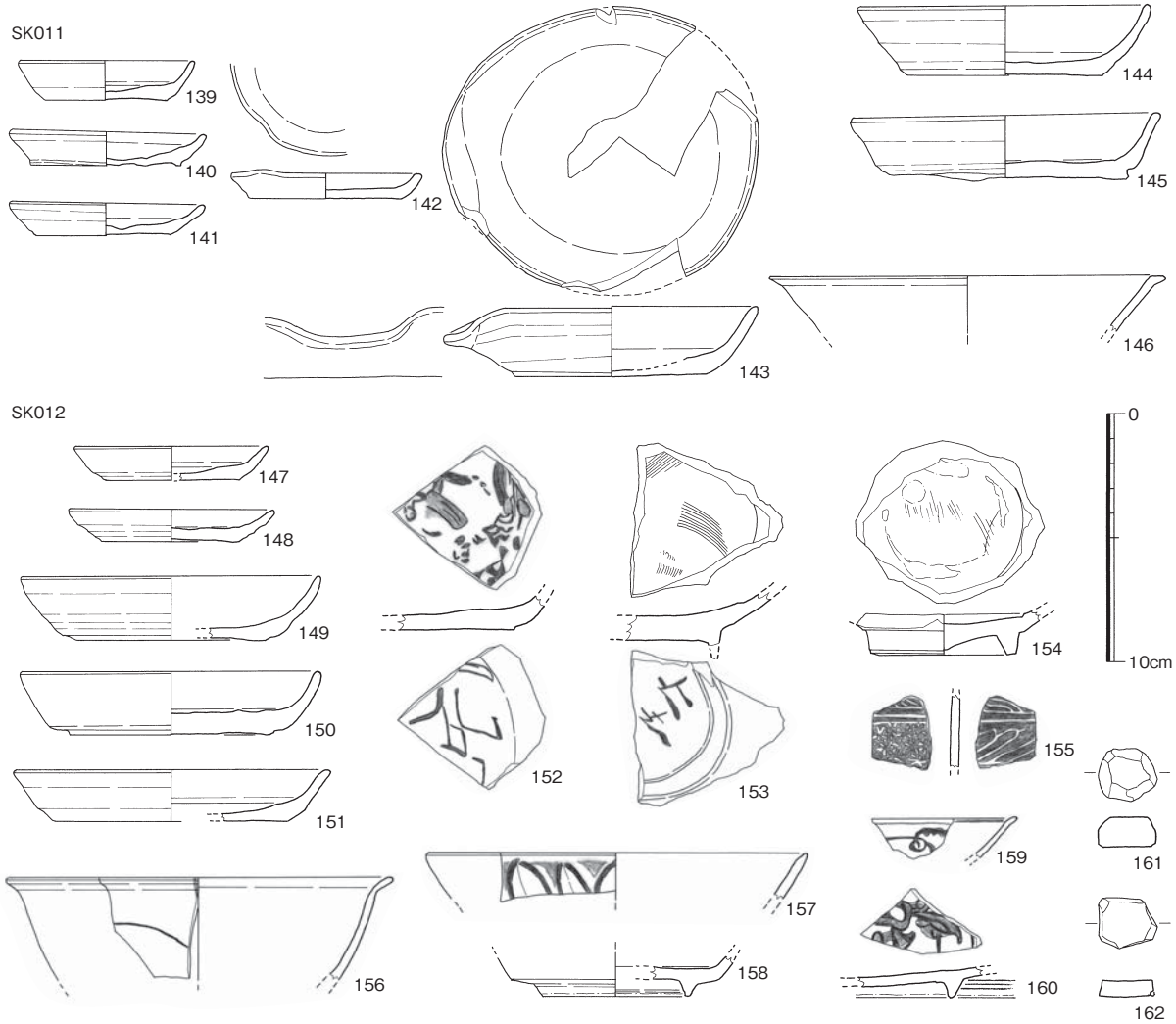


Fig.13　SK011・012出土遺物（1/3）

土坑 SK020（Fig.14）

SK013の北西に接し、これに切られる。南西側はSX028に切られる。不整な楕円形プランで長径1.3m、短径0.9m。断面逆台形で、深さ10cm。底面は平坦で、南西側に深さ15cmの不整な窪みがある。

SK020出土遺物（Fig.15）

土師器、中国産陶磁器（白磁）等がコンテナ１箱出土した。**176～180**は土師器坏。**181**は土製の火皿で二次加熱を受け変色する。**182**は白磁碗底部を加工した遊具である。中世遺構であろう。

土坑 SK027（Fig.14）

SK013の南東に位置する。楕円形プランで、長径0.8m、短径0.6m。断面逆台形で、深さ35cm。

SK027出土遺物（Fig.15）

土師器、中国産陶磁器等がコンテナ１箱出土した。**183・184**は土師器小皿、**185～187**は土師器坏。**188**は龍泉窯系青磁碗で鎬連弁文を施す。中世遺構であろう。

土坑 SK030（Fig.14）

調査区中央南西寄りに位置する楕円形プランの土坑で、長径1.4m、短径1.2m。断面逆台形で、北側が一段深い。最深部で遺構面から25cmを測る。

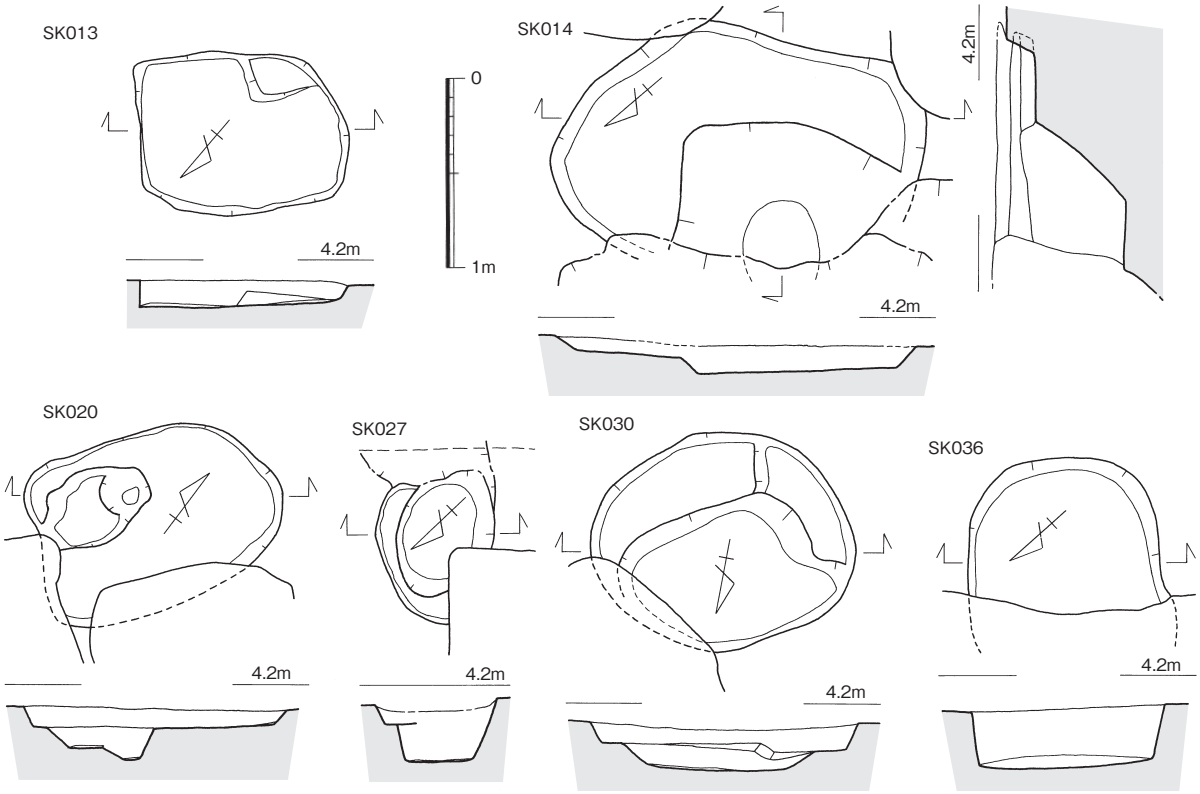


Fig.14　土坑 SK013・014・020・027・030・036（1/40）

SK030出土遺物（Fig.15）

土師器、中国産陶磁器（青花）等が少量出土した。**189**は土師器小皿。**190**は青磁溝縁皿。**191**は明代青花皿である。16世紀代の遺構であろう。

土坑 SK036（Fig.14）

調査区西壁近くに位置し攪乱坑に切られる。楕円形プランか。短径1.0m。断面逆台形で深さ30㎝。

SK036出土遺物（Fig.15）

土師器、瓦質土器、中国産陶磁器が少量出土した。**192**は青磁腰折れ皿。**193**は土師器坏。**194**は瓦質土器擂鉢。**195**は白磁小碗。**196・197**は白磁碗である。中世後半の遺構であろう。

不明遺構 SX028（Fig.16）

調査区南壁際に位置する。長方形プランの遺構で、南西側は調査区外へ伸びる。長径5.1m以上、短径1.9～2.0m。掘り方は箱形で深さ40㎝。底面は平坦で、長辺の両壁沿いに柱穴が並び、南東壁は連続して溝状をなす。床面中央にも浅い窪みが並び、うち一つには平坦な礫を置く。南東壁と北東壁の一部に板圧痕が認められ、板壁であったとみられる。博多区内で散見される防空壕遺構に類似する。

SX028出土遺物（Fig.16）

土師器、中国産陶磁器（白磁）、国産陶磁器（陶器・白磁・染付）、石製品等がコンテナ８箱出土。

198～202は土師器小皿、**203～206**は同坏。**207**は瀬戸天目。**208～216**は白磁で、**208～210**は碗、**211・212**は皿、**213**は蓋、**214**は小坏、**215**は紅皿、**216**は壺。**217・218**は青白磁で、**217**は小壺、**218**は皿。**219～221**は国産染付で、**219**は皿、**220**は印判刷りの碗、**221**はそば猪口。**222**は土師質土器擂鉢片の加工品。**223**は滑石製石鍋。**224・225**は石鍋加工品。**226**は碁石か。近代の遺構である。

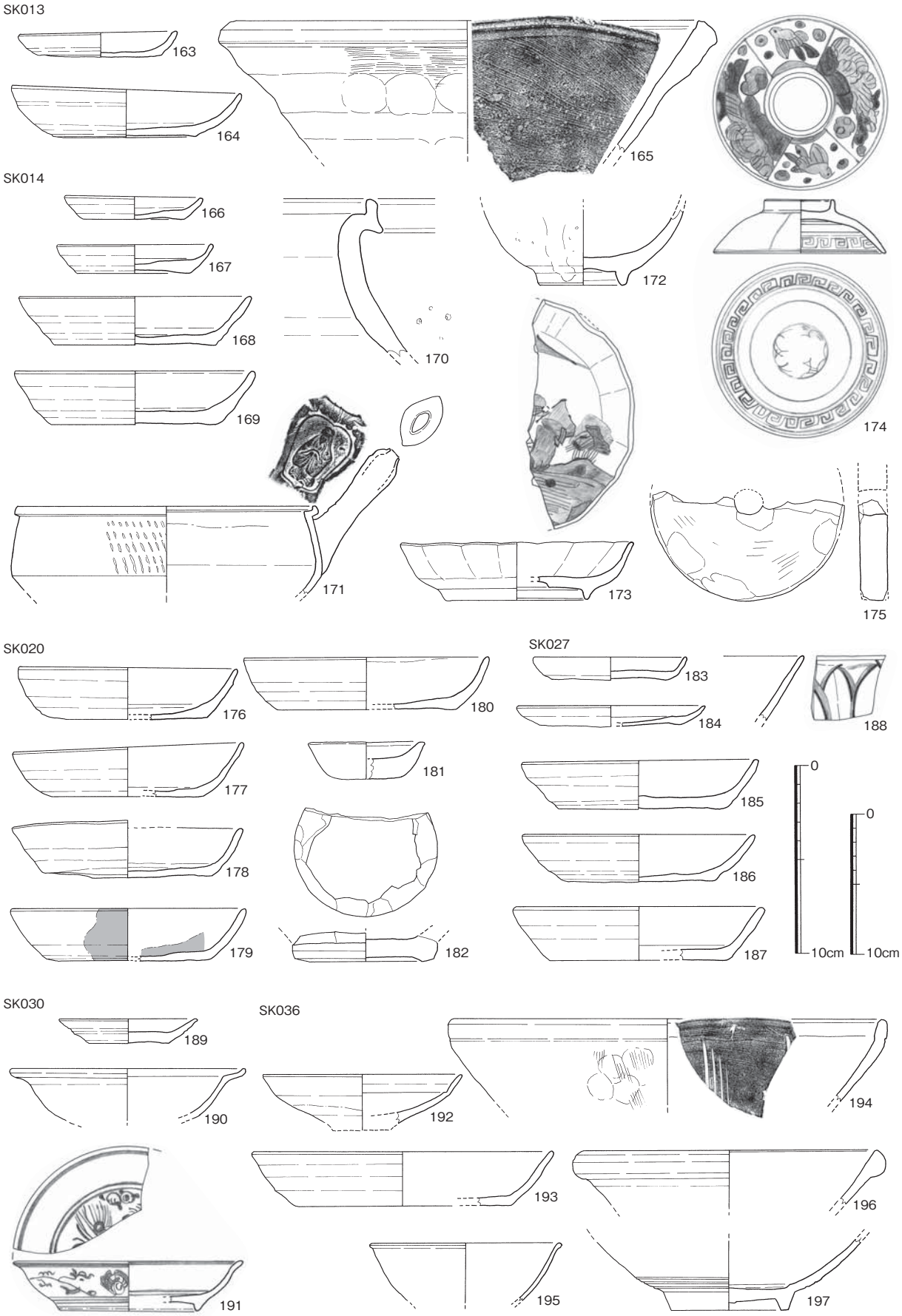


Fig.15　SK013・014・020・027・030・036出土遺物（194は1/4、他は1/3）

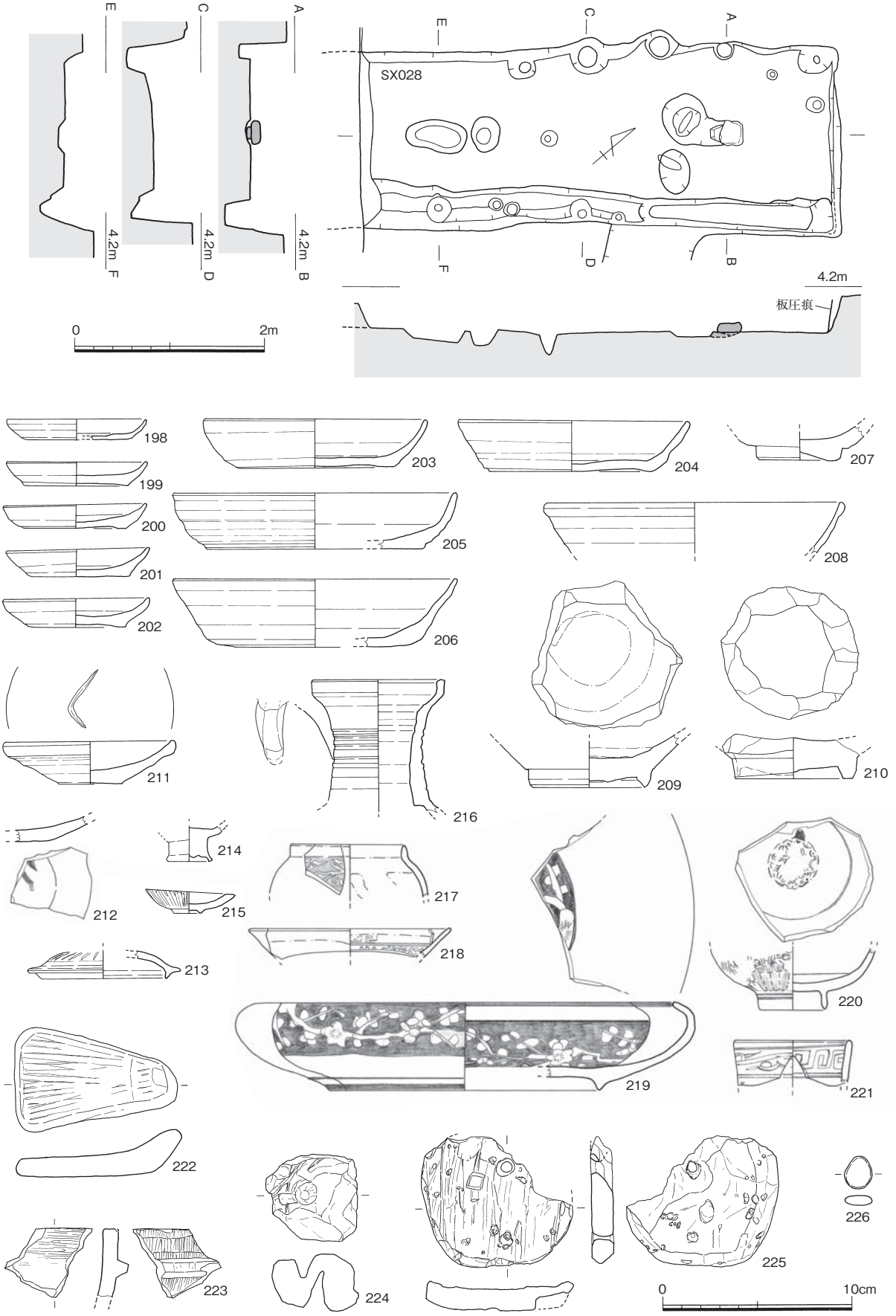


Fig.16　不明遺構 SX028（1/60）、SX028出土遺物（1/3）

2　第２面の調査（Fig.17、PL.3）

遺物口径は破片の復元数値も含む。外底部調整回転糸切離しは糸切、ヘラ切離しはヘラ切とする。

（１）井戸

SE106（Fig.18、PL.4-1）

１面井戸 **SE001・002**間で検出した。遺構番号**092・106・120・129・140**などが含まれる。井筒部の**106**（一部**129**含む）を遺構名とし、他番号部分は掘方とする。不整円形を呈す井戸で、規模は上面で長径4.5m、短径３ｍ以上、深さ２ｍ以上、下層で井筒を検出した。井筒は板を組んだ桶で、規模は0.55×0.65mほど、土圧で歪む。井戸埋土は灰褐色から浅黄色の粘土混じりの砂質土。井筒掘方は黒褐色砂質土である。出土遺物から13世紀前半～後半頃迄か。

出土遺物（Fig.19・20）　井筒・掘方から弥生時代以降の各種遺物が多量出土。主な遺物の時期は中世。**227～236**は井筒下層出土。**227～230**は土師器。**227**は小皿。完存で口径7.8cm。**228～230**は坏。**229**はほぼ完存。口径11.9～12.5cm。いずれも糸切。**231・232**は白磁。**231**は皿Ⅵ類底部片。**232**は合子蓋片。型作り。**233**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2a 類底部片。見込みヘラ切文。畳付釉掻き取り。**234・235**は陶器。**234**は褐釉陶器底部。**235**は褐釉陶器壺口縁部片。口径10.6cm。**236**は中世須恵器片口擂鉢口縁部小片。**237～241**は掘方上層。**237**は土師器鍋口縁部小片。**238**は瓦質土器の支脚。断面方形を呈す。**239・240**は白磁碗口縁部小片。**239**はⅨ類小片。**240**はⅣ-1a 類。**241**は越州窯系青磁大碗Ⅱ-2f 類底部。**242～246**は掘方中層。**242**は土師器坏片。口径12.1cm。糸切。**243～245**は白磁。**243**は碗Ⅳ-1b ～2a 類口縁部細片。**244**はⅤ-4b 類底部片。**245**は四耳壺Ⅱ類口縁部片か。**246**は青磁碗Ⅳ-1類底部か。外底部から高台部はケズリ。**247・248**は下層。**247**は白磁小碗片。口径12cm。外面ピンホール入る。**248**は黒釉陶器小壺底部

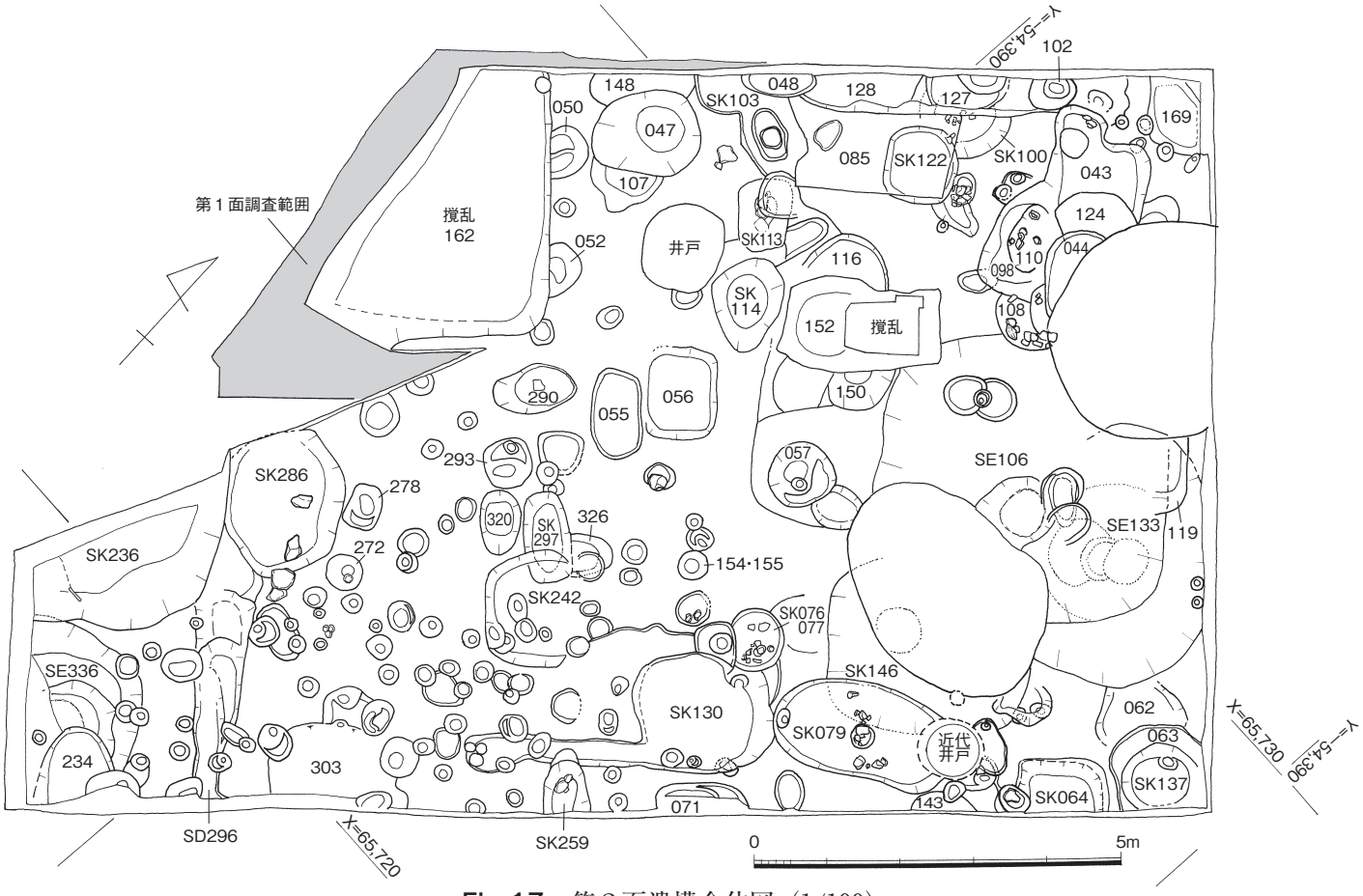


Fig.17　第２面遺構全体図（1/100）

片か。底径3.4cm。全面施釉で、外底部雑な仕上げ。**249**～**254**は土師器小皿。**249**は井筒下層⑦でほぼ完存。口径7.6cm。**250**は井筒中層②でほぼ完存。口径8.2cm。**251**は井筒下層⑤でほぼ完存。口径8.1cm、**252**は掘方（旧**129**）で口径8.0cm。**253**は掘方（旧**092**）最上層出土。ほぼ完存で口径7.7cm。**254**は井筒

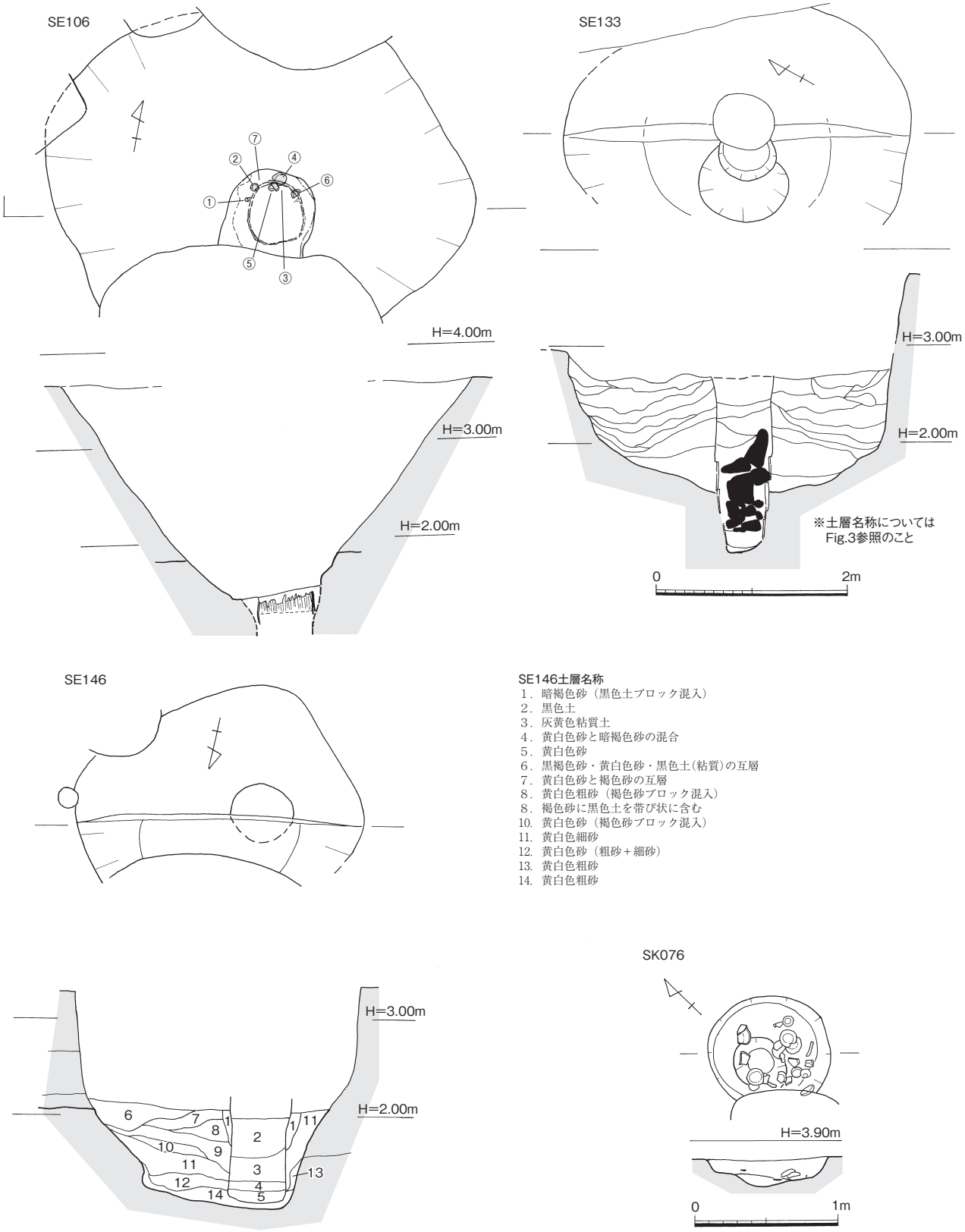


Fig.18　SE106・133・146、SK076（SE は1/60、SK は1/40）

下層⑦でほぼ完存。口径8.6cm。いずれも糸切。255～259は土師器坏。255は掘方（旧120）R1。ほぼ完存で口径12.5cm。256は井筒下層④で口径13.3cm。257は掘方（旧092）最上層出土。口縁部3/4を欠き、口径11.8cm。258は井筒下層⑥で口径12.6cm を測る。259は掘方（旧129）出土。口径11.4cm。いずれも糸切。254は板目が残る。260は土師器鍋口縁部小片。内面細かい横ハケ目、外面煤が厚く付着。混入の可能性あり。261は掘方（旧129）出土。瓦質土器擂鉢口縁部小片。262～264は白磁。262は碗Ⅴ-4d 類片。口径13.4cm。263は碗Ⅴ-4d 類片。口径15.6cm。264は掘方（旧129）出土。碗底部片。高台部露胎。265は龍泉窯系青磁碗Ⅱｂ類。外面鎬連弁である。266は掘方（旧092）最上層出土。陶器甕口縁部片。口径14.0cm。267・268は瓦玉。267は龍泉窯系青磁碗底部転用品。高台内に墨書痕らしきものがあるが、汚れの可能性もある。6.1～6.7cm。268は瓦質土器片利用。径4.1～4.2cm。269～272は墨書磁器。269は掘方（旧149）中層出土。白磁碗底部小片で意味不明、花押か。270は掘方（旧129）出土で、白磁碗底部片利用の瓦玉。高台部に墨書痕が残る。271・272は龍泉窯系青磁碗高台内に意味不明の墨書痕がある。273は最上層（旧092）出土の中国瓦の軒丸瓦片。

SE133（Fig.18、PL.4-1・7-1）

SE002北側で、境界にかかり全容は不明。長径3.3m、深さ２m以上を測る。断面を見ると、径0.6m程の桶の井筒が残る。桶は砂丘面を60cm ほど掘り込んだ面から外側に重ねて積み上げる。桶１段毎に砂と黒色土を主体に水平に積み上げている。井筒内には径0.2～0.4m程の礫石が投げ込まれていた。井戸底の標高は0.9m、粗砂礫面で鉄分が付着し赤みを帯びるが湧水はない。出土遺物から12～13世紀か。

出土遺物（Fig.20）井筒・掘方から弥生時代以降の各種の遺物が多量出土。主に遺物の時期は中世である。274～285は井筒出土。274・275は土師器小皿。いずれも破片で口径8.8cm・8.4cm。糸切。276は土師質土器鉢片。口径25cm 程。外面ピンク、内面暗灰色で、二次被熱を受けた状況を示す。277～279は白磁。277はⅢⅥ-1b 類片で口径10cm。278は碗Ⅳ類小片。口径15cm。外面は汚れる。279は鉢Ⅱ-1類片。口径23.8cm。外面鉄分付着。280～284は陶器黄釉鉄絵盤。いずれも破片で形態から２個体以上ある。280・281は盤Ⅲ類口縁部片、280は小型の盤か。282～285は底部片である。282の復元底径は280より大きく、別個体でⅠ-1b 類に属す。内面灰オリーブ色の施釉で、見込みに暗褐色の鉄絵を描く、外面底部は露胎。284・285は盤Ⅲ類。286～299は掘方出土。286～288は土師器小皿片で、口径9.0cm・7.8cm・8.0cm。糸切。289～293は白磁。289・290は皿。Ⅳ-1b 類片で、いずれも口径10.4cm で、外底部露胎。291・292は玉縁碗。291はⅡ-1類か。破片で口径16.6cm。292はⅣ-2類片で口径17.4cm。291の釉色はくすむ。293は細片で器種は不明だが、取手のようなものか。外面施釉、内面露胎。上半型押しで縦凹凸をつけ、下半は細かいハケ目。294は鎬連弁の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。小片で口径15.8cm。295は褐釉蓋か。皿の可能性もあるが、内面にかかる釉が雑で蓋と考える。小片で口径12.6cm。296・297は白磁皿底部にかかれた墨書磁器片。一部の痕跡で意味不明。298・299は上層出土。298は土師器甕口縁部片。口径25.0cm。内面ヘラケズリ。古墳後期。299は弥生土器小型甕か壺。残存高8.5cm を測る。弥生後期。

SE146（Fig.18、PL.4-1）

SE002の東で検出した。規模は最大径2.95m、深さ2.35mを測る。断面では径0.55mの井筒痕跡が直に基盤粗砂まで入る。桶組の井筒があったのであろう。井筒内埋土は上部が黒色土、下部は砂。掘方埋土は水平に堆積する。遺物から13世紀前半～後半か。

出土遺物（Fig.22）　井筒・掘方から弥生時代以降の各種の遺物が多量出土。中世の遺物が多い。300・301は井筒中層出土。300は白磁碗Ⅱ-1類口縁部片。口径17.0cm。301は龍泉窯系青磁皿小片。図示していないが高台内墨書痕がある。302・303は土師器。302は小皿片で、口径7.8cm。303は丸底の坏片。口径17.0cm。外底部ヘラケズリ後ナデ。304～307は白磁。304は口禿のⅢⅨ-1c 類片で口径9.8cm。305は碗

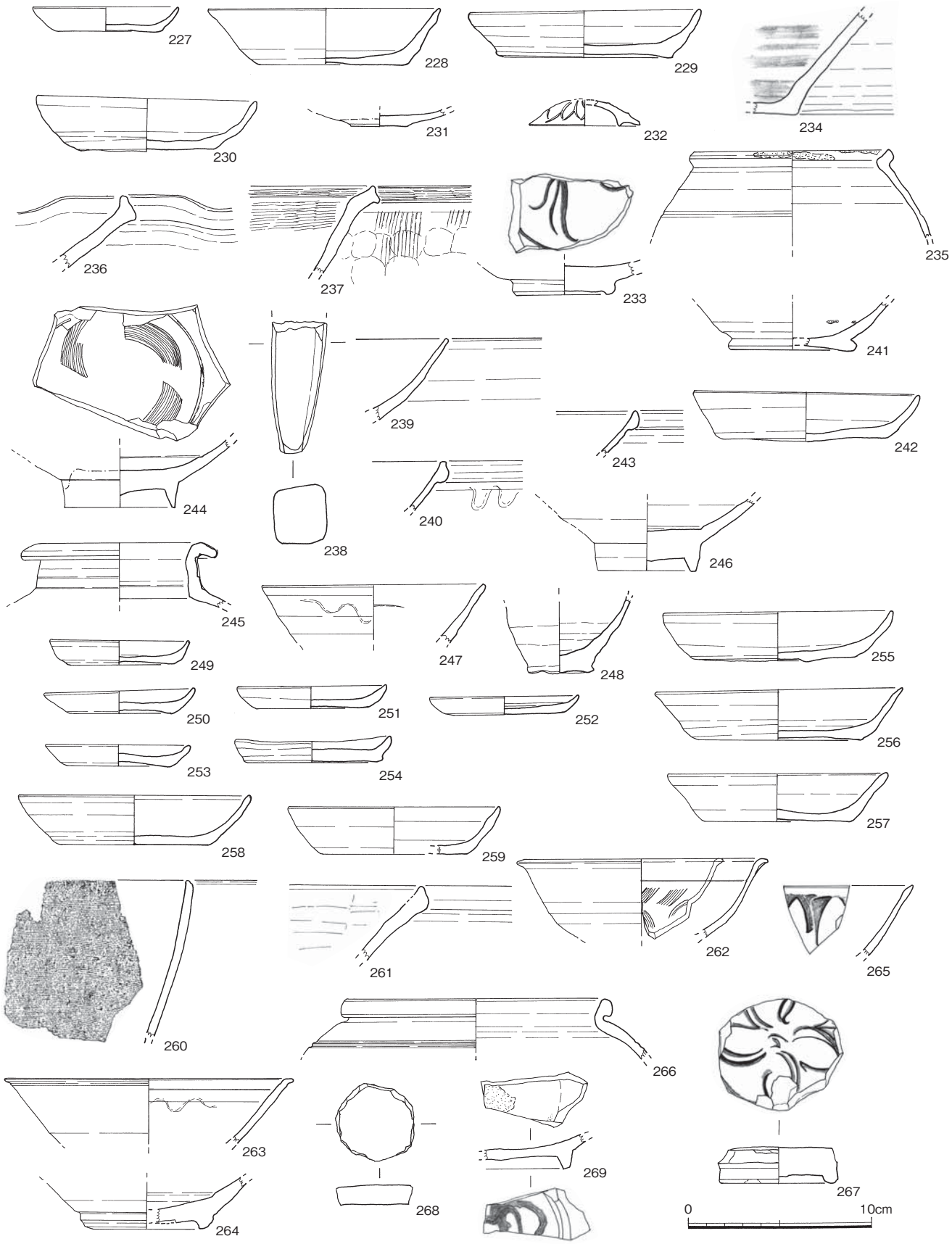


Fig.19　SE106出土遺物①（1/3）

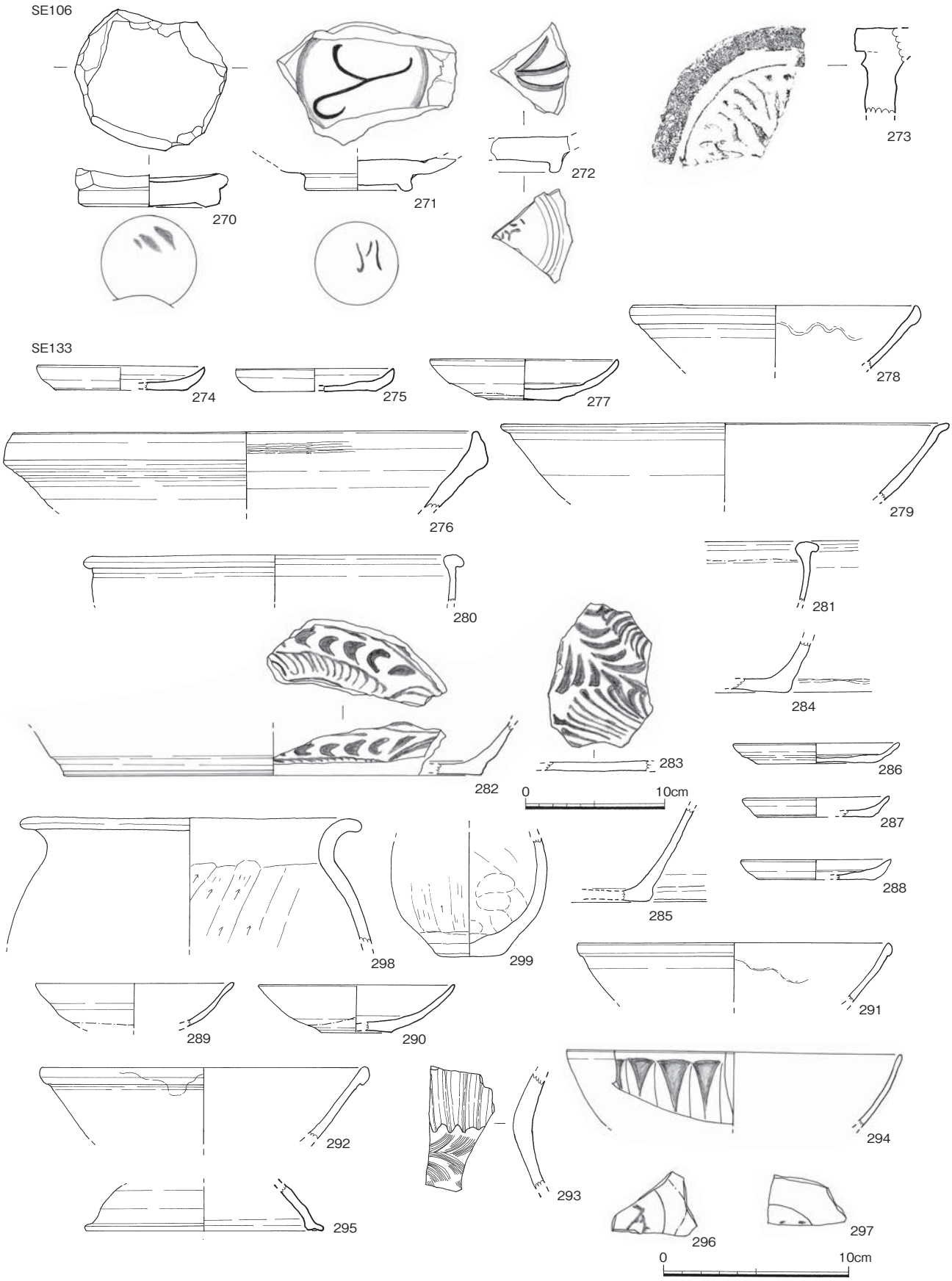


Fig.20　SE106・133出土遺物②（1/3・280～284、298・299は1/4）

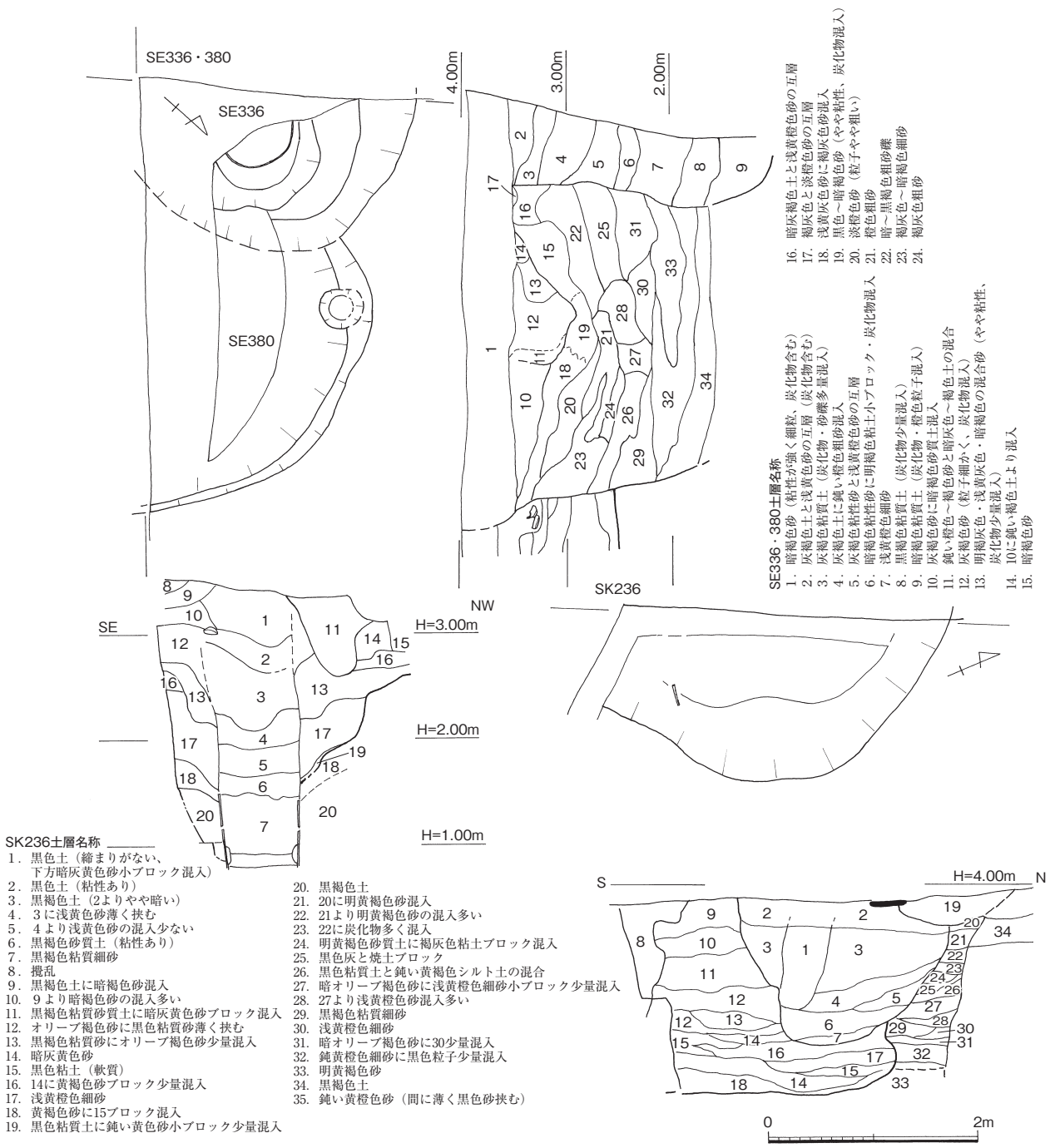


Fig.21　SE336・380、SK236（1/60）

Ⅱ-1類片。口径14.6cm。**306**はⅣ-1a 類片。大型碗で口径20cm。内面釉が垂れ、外面ピンホールが入る。**307**は碗底部。高台部飛び鉋状の痕跡あり。**308**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ-3ｂ類片で口径10.6cm。**309**は白磁無頸小壺片。外面施釉、内面無施釉。**310**・**311**は陶器。**310**は褐釉陶器口縁部小片。暗黒褐色釉がかかる。**311**は壺底部。外底部露胎。**312**は中世須恵器鉢口縁部小片。**313**は古墳時代後期土師器甕片。口径13.4cm。外面煤が付着。**314**は須恵器坏身片。復元口径10.8cm。**312**は掘方上層、**302**・**303**・**305**～**309**・**311**・**313**・**314**は掘方中層、**304**・**310**は掘方出土。

SE336（Fig.21、PL.4-2）

南端部で検出した**SE380**を切る井戸。標高0.8m迄掘り込み、湧水がある。土層を見ると筒状の井筒痕跡が認められ、底では木質の桶が認められた。出土遺物から12世紀後半頃か。

出土遺物（Fig.22～24）井筒・掘方から弥生時代以降の各種遺物が出土。主に遺物時期は中世である。狭い範囲で掘方・井筒を一括して報告する。**315**～**322**は土師器。**315**・**316**は小皿1/2で、口径9.2cm・

8.8cm。糸切。317は椀底部片。高台部貼付け。318～321は坏片。318は1/2弱で、口径14.8cm。319は2/3片で口径16.2cm。いずれも糸切で板目残る。320は口径15.6cm。糸切。321は口径14.4cm。外底部ヘラ切、古代か。322は鉢片か。口径17.2cm、器高4.6cm。焼成やや不良。323は黒色土器底部片。体部は平滑なミガキ。324～327は瓦器椀片。324は口径16.0cm。内外面ヘラミガキ。325は口径14.6cm。体部内外面粗いミガキ。326は高台部に斜めの刻目が入る。体部は雑なミガキ。327は口縁部片。口径14.2cm。内外面ヘラミガキ。328～336は白磁。328～332は皿。いずれもⅥ-1b 類片。口径は9.6～10.0cm。いずれも外底部は露胎。332は白磁又は青白磁皿底部。青みがかった灰白色釉が底部までかかる。333～336はⅡ-1類碗。それぞれ1/4片と336は底部片で、口径は14.6～15.0cm。体部下半から高台部は露胎。337・338は壁面出土。337は白磁碗Ⅷ-0類かⅫ-b 類。ほぼ完存で口径16.2cm、器高6.3cm。口唇部は６か所輪花状に欠き込む。高台部は露胎。338はⅤ-4b 類の完存品。歪みがあり口径は16.1～16.5cm、器高6.7cm。見込みは櫛目文様で粒状の付着物がある。口唇部１か所欠き込みがある。高台部は露胎。339～341は白磁のⅣ-1b 類碗片。口径17.0・17.8cm。339・340の口縁部は釉が垂れる。340の釉は濁った浅黄色で、高台は尖って削り出す。342は良質の白磁碗底部。見込み櫛目とヘラ切文、外面ヘラ切文。343は蓮弁文様のⅪ-４類碗小片。344は合子身片。口径4.0cm。口縁部外面露胎。345は陶器皿で、白磁碗Ⅷ-２類の形態で、釉色は光沢を持つ橙色。346は白磁大皿片で口径22.8cm。347は青白磁細片。見込み櫛目とヘラ切文。優品である。348は高麗青磁皿Ⅰ-２類小片。内面沈線と光沢を持つ暗オリーブ灰色釉がかかる。349は鉄絵文様のある福建産白磁鉢片。口径21.4cm を測る。350～353は青白磁。350～352は器形不明だが、内面露胎で袋物と思われる。353は輪花状を呈す薄胎の碗か皿小片。354・355は高麗青磁。354は碗Ⅲ-１類底部か。畳付目跡粘土が残る。355は皿Ⅰ-２類片。光沢を持つ暗オリーブ灰色釉で、畳付釉掻き取り。356は越州窯系青磁皿Ⅰ類底部片で高麗青磁の可能性もある。オリーブ灰色釉がかかり、畳付目跡粘土残る。357は陶器耳壺Ⅴ類か。1/6片。肩部に波状の沈線がある。358は陶器鉢Ⅰ類片。無釉で外面暗赤褐色、内面灰赤色。磁灶窯系か。359は盤Ⅲ類口縁部小片。体部外面から内面、灰黄色釉施釉。口唇部に重ね焼き粘土残る。360・361は墨書磁器。小片で意味不明。360は青白磁底部片。361は白磁皿底部片。362は陶製の人形の足。足長3.9cm。上面に孔がある。色調黄灰色、胎土精良。363は古代須恵器皿片。口径14.4cm。364～366は白磁。364・365は碗Ⅱ-１類片で外面下半は露胎。口径15.2・15.8cm。366は（旧304）出土。碗Ⅳ-１a 類片で口径16.8cm。体部下半から高台部は露胎、畳付は擦る。367・368は陶器。367は褐釉陶器四耳壺Ⅴ-２類口縁片。暗オリーブ褐色釉がかかる。368は黄褐色釉盤片。Ⅱ-1c 類片で口径29.6cm。内外で釉色が違う。口唇部重ね焼き粘土付着。369は墨書が一部残る青磁底部片。

（２）土坑（Fig.25～31・33、PL.4-3～7）

SK042：370～372は土師器。370・371は小皿。370は完存。口径7.4cm。371は小片で口径8.8cm。372は坏片。口径12cm。いずれも糸切。373は白磁碗片。Ⅴ-2b 類に近い。374は鎬連弁の龍泉窯系青磁碗小片。　SK044：375・376は土師器。375は小皿片。口径8.4cm。376は坏片。口径12.0cm。377は無釉陶器壺胴部。肩部沈線、内面煤付着。　SK045：378は土師器坏片。口径12.7cm。糸切で板目残る。379は青磁。SK103出土片と接合。越州窯系青磁と考えるが、高麗青磁の可能性もある。高台内目跡が残る。380は陶器の盤口縁部小片。口縁部灰オリーブ色釉の施釉。　SK046：381は土師器坏片。口径11.7cm。口唇部に煤が付着し、灯明皿に使用。382は瓦玉。陶器片の再利用。径2.1cm。　SK050：383は土師器小皿片。口径7.5cm。糸切。384は白磁碗Ⅴ類小片。　SK056：中世土師器、輸入陶磁器、須恵器、瓦質土器、瓦などが出土。中世後期以降のもの。385～388は土師器。385・386は小皿片で、口径7.9・7.5cm。387・388は坏片。口径12.0・12.2cm。いずれも糸切。389は青磁酒海壺破片か。390は青白磁底部小片。ヘラ切文。391は明染付皿。碁笥底で見込み「福」銘あり。392は墨書が残る白磁細片。393は管状土錘。残存長

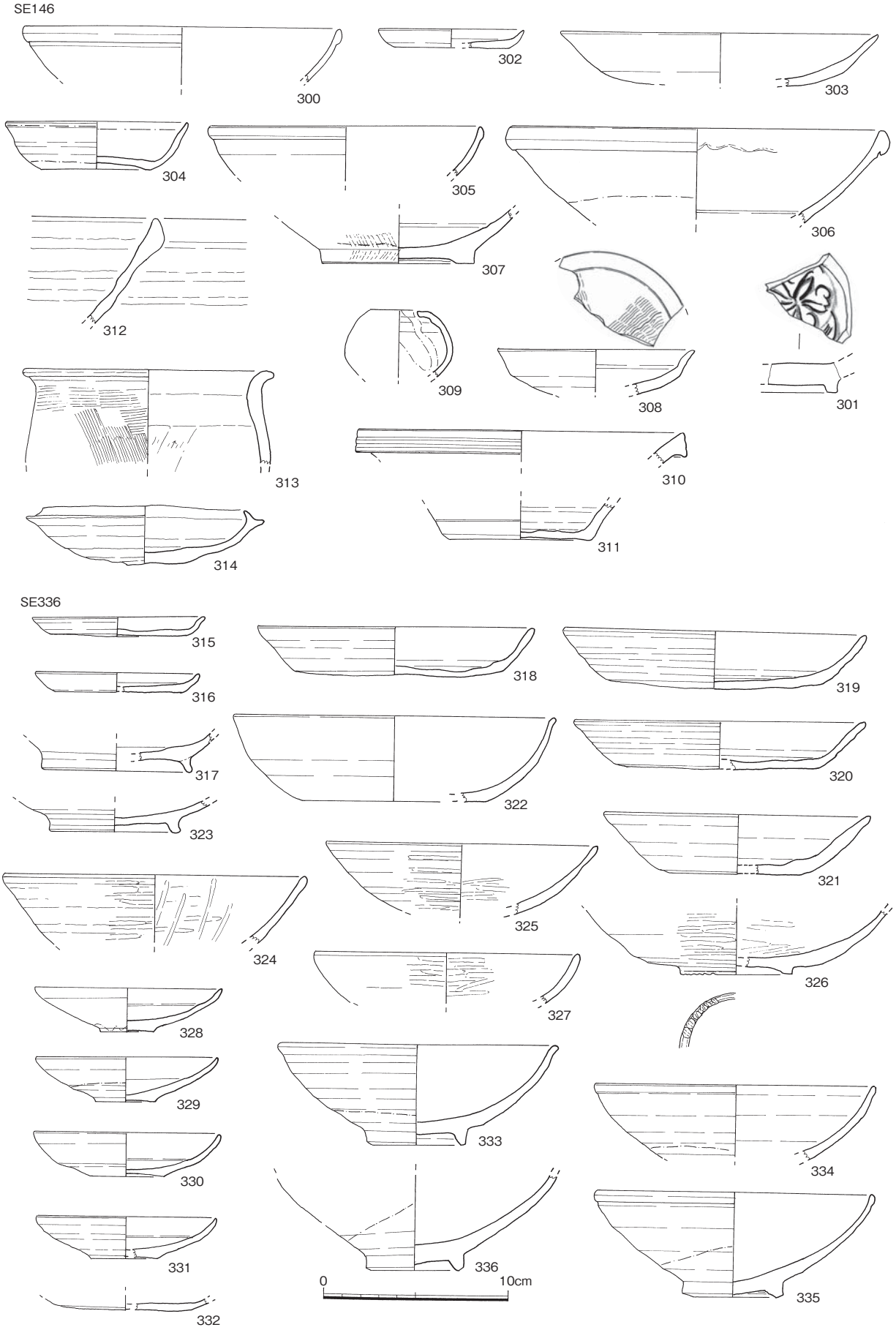


Fig.22　SE146・336出土遺物①（1/3）

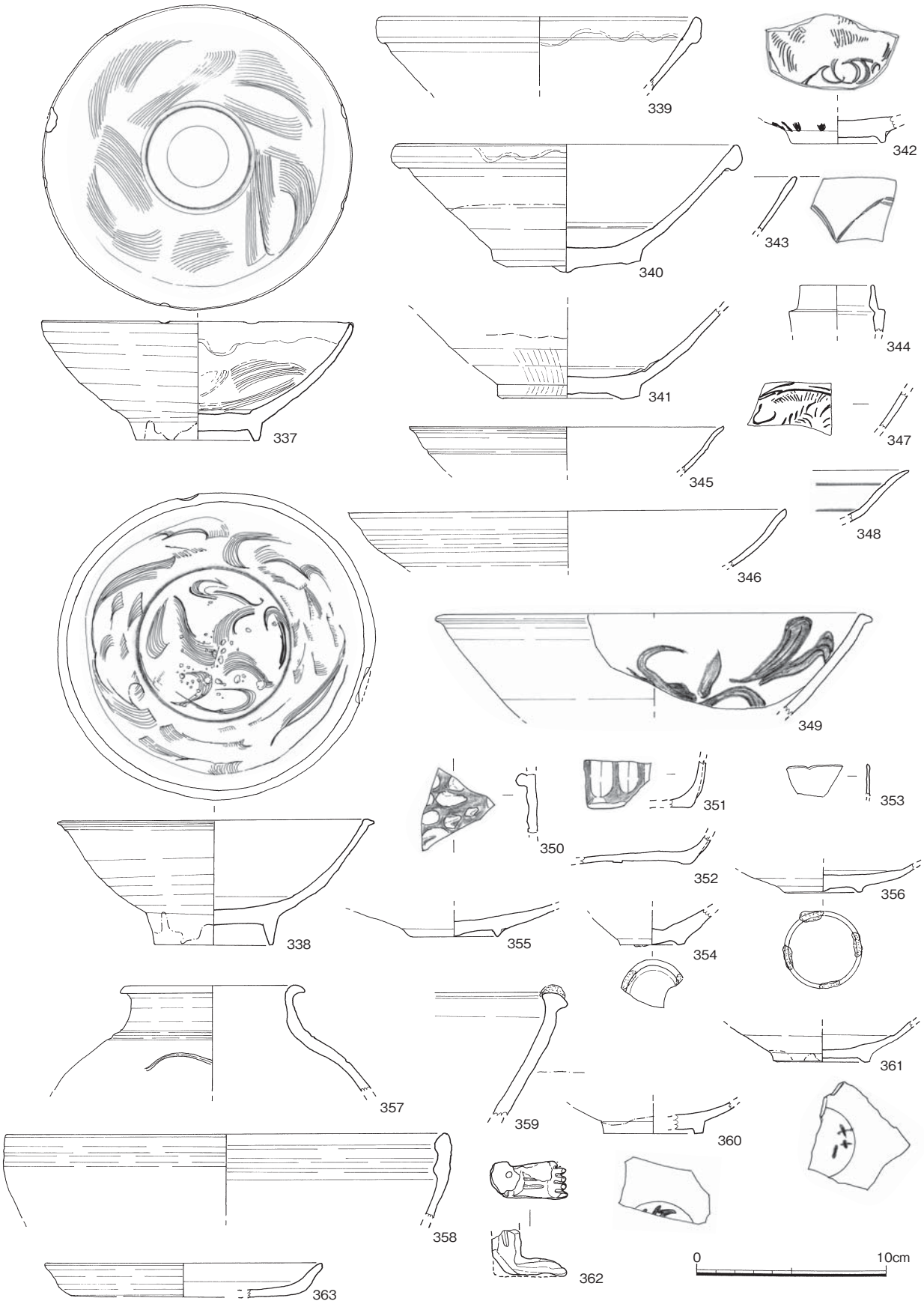


Fig.23　SE336出土遺物②（1/3）

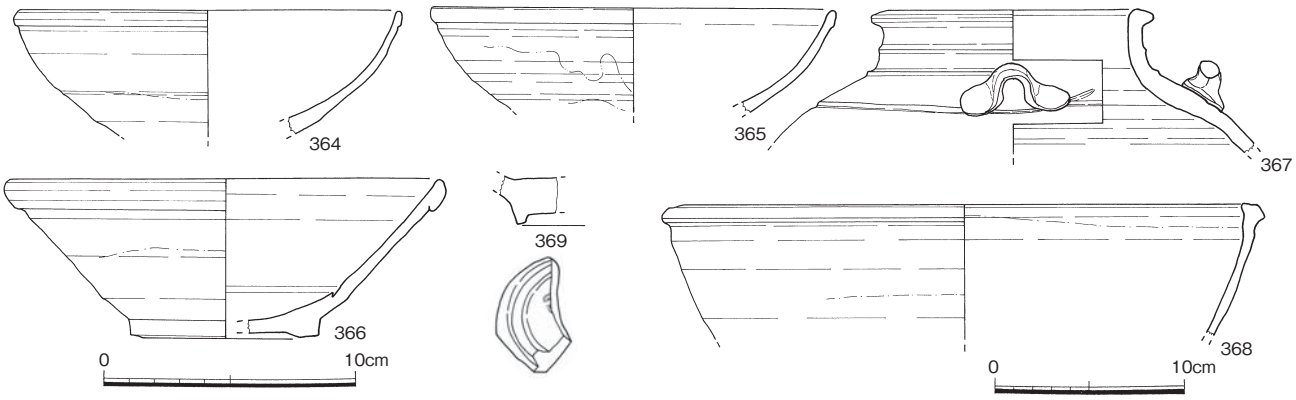


Fig.24　SE336出土遺物③（1/3、368は1/4）

2.7cm。　**SK057**：**490**・**491**は白磁碗。**490**はⅣ-1b類口縁部片。**491**は底部片。見込み重ね焼き痕。**492**は青磁碗片。口径15.7cm。**493**・**494**は陶器。**493**は甕口縁部細片。国産陶器か。**494**は皿底部片。内面施釉。外面自然釉。　**SK064**（Fig25、PL.4-3）調査区北東壁にかかる隅丸長方形状で、第１面から掘り込む。長軸長1.25mを測る。床面にオリーブ灰色粘土が貼られ、浅い逆台形状に窪む。内面に黒色粘質土が堆積する。遺構の性格不明。　**SK071**：東壁際で検出した土坑。**394**は白磁碗Ⅶ-b類片。口径18.4cm。**SK076**（Fig.18・38）**SE146**南側で検出した円形土坑。図は第３面で掲載している。**697**～**706**は土師器。**697**～**702**は小皿片。**699**はほぼ完存、**700**・**701**は完存。口径6.8～8.2cm。いずれも糸切。**703**～**705**は坏片。いずれも完存かほぼ完存。口径12.0～12.7cm。糸切で、**704**・**705**は板目残る。**707**は鎬連弁の龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類片。口径14.0cm。**708**は盤口縁部片。内外面施釉。**SK077**：**SE281**の一部の可能性がある。**395**・**396**は土師器坏。小片で12.6cm。糸切。**397**・**398**は白磁。**397**は皿Ⅱ-２類片で口径8.9cm。**398**はⅣ類碗小片。**399**は同安窯系青磁皿Ⅲ１-２b類。**400**は陶器甕口縁部片。口径14.7cm。　**SK079**：**401**・**402**は土師器小皿、底部片で口径6.9・7.8cm。糸切。**403**は白磁碗Ⅱ-1類片で口径16.0cm。**404**は土師器片の土製円板。縁辺打ち欠き。瓦玉か。　**SK084**：**405**は土師器坏。口縁2/3を欠く。口径12.8cm、糸切。**406**は白磁碗ⅡかⅣ類小片。**407**は白磁合子蓋片。型作り。　**SK086**：**044**に切られる土坑。**138**と同一。**408**は土師器坏片で口12.0cm。回転糸切。**409**は瓦質土器捏鉢底部。内面使用により摩滅する。**SK098**：**110**に切られるか同一。**410**は龍泉窯系青磁碗底部。見込みヘラ切文、外面退化した鎬連弁。**411**は青白磁合子蓋片。口径5.6cm。型作り。　**SK100**（Fig.25・27、PL.4-4）１面**SK010**下で検出の楕円形状の土坑、礫石片を含む。**412**は白磁皿片。口径9.6cm。**413**・**414**は青磁皿片。**414**は15世紀後半頃か。**415**・**416**は朝鮮王朝陶器口縁部細片。**416**は象嵌青磁壺片。**417**は土師質土器焙烙把手。把手上面に孔がある。　**SK103**（Fig25・27、PL.4-6）不定形で長径2.82m、幅1.96mを測る。獣骨が出土。獣骨は別項（54頁）で述べる。**418**は白磁皿Ⅱ-２類片。　**SK107**：**419**は土師器小皿片。口径9.5cm。糸切。**420**・**421**は白磁。**420**は皿片。口径8.5cm。**421**は碗底部。Ⅴ類か。**422**は鉄絵盤底部。**423**は土師器把手。**SK108**：**424**は須恵器小壺。８世紀後半～末頃のもの。　**SK110**：**098**と同一か。**425**～**428**は土師器坏。残り良好で口径11.2～11.9cm。糸切。**429**は土師器小壺片。古墳時代後期か。**430**は龍泉窯系青磁碗口縁部片。**431**は同安窯系青磁碗底部。**432**・**433**は白磁合子の蓋と身。型作りで、口径が合いセットか。**SK113**（Fig25・27、PL.4-7）規模は長軸長1.0m、幅0.64m、深さ0.30m。獣骨が出土。獣骨の分析については別項（54頁）で述べる。**434**は土師器小皿片。口径8.4cm。糸切。**435**は陶器の壺か水注底部。**436**は土師質土器鍋の脚部。　**SK114**：**437**・**439**は白磁。**437**は小碗か。小片で口径10.8cm。**439**は碗Ⅴ類片。口径16.0cm。**438**は明の染付底部小片。**440**～**442**は陶器。**440**は甕口縁部片、**441**は鉢か盤口縁部片。**442**は鉢底部片。　**SK122**（Fig.25、PL.4-4）**SK100**に切られる土坑。長径1.05m、幅0.95m、深さ0.70m。中世土師器、明染付などが出土したが、小片で図示出来ない。　**SK124**：**443**は土師器丸底杯片で口径

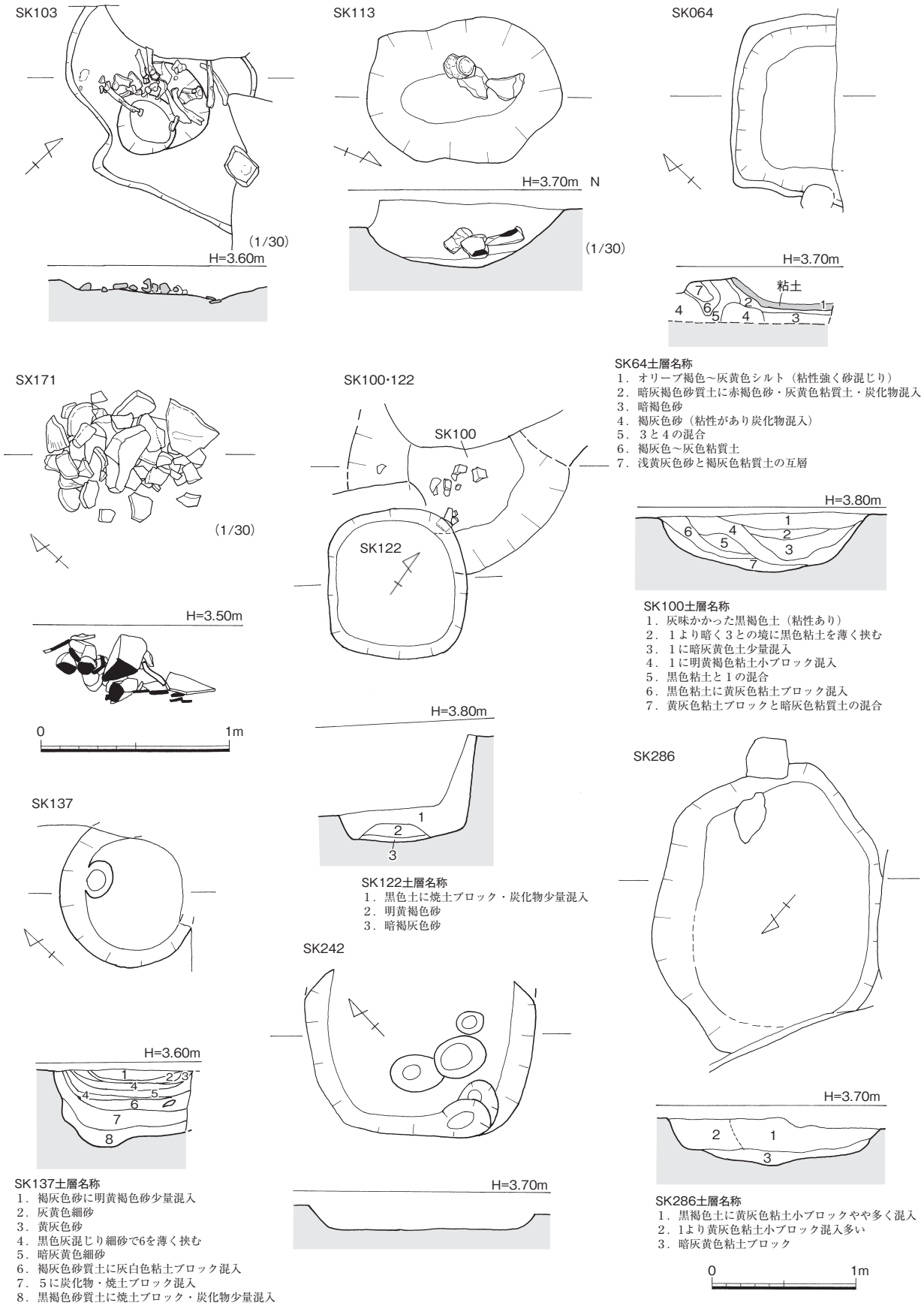


Fig.25　SK064・100・103・113・122・137・242・286・SX171（SK103・113・SX171は1/30、他は1/40）

16.0cm。**444**は白磁碗Ⅳ-1類片。口径16.5cm。**445**は青白磁皿底部片。見込み毛彫り文様。**446**は管状土錘。長さ4.8cm。　**SK127**：**447**～**449**は土師器小皿片で口径5.7・6.7・8.7cm。糸切。**449**は板目残る。**450**・**451**は青磁。**450**は碗。16世紀のもの。**451**は皿、15世紀後半頃のもの。**452**は明染付片。**453**・**454**は朝鮮王朝象嵌青磁片。16世紀の時期。　**SK128**：**455**～**457**は下層出土。**455**は土師器坏片。口径13.0cm。糸切。**456**は肥前磁器染付皿。18世紀か。**457**は弥生土器甕口縁部小片。中期後半か。　**SK134**：**458**～**462**は土師器。**458**・**459**は小皿で口径7.8・9.0cm。**458**は糸切。**460**～**462**は坏片。口径11.4～12.0cm。糸切。**463**は白磁碗Ⅶ-b 類片。**464**は陶器蓋片。無施釉で極暗赤褐色を呈す。　**SK135**：**152**の一部か。**465**は瓦器片利用の方形の瓦玉。2.3cm。　**SK137**（Fig.25・28・43、PL.4-5）北東隅明黄褐色土下で検出した円形土坑。径1.05×１m以上、深さ0.6m。**466**・**467**は土師器。**466**は小皿片。9.0cm、糸切。**467**は丸底坏片。口径14.4cm。ヘラ切。**468**～**478**は白磁。**468**～**470**は皿。**468**はⅢ-１類片。口径10.4cm。**469**・**470**はⅦ-1a 類片で口径9.4・12.4cm。底部露胎。**471**～**475**は碗。**471**はⅡ-4b 類片。口径16.4cm。内面白堆線で分割する。**472**～**474**はⅣ-1b 類片。口径16.2・16.3・17.3cm。高台露胎で、**473**・**474**飛鉋状ケズリ痕残る。**475**はⅤ類かⅨ類。高台は意図的に打ち欠く。**476**は壺口縁部片。口径11.8cm。古代青銅器を模した優品。**477**は小壺胴底部片。外面光沢を持つ明オリーブ灰色釉がかかる。**478**は鉢Ⅱ-２類片で、口径28.2cm。内面１条の沈線とヘラ切文。**479**は青磁小碗片。9.8cm。体部下半窪みがあり、鈍い白濁したオリーブ灰色釉がかかる。**480**は天目碗底部。外底部はケズリで露胎。**481**・**482**は陶器。**481**は褐釉陶器片。口径5.2cm。内面は露胎。**482**は陶器鉢Ⅰ-2b 類口縁部小片。外面横粗いハケ目。無釉で暗褐色を呈す。**483**は片口の鉢で行平というものか。表面暗褐色釉上に黒い飴釉を上掛けする。**846**は青緑色のガラス玉。径7.5㎜、孔径3.7㎜。　**SK169**：**484**・**485**は土師器小皿片で口径9.0・9.6cm。糸切。　**SK234**：**486**～**488**は白磁。**486**は皿Ⅵ-1b 類片。口径9.4cm。**487**・**488**は碗Ⅳ-1b 類片。口径17.2cm。口縁部釉が厚めにかかる。**488**は外面飛び鉋状ケズリ痕残る。**489**は天目碗底部で墨書痕がある。　**SK236**（Fig.21・29、PL.5-1）南区西側で検出した大型土坑。規模は長径2.6m、深さ1.4m。埋土状況から複数遺構の重なりがあると考える。**495**～**506**は上層出土。**495**・**496**は土師器。**495**は小皿片。口径9.0cm。ヘラ切・板目。**496**は丸底坏片。口径14.6cm。ヘラ切。**497**・**498**は白磁。**497**は碗Ⅳ-1a・1b 類底部。外底部墨書がある。漢字の崩し字か不明。**498**は四耳壺Ⅲ-１類口縁部片。**499**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2b 類の底部片か。無文である。**500**・**501**は同安窯系青磁碗Ⅰ-1a 類片。口径16.6cm。表面汚れる。**501**は底部片。高台部は露胎で、墨書「六」がある。**502**は青白磁瓶。肩部縦の分割沈線が入る。**503**は白磁皿Ⅵ-1b 類底部片。墨書痕がある。**504**は褐釉壺片。内外面施釉で、高台部重ね焼き粘土付着。**505**は越州窯系青磁浅形皿Ⅲ-3b 類片。ヘラ切花文がある。高台内重ね焼き粘土付着。**506**は中世須恵器鉢底部片。内面使用で擦り減る。**507**～**516**は下層出土。**507**・**508**は土師器。**507**は小皿片。口径9.2cm。ヘラ切。**508**は坏片。口径13.0cm。板目。**509**～**512**は白磁。**509**は皿Ⅷ-1b 類片。口径9.8cm。ヘラ切花文。**510**は口唇部輪花状の碗Ⅶ-b 類片。口径18.0cm。**511**は玉縁碗小片。**512**は碗Ⅱ-3b 類底部。内面白堆線がある。**513**・**514**は青磁。**513**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-3a 類片。口径16.4cm。**514**は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b 類底部。**515**・**516**は陶器。**515**は盤Ⅱ-1a 類口縁部小片か。**516**は鉢底部片。磁灯窯系か。厚めの灰オリーブ釉がかかる。　**SK242**（Fig.25・29、PL.5-2）調査区南側で検出した隅丸方形土坑。最大幅1.6m、深さ0.16m。**517**は土師器坏片。口径12.2cm。内外面黒く、灯明皿として使用。**518**・**519**は白磁。**518**は皿Ⅱ-a 類片。口径11.6cm。**519**は碗口縁部細片。**520**は白磁皿底部片で墨書痕が残る。　**SK255**：**521**は白磁壺口頸部。肩部に斜めヘラ切文。耳が付く。**522**は越州窯系青磁皿Ⅲ-3b 類底部片。　**SK259**：**523**～**525**は土師器。**523**は小皿片。口径7.8cm。糸切。**524**・**525**は坏。ほぼ完形・片。口径13.2・11.6cm。糸切。**526**は白磁碗Ⅴ-3b 類底部片。**527**は陶器耳壺Ⅴ-2類。暗オリーブ色釉がかかる。**528**は瓦玉。白磁碗片利用。径4.3cm。**529**は土人形の頭。烏帽子を被る。長さ

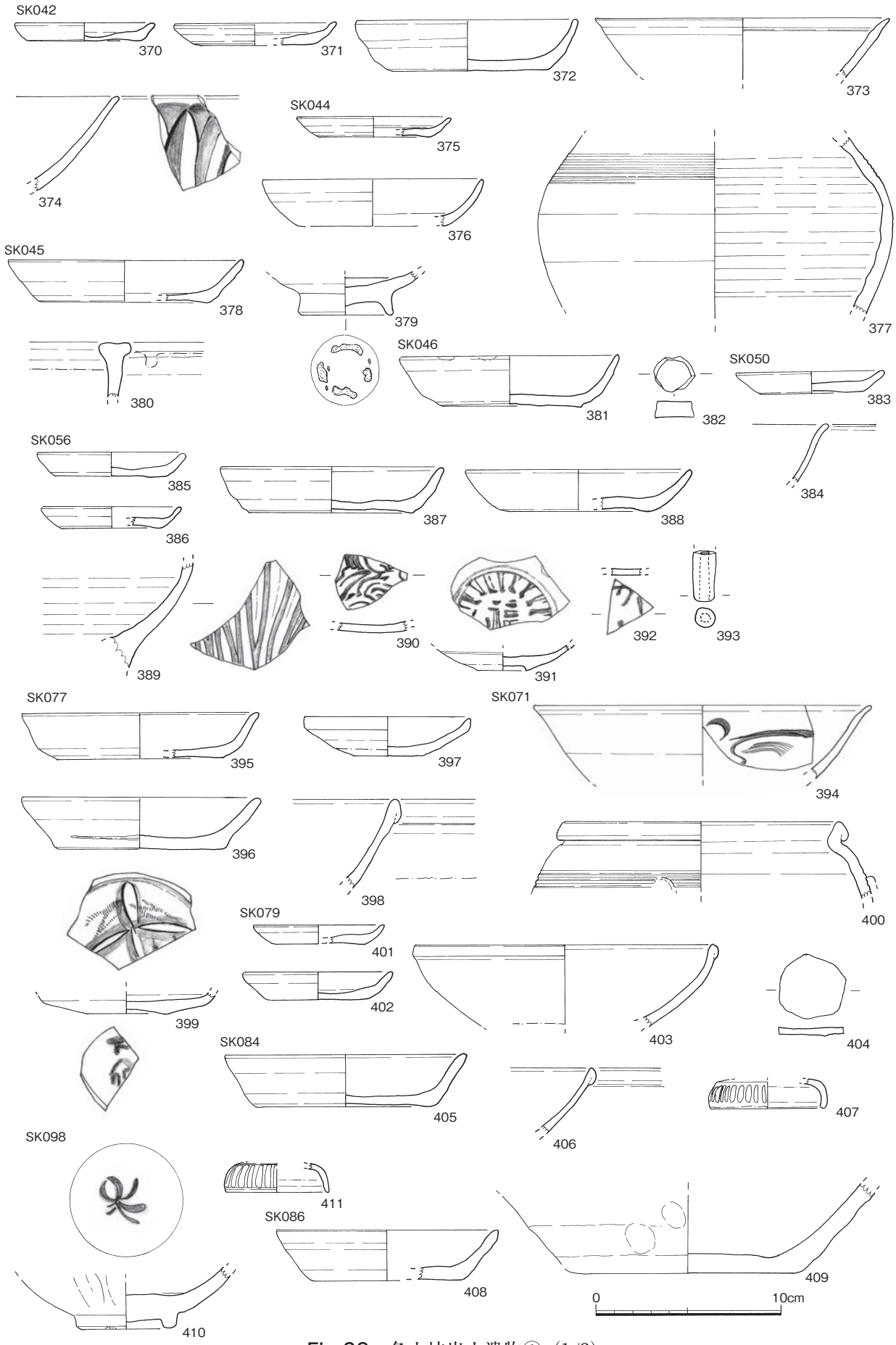


Fig.26　各土坑出土遺物①（1/3）

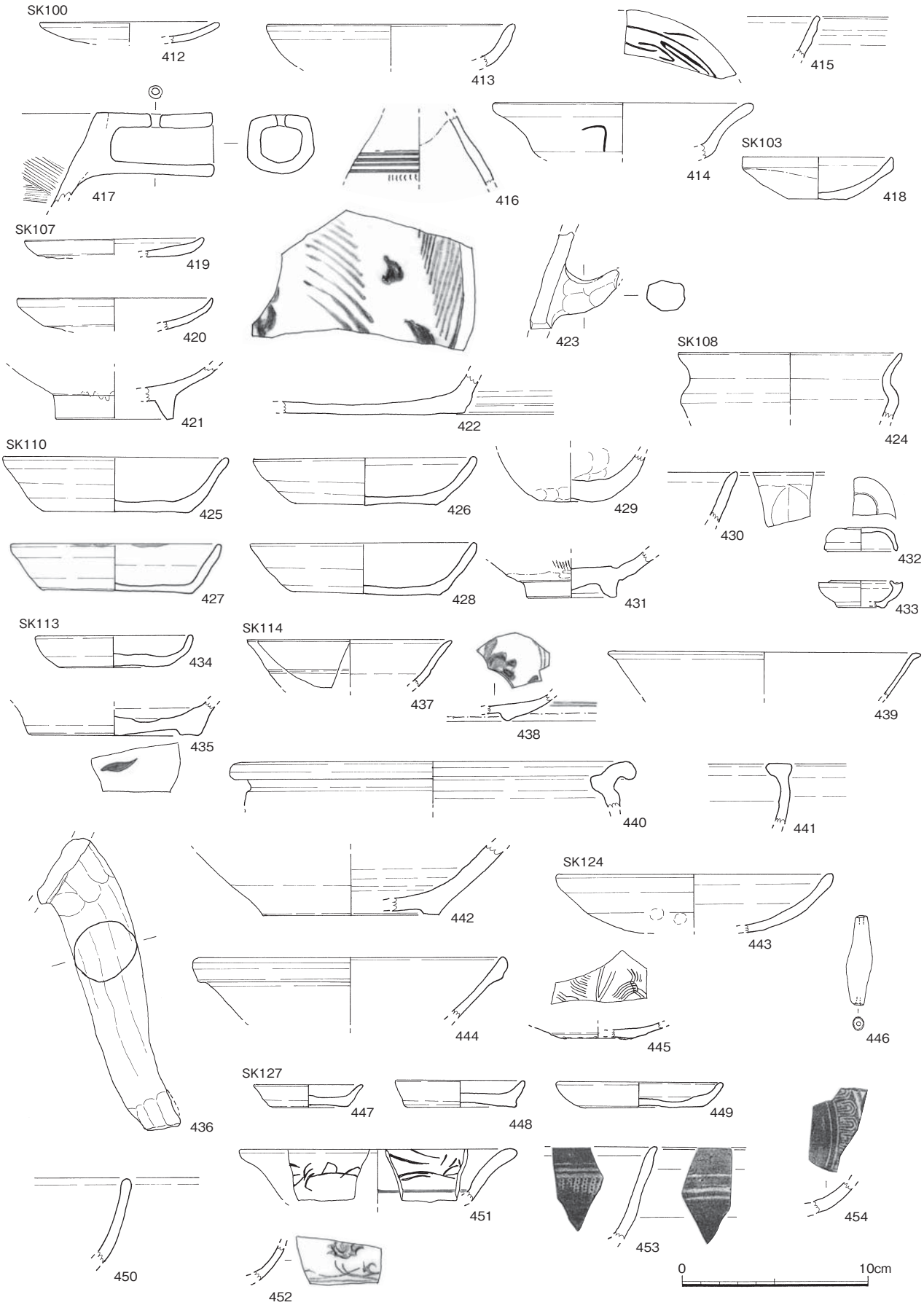


Fig.27　各土坑出土遺物②（1/3）

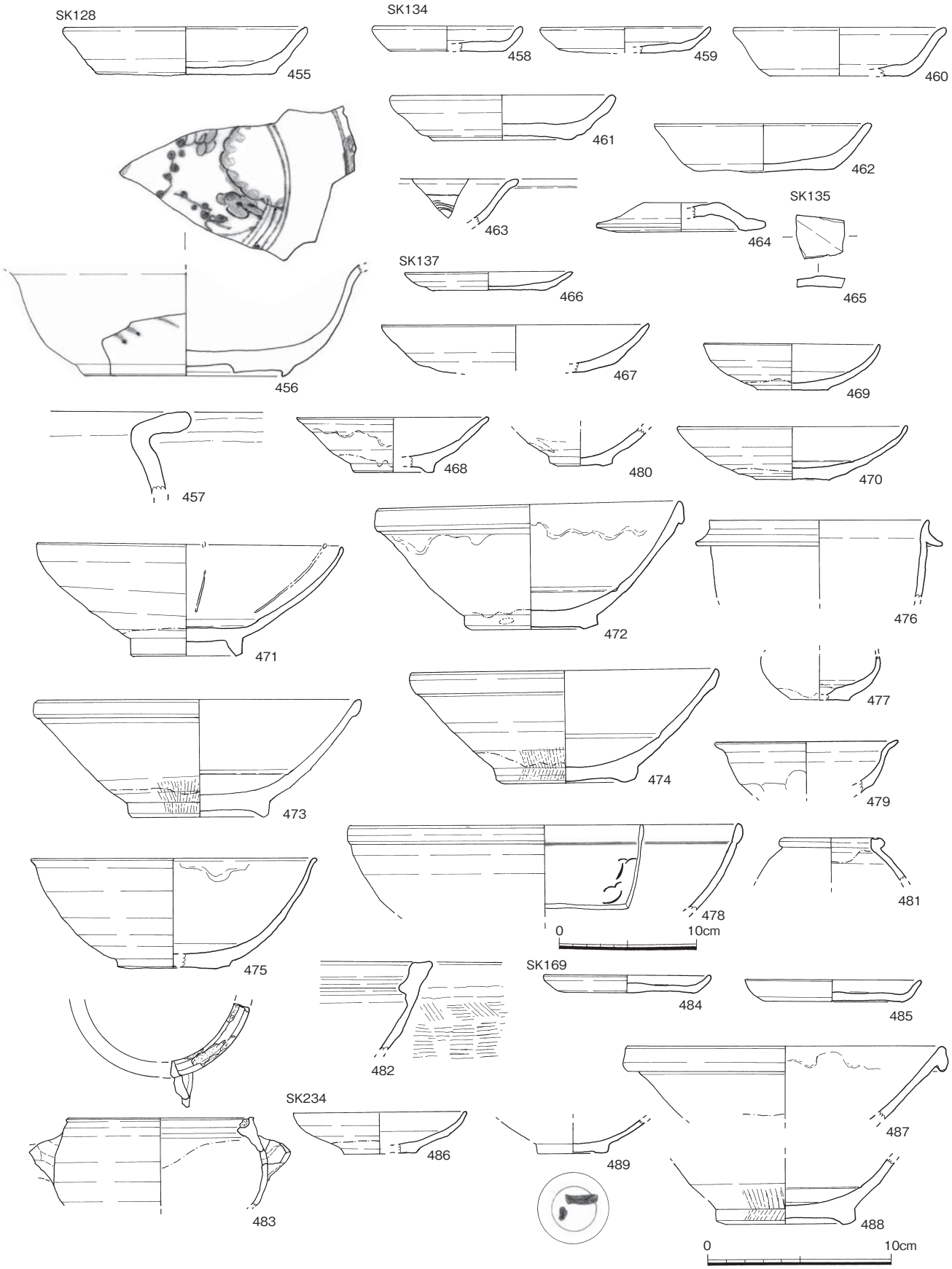


Fig.28　各土坑出土遺物③（478は1/4、他は1/3）

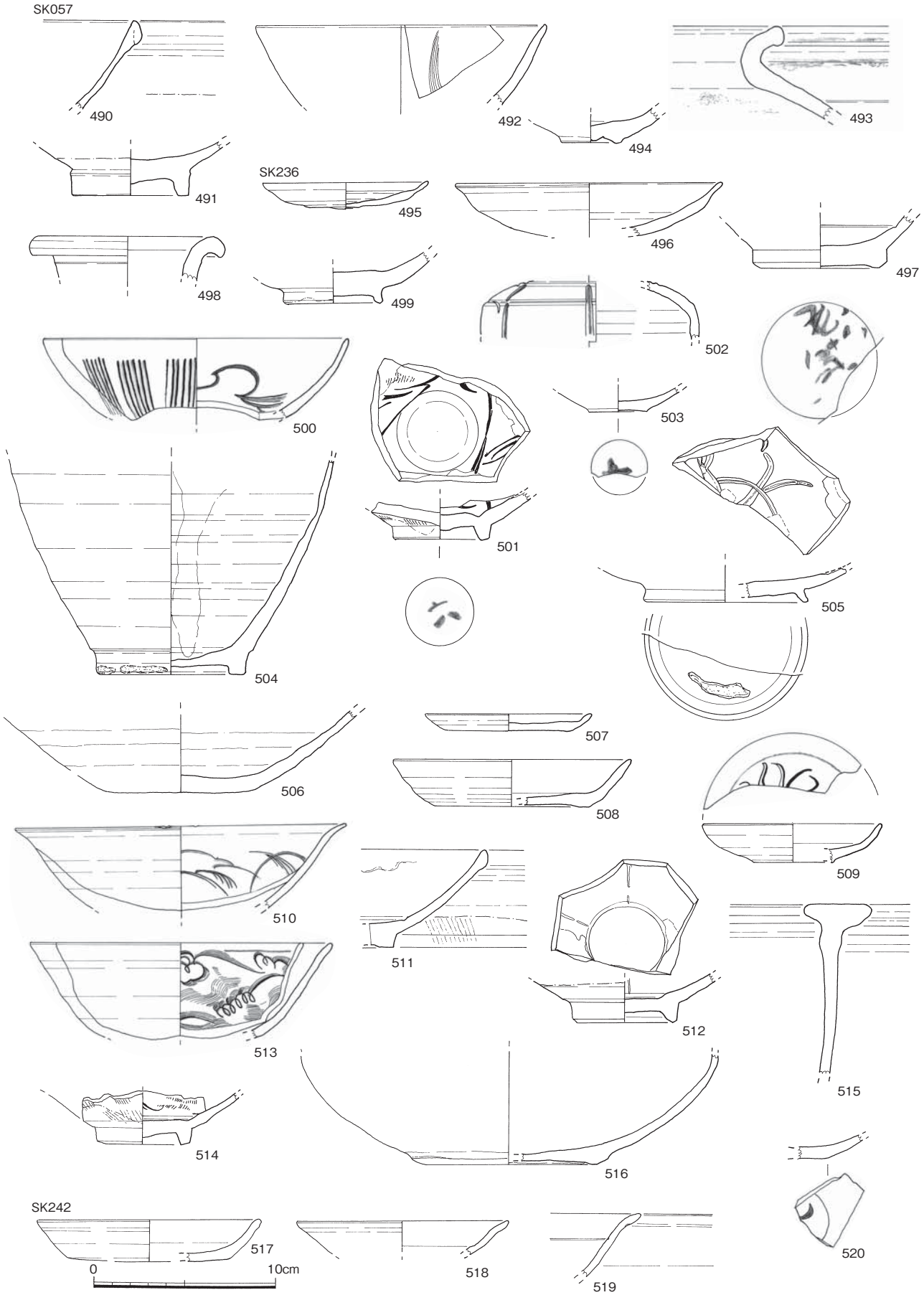


Fig.29　各土坑出土遺物④（1/3）

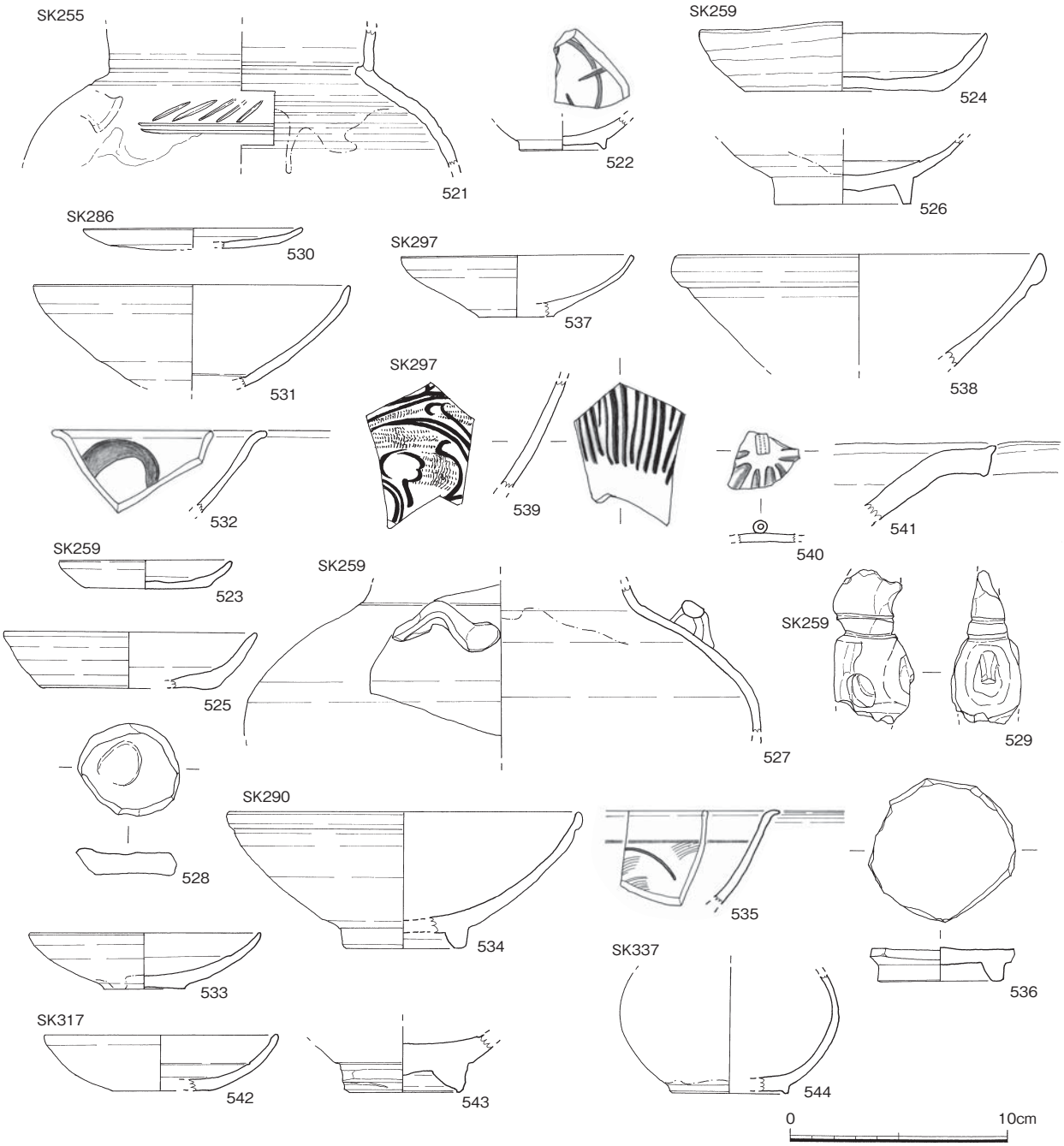


Fig.30　各土坑出土遺物⑤（1/3）

7.6cm。　**SK286**（Fig.25・30、PL.5-3）**SK321**上面の土坑。長径2.1m、短径1.48m、深さ0.33m。**530**は土師器小皿片。口径10.0cm。ヘラ切。**531**は白磁碗Ⅱ-4a 類。**532**は福建産白磁碗片。　**SK290**：**533**・**534**は白磁。**533**は皿Ⅵ-1b 類。口径10.6cm。**534**は碗Ⅱ-1類片で口径16.0cm。体部下半は露胎。**535**は青磁だが白磁Ⅴ-4c 類の形態。**536**は瓦玉。白磁碗底部利用。縁辺打ち欠き。径6.2×6.5cm。　**SK297**：**537**・**538**は白磁。**537**は皿Ⅵ-1b 類。**538**は碗Ⅳ-2ac 類片。口径16.5cm。**539**は初期龍泉・同安窯系青磁0類碗小片。**540**は青白磁蓋の摘み部。**541**は須恵器か陶器口縁部小片。　**SK317**：**542**は白磁皿片、口径10.6cm。**543**は明黄褐色釉の碗か鉢底部。　**SK337**：**544**は青白磁小瓶。明青灰色釉の全面施釉で内面釉溜りがある。

（3）ピット出土遺物（Fig.31）

545は **SP060**の土師器坏片。**546**は **SP072**の土師器坏片。**547**は **SP075**の土師器小皿片。**548**は墨書磁

器。白磁碗底部に「李□」とある。宋人名か。549・550はSP083。549は土師器小皿。ほぼ完形。550は白磁皿Ⅲ-2類片。551はSP086の土師器坏片。552はSP093の白磁碗Ⅸ-2a類片。口禿。553はSP117の墨書磁器、白磁皿底部に陳（旦？）」とある、人名か。554はSP125の赤焼須恵器片転用品。555・556はSP139。555は褐釉陶器四耳壺片。556は土製の鍋か鉢口縁部小片。557～562はSP169礫群中。557は土師器坏片。558～560は白磁。558・559は碗Ⅳ-1b類片。560は耳壺肩部。内面露胎。561は下膨の陶器壺片。外面鈍い赤褐色を呈す。562は丸瓦片。幅16.4cm。凹面細かい布目、凸面斜め格子目叩き痕残る。563～565はSP238。563・564は白磁。563は碗Ⅱ-1類片。564はⅣ類の口縁部細片。565は青白磁皿底部片。見込みヘラと櫛目文。566はSP246出土。緑釉陶器皿片。全面施釉。567はSP253。白磁碗Ⅳ-1b類片。568・569はSP256。568は土師器椀片。569は陶器鉢Ⅰ-1a類口縁部片。無釉で暗赤褐色。横平行叩き痕。570はSP262。黒色の飴釉がかかる壺口縁部片。571・572はSP272の白磁。571は皿Ⅲ-1b類片。572は蓋。径0.4cmの孔がある。下面は露胎。573はSP291。玉縁白磁碗片。574はSP300。土師器小皿片。

３　第３面の調査（Fig.32、PL.5-5・6-1）

（１）井戸

報告するのは７基であるが、井戸の重複があり、実際にはまだ多かった可能性がある。

SE174（Fig.34）

北東壁と近代井筒に囲まれた部分で検出した井戸。未完掘。土層では１面からの掘り込みがある。SK064よりは古いが、近世の遺物はなく、近世の遺構が重なる可能性もある。　**出土遺物**（Fig.34）古代～中世土師器、古墳～古代須恵器、輸入陶磁器、石鍋、鉄滓などが出土。575～577は土師器。575は井筒下層出土小皿片。口径8.0cm。糸切。576・577は坏片。576は下層出土。口径12.0cm。577は口径12.2cm。糸切。578は龍泉窯系青磁碗底部。見込み「河濱遺範」スタンプがある。579は銅坩堝。外面木目直行叩き。

SE176（Fig.33・34、PL.7-2）

北西隅で検出した。SE001に切られる。底は一段深くなり、その部分176を井筒とし、その東テラス部分177を掘方とする。標高0.9m迄下げたが、底までは未掘。遺構の重複の可能性もあるが、井戸番号としては176とする。　**出土遺物**（Fig.34）弥生土器、中世土師器、輸入陶磁器、須恵器、鉄製品などが出土。**176部分**：580～583は井筒下層。580は土師器坏片。口径12.2cm。581は白磁碗Ⅴ類底部。582は龍泉窯系青磁碗底部。見込み方形スタンプがある。583は陶器甕口縁部。　**177部分**：584～589は掘方上層～中層の土師器。584～586は小皿片。口径8.6・9.0・9.0cm。587～589は坏片。口径15.4・16.0cm。590は瓦器椀片。591は瓦玉か円板。青磁片で径5.7cm。592は瓦玉。径2.2×2.6cm。陶器片利用。

SE179（Fig.33・35・36）

中央部でSE207に切られる。旧SK179と旧218よりなるが、SK179が上面の井筒痕と思われ、井戸番号とする。規模は径2.8m以上、井筒部は一段下がり、深さは標高0.9m迄掘るが、遺構の重複がひどく、安全対策上完掘していない。埋土は砂と粘質土の混合土で、井筒部埋土は暗褐色粘質土である。上面には埋没時に廃棄されたと思われる礫群SX171があった。　**出土遺物**（Fig35・36）弥生時代から中世土師器、輸入陶磁器、古代～中世瓦、瓦器などが出土。593～596は旧218井筒。593は土師器小皿片。口径8.8㎝。糸切。594・595は坏片。14.4・15.2㎝。糸切で595板目が残る。596は瓦器椀片。体内面丁寧な磨き、外面粗い磨き。597は白磁壺Ⅲ-1類片。青味がかった灰白色？がかかる。598は龍泉窯系青磁碗底部。内面櫛描文。599は白磁底部に書かれた墨書。記号の「×」か「十」。600～629は掘方。600～603は土師器。600・601は小皿片。口径9.0㎝。ヘラ切。601は口径9.2㎝。糸切。602は高台付皿片。口径8.5㎝。603は坏片。口径16.0㎝。604は瓦器椀片。口径17.4㎝。内外面ミガキ。調整から596と同一個体の可能性あり。

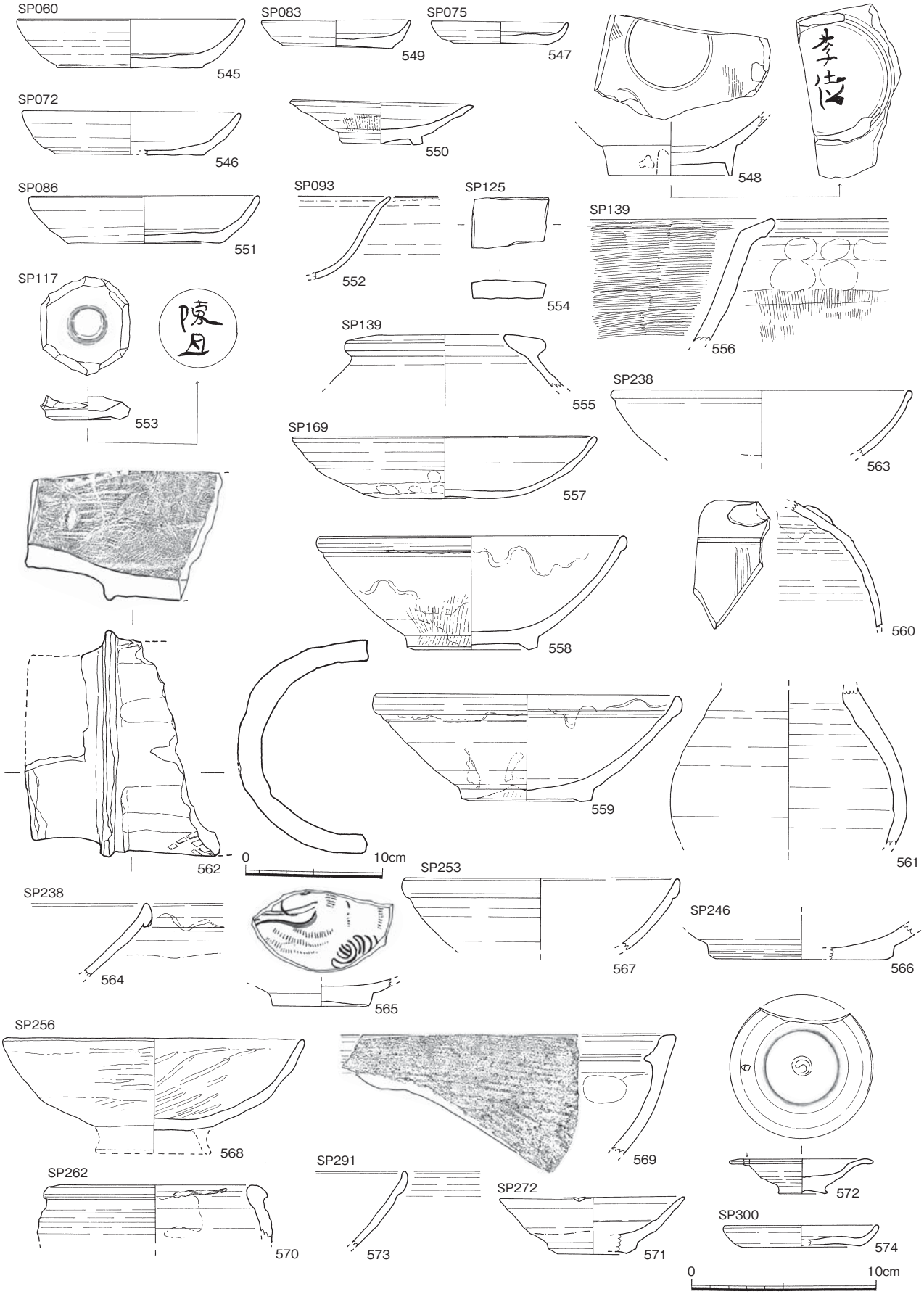


Fig.31　第２面ピット出土遺物（562は1/4、他は1/3）

605～612は白磁。605・606はⅢⅥ-1b・Ⅷ-1b 類片。口径10.6・9.8㎝。606は見込みヘラ切りによる花文。607～612は碗。607はⅡ-Ⅰ類片。口径15.4㎝。高台部露胎。608はⅡ-3b 類片。口径16.0㎝。内面白堆線がある。609・610はⅣ-1b 類片。口径16.0・16.8㎝。外面釉垂れ。610高台部飛鉋状ケズリ。611はⅤ-2a 類口縁部片。612は底部。613～618は青磁。613・618は同安窯系青磁碗。613はⅠ-1b 類片。618はⅡ類か。614～617は龍泉窯系青磁碗。614・616はⅠ-2a 類。614は口径16.0㎝。615・617はⅠ-1a 類片。615は口径13.4㎝。619～621は青白磁。619は合子蓋片。型作り。620は袋物の胴部片。把手が付く。621はⅢ片。622～624は陶器。622は鉢Ⅳ-2類片。口径18.0cm。褐色の下地釉に黒色釉を上掛けする。623は耳壺Ⅴ-2類片。オリーブ褐色釉がかかる。624は盤Ⅱ-1類片。釉を二度掛けしている。625は越州窯系青磁浅形碗かⅢⅢ-3b 類片。見込みヘラ片切花文、高台部粘土目痕が残る。626・627は遊具の瓦玉。径2.3～2.5cm。626は土器片、627は須恵器片利用。628は管状土錘。長さ5.7cm。629は奈良時代土師器甕片。

SE207（Fig.33・36・37）

旧遺構番号205～207の井戸である。SE179を切る井戸で未完掘。井筒部分が207、205・206は掘方部分であるので、SE207とする。不整円形で径3.6m、深さ2.2m、井戸底は標高0.8m程である。底で長さ0.4m程の板を組んだ井筒桶を一段分検出した。　**出土遺物**（Fig.36・37）古墳時代から中世にかけての遺物が出土。中世土師器、輸入陶磁器などが多い。630～650は掘方。630～635は土師器。630～632は小Ⅲ片。口径9.2・9.4・9.2cm。糸切。633～635は坏片。14.2・16.0・16.4cm。糸切。636～640は白磁。636・637はⅢ。636はⅦ-1a 類片。口径10.0cm。637はⅡ-2類の器形だが、釉色は青磁に近い。口径9.0cm。638・639は碗。638はⅣ-1類片。639はⅤ-4a 類片。口径19.6cm。釉が集めに垂れる。640は白磁の優品。器種不明。内面露胎で袋物か。641は青磁碗。見込み蛇の目釉剥ぎ、高台内窯詰粘土が残る。642は龍泉窯系

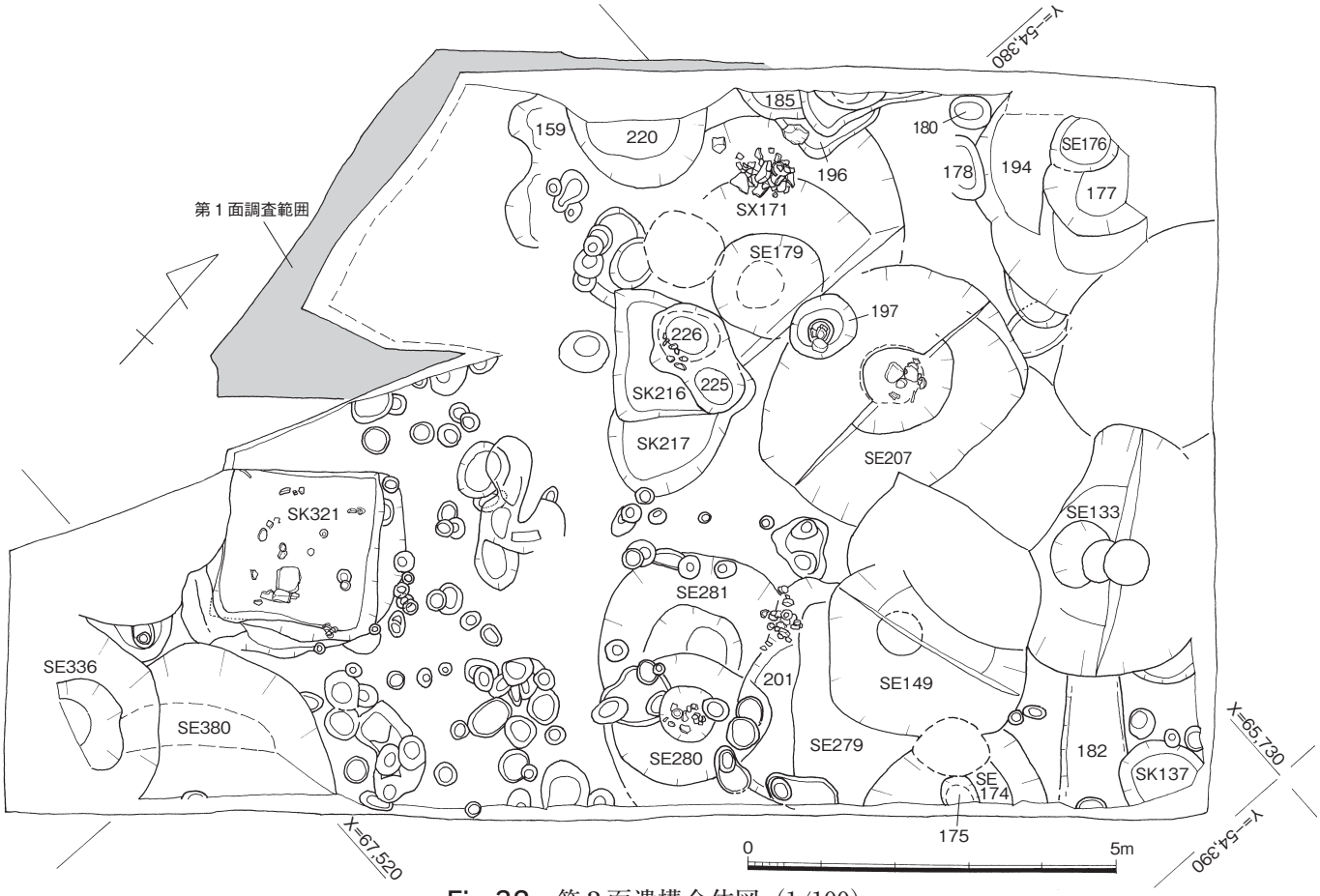
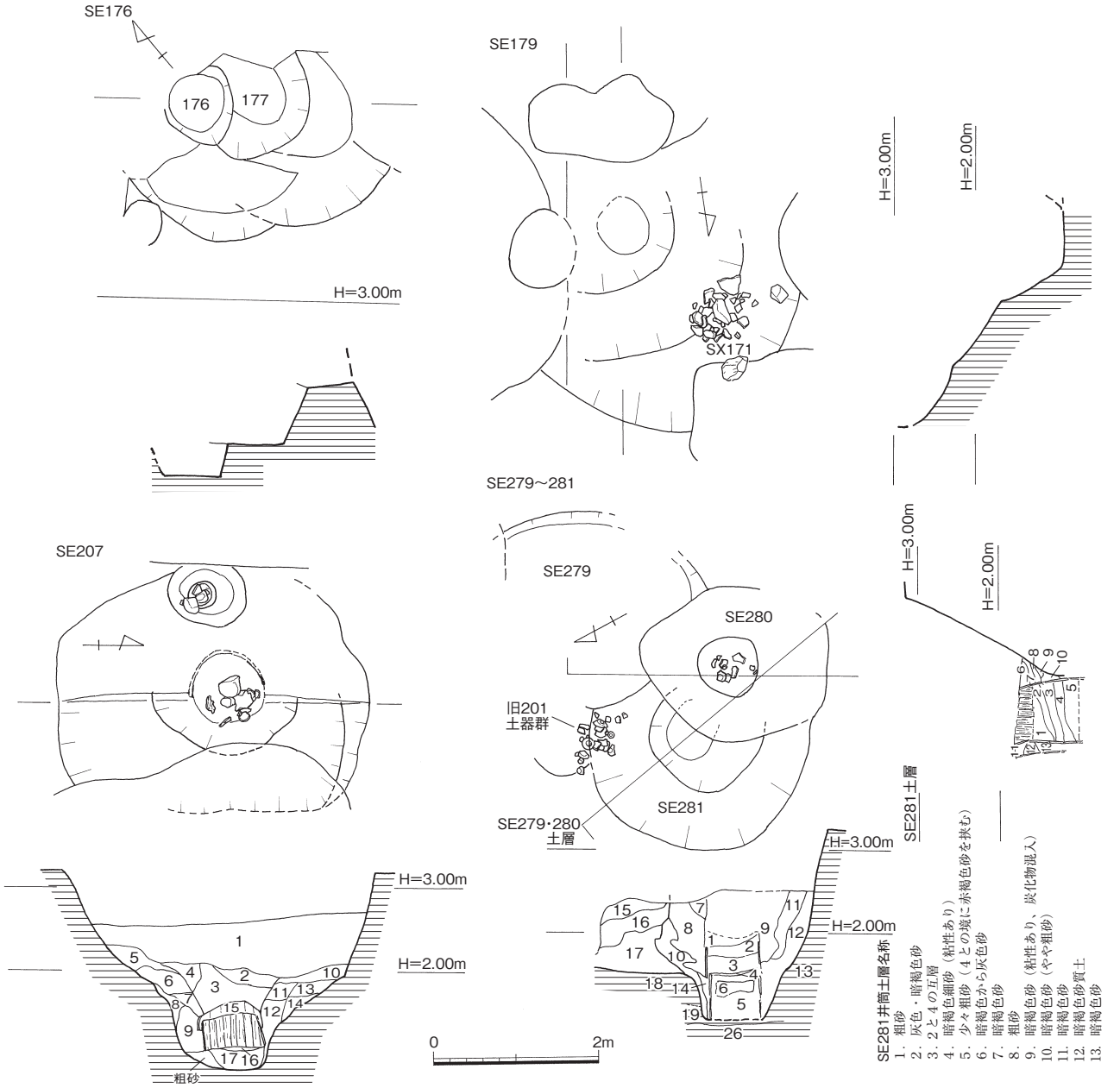


Fig.32　第３面遺構全体図（1/100）



SE207土層名称
1．黒褐色砂質土（暗褐色細砂ブロック混入）
2．黒褐色砂質土（黄白色細砂ブロック混入）
3．黒褐色砂質土（黒褐色粘質土ブロック混入）
4．褐色砂と1ブロックの混合
5．黒褐色砂質土（黄白色砂混入）
6．黄白色細砂
7．褐色砂（粗砂ブロック混入）
8．灰褐色細砂
9．黒褐色
10．灰白色砂・黒褐色砂質土の互層
11．褐色細砂（黄白色細砂ブロック混入）
12．暗褐色細砂（黄白色細砂ブロック混入）
13．灰褐色細砂と黒褐色砂質土の混合
14．褐色砂（黒褐色砂質土ブロック混入）
15．木質（殆ど土化している）
16．鉄分で硬く締る
17．黄白色砂に黒褐色砂質土ブロック含む

SE279・280土層名称
1．暗褐色砂と黄灰褐色砂の互層
2．黒色粘質土、炭化物、暗褐色砂質土などの互層
3．灰褐色砂
4．暗褐色砂質土（粘性強い）
5．砂（やや粗砂）
6．灰褐色砂（炭化物少量含む）
7．暗褐色砂と黄灰色砂の混合
8．暗褐色砂
9．灰褐色、橙色、暗褐色砂の混合（粘性多少あり）
10．暗褐色と黄灰色砂質土の混合
11．灰褐色砂質土
12．暗褐色砂質土
13．黄灰褐色砂
14．暗褐色砂に薄く灰褐色砂が混じる
15．灰褐色砂
16．暗灰褐色砂
17．黄灰褐色砂
18．灰白色細砂
19．赤く変化した粗砂
20．粗砂（湧水あり）

Fig.33　SE176・179・207・279～281（1/80）

青磁碗Ⅰ-3a 類片。見込みは片切りの花文と櫛目。高台内墨書。花押か。**643**は陶器甕口縁部片。**644**～**647**は墨書磁器片。**644**・**646**・**647**は白磁皿、**645**は白磁碗。**644**は漢字「福」か。**645**は花押。**646**は不明。**647**は花押か。**648**は磚片。工具ナデの丁寧な作り。**649**は瓦玉。白磁底部片利用。径4.6cm。**650**は古代土師器甕片。口径15.8cm。**651**は畿内系土師器。飛鳥Ⅳ式か。復元口径20.2cm。内面二段の斜め暗文。**652**～**680**（旧**207**）は井筒。**652**～**656**は土師器。**652**～**654**は小皿片。8.8cm・8.1cm・9.1cm。糸切で**652**・**653**は板目あり。**655**・**656**は坏片。口径15.3・17.0cm。糸切。**657**～**664**は白磁。**657**～**660**は皿。**657**～**659**はⅢ-1類片。見込み蛇の目釉剥ぎ。口径9.6・9.4・10.0cm。**658**・**659**は不明墨書痕あり。**660**は

Ⅷ-1b 類片。口径10.1cm。底面に墨書、「安□僧器」と読める。**661～663**は碗。**661・662**はⅤ-4a 類片。**663**は底部で不明墨書痕あり。**664**は「供」の墨書皿片。**665～669**は青磁。**665**は皿Ⅰ-2b 類。ほぼ完形。口径10.0cm。**666～669**は碗。**666・667**は龍泉窯系青磁片。**666**はⅣイ類に近い。口径16.0cm。**667**はⅠ-3a 類。口径16.6cm。高台内「三」の墨書。**668・669**は同安窯系青磁。**668**はⅢ-1c 類片。**669**はⅢ-1b 類片。口径16.8・17.0cm。**670・671**は陶器。**670**は壺Ⅳ-1a 類底部片。**671**は小鉢Ⅵ-1類片。**672～680**は井筒上層。**672・673**は土師器。**672**は小皿片。口径8.9cm。**673**は坏片。口径16.2cm。いずれも糸切・板目。**674～677**は白磁碗。**674・676・677**はⅧ-3類片。見込み蛇の目釉剥ぎ。**674**の口径17.2cm。**675**もⅧ-3類に近いか。**678**は同安窯系青磁皿Ⅰ-1b 類片。口径11.2cm。外面下半露胎。**679**は坩堝片。内面は赤く焼け、銅の融着物が付着。外面粗いハケ目と砂粒付着。**680**は瓦玉。平瓦片利用。径2.7cm。

SE279（Fig.33・37～39）

南東側第2面 **SE146**に切られ、旧**201**を含み、**SE280・281**と重なる井戸と思われるが、完掘していないので、詳細は不明。長径3.2mを測る。埋土は灰褐色砂～黄灰褐色砂。上面では **SE280**を切っているが、断面では明確な先後関係が確認出来ず、判断に苦しむ。　**出土遺物**（Fig.37）弥生土器や須恵器、中世土師器、輸入陶磁器、瓦などが出土。**681・682**は白磁碗Ⅳ-1b 類片。**681**は口径17.8㎝。**682**は見込みには磁器片が付着し、高台部飛鉋状ケズリ。**709～714**、**716～718**、**720～724**は旧**201土器群**部分。**709～712**は土師器。**709・710**は小皿片。9.6・9.0㎝。ヘラ切。糸切。**711・712**は坏片。口径12.7・15.2㎝。糸切・ヘラ切か。**713・714・716～727**は白磁。**713・714・716～718**は皿。**713・714**はⅢ-1類・Ⅱ-1a 類片。口径10.6・10.4㎝。高台部露胎。**716・717**はⅥ-2b 類片。**717**は口径10.0・10.4㎝。見込有文。**718**はⅥ-1b 類片。見込みは無文。**720～725**は碗。**720**はⅡ-1類片、**721**はⅣ-1a 類片。口径17.2㎝。高台飛鉋状ケズリ。**722**はⅣ-2ac 類片。口径16.4㎝。**723**はⅣ類底部。**724**はⅡ-5類片。体部下半飛鉋状のケズリ。**725**はⅤ-4c 類片。内面櫛目文、外面縦ヘラ花弁文。**726**は皿Ⅺ-2類片か。**727**は四耳壺Ⅱ類片か。光沢を持つ灰白色釉がかかるが、内面と高台部露胎。**728**は同安窯系青磁皿Ⅲ類片か。口径14.6cm。内面櫛目文。**730**・

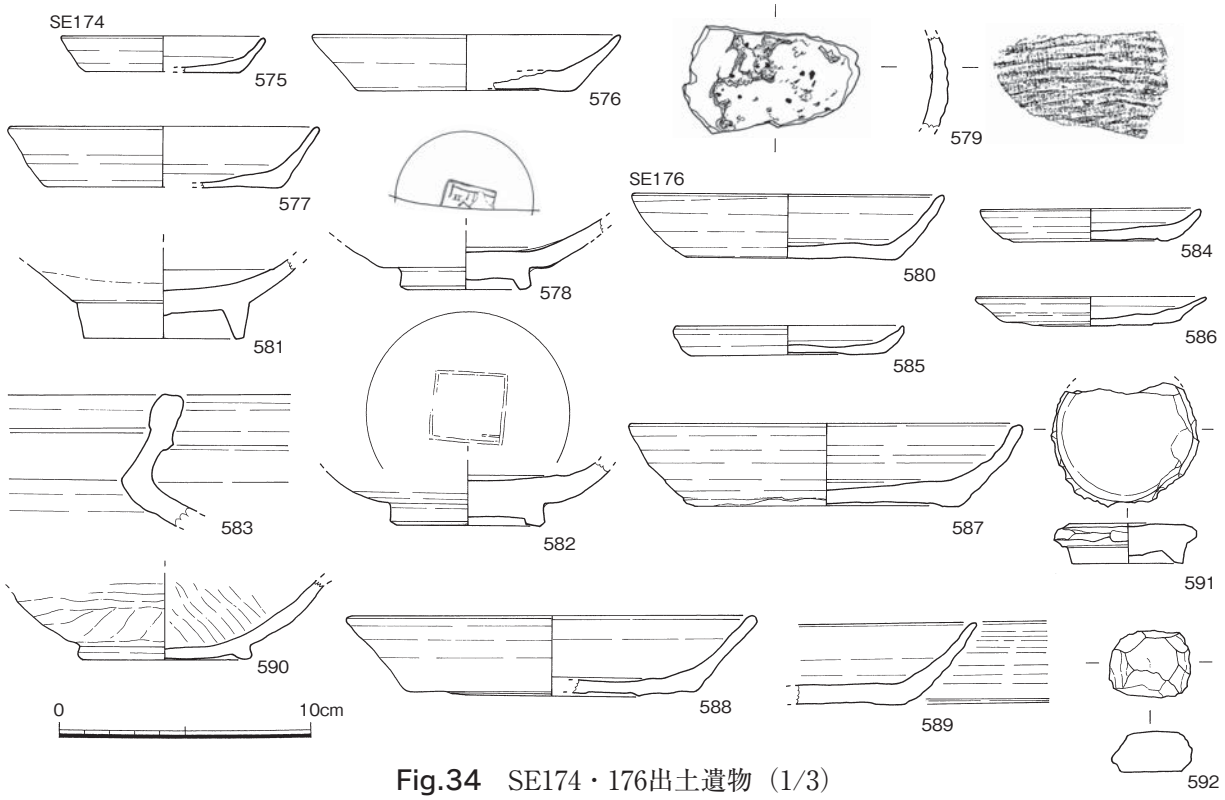


Fig.34　SE174・176出土遺物（1/3）

731は高麗青磁碗Ⅲ-1類片。見込みと高台畳付に目痕が４か所残る。**730**は口径10.1cm。二次被熱を受ける。胎土はキメの細かい灰色。**731**も二次被熱を受け、釉は発泡している。**732**は白磁小杯1/2片。口径4.0cm。器高1.6cm。光沢のある灰白色釉。高台部は露胎。**733**は磚の破片。11.1cm。厚み3.7cm。**734**は瓦玉。陶器片利用。**737**は越州系青磁片で「伯」の墨書がある。**738**は古代の須恵器の高台付坏片。

SE280（Fig.33・37・38、PL.7-3）

SE281を切る井戸。規模は2.5×1.9m、深さ2.3m、標高0.9m迄掘り込む。半裁調査で未完掘である。旧遺構**192**・**282**を含む。旧**192**は井筒に当たる。井筒は桶組では直に掘り込む。井筒内は暗褐色から黒色粘土、掘方は暗褐色砂質土や砂。　**出土遺物**（Fig.37・38）弥生土器や中世の各種遺物が出土。中世土師器、輸入陶磁器などが多い。**683**～**694**は井筒出土。**683**～**685**は土師器。**683**は小皿で完存。口径9.2㎝。ヘラ切で板目。**684**・**685**は坏片。15.3・14.0㎝。**686**は瓦器皿片。口径10.4㎝。内外面ヘラミガキ。**687**～**692**は白磁碗。**687**～**691**はⅡ-1類片。口径16.0～16.2㎝。**687**は畳付重ね焼き粘土痕残る。**688**は高台内窯詰め時の粘土残る。**689**の高台は露胎で見込み砂粒付着。釉面細かい貫入が入る。**692**はⅣ-1b 類底部。高台露胎で飛鉋状のケズリ。**693**は瓦玉。白磁碗底部利用。径5.9㎝。**694**は管状土錘。残存長4.7㎝。**695**は上面出土の白磁皿Ⅵ-2b 類片。口径10.2㎝。**696**は白磁碗Ⅳ-1b 類底部。高台露胎で飛鉋状のケズリ。

SE281（Fig.33・38・39、PL.7-３）

SE279・**280**に切られ、重複する３基の井戸で最も古い。安全対策上完掘していない。旧遺構**283**を含む。　**出土遺物**（Fig.38・39）　弥生土器、中世輸入陶磁器、中世土師器、古代～中世瓦など各種遺物が出土。**715**は白磁皿Ⅲ-1類片。口径10.8cm。高台部露胎。**719**は碗Ⅱ-1類片。口径17.0cm。口唇部一か所欠けるが釉がかかる。**729**は越州窯か高麗の青磁碗底部。高台内重ね焼き痕がある。**735**は瓦玉。須恵器片利用。径2.7cm。**736**は墨書土器片。古代須恵器片利用。意味不明。

SE380（Fig.21・39、PL.6-2）

調査区南東隅、**SE336**に切られる井戸。壁際で完掘していない。土層から見ると第２面から掘り込んでいる。　**出土遺物**（Fig.39）　**739**は土師器坏か椀の口縁部片。口径15.2cm。**740**は瓦器椀小片。体部はミガキ。**741**～**744**は白磁。**741**は碗Ⅱ-1類片。口径17.0cm。**742**・**743**は碗Ⅳ-1a 類片。**742**の口径は16.4cm。**743**は底部。高台は削り出し、畳付は擦る。**744**は福建産白磁片。**745**は陶器水注を転用したガラス坩堝。内面溶融したガラスが厚く付着し、光沢を帯びる。上面は発泡している。外面釉が溶けて荒れ、付着物が付く。胴下半部に方形の窓が開き、ガラス質の付着物が付く。把手の一部残る。

（２）土坑（Fig.40～43、PL.7-3・6）

SK182：**834**は緑釉陶器皿底部片。光沢を持つ明緑色を呈す。　**SK194**：**821**・**822**は白磁碗。**821**はⅣ類口縁部小片。**822**はⅣ類の底部か。**823**は土師器小皿片。口径9.2cm。糸切。　**SK196**：**824**は土師器坏片。**825**は同安窯系青磁碗Ⅲ-1c 類片。**826**は青磁装飾の耳片。径2.8cm。　**SK216**（Fig.40・41）調査区南西側で検出。平面不整方形の土坑。北側に偏って深くなる。長径1.84m、短径1.9m、深さ１m。埋土は黒色か黒褐色の砂質土か粘土。**746**～**756**は土師器。**746**～**752**は小皿片。口径8.9～9.8㎝。糸切で**747**・**748**・**750**・**751**は板目残る。**753**～**756**は坏片。**753**・**754**は口径16.1・16.2㎝。糸切で板目残る。**755**・**756**は口径16.4・15.8㎝。ヘラ切。**757**～**759**は白磁碗。**757**はⅡ-1類片。浅黄色の釉がかかり、細かい貫入が入る。**758**はⅥ-1b 類片。内面櫛目文。**759**はⅤ-4a 類底部片。見込みに釉溜まりがある。**760**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2a 類底部。釉が厚めで、胎土は灰色でセメント質。**761**は陶器盤口縁部。３種の釉色がある。胎土に黒色微粒を含む。磁灶窯系か。**762**は陶器の鉢口縁部小片。口縁部段が付く。**763**は管状土錘片。残存長3.9㎝。**764**・**765**は土製品。**764**は土弾。径2.5㎝。瓦片を丸く仕上げる。**765**は瓦玉。瓦片利用。径2.4㎝。縁辺細かい調整。　**SK217**（Fig.41）　**SK216**に隣接する土坑。**766**は土師器坏片。口径13.2㎝。

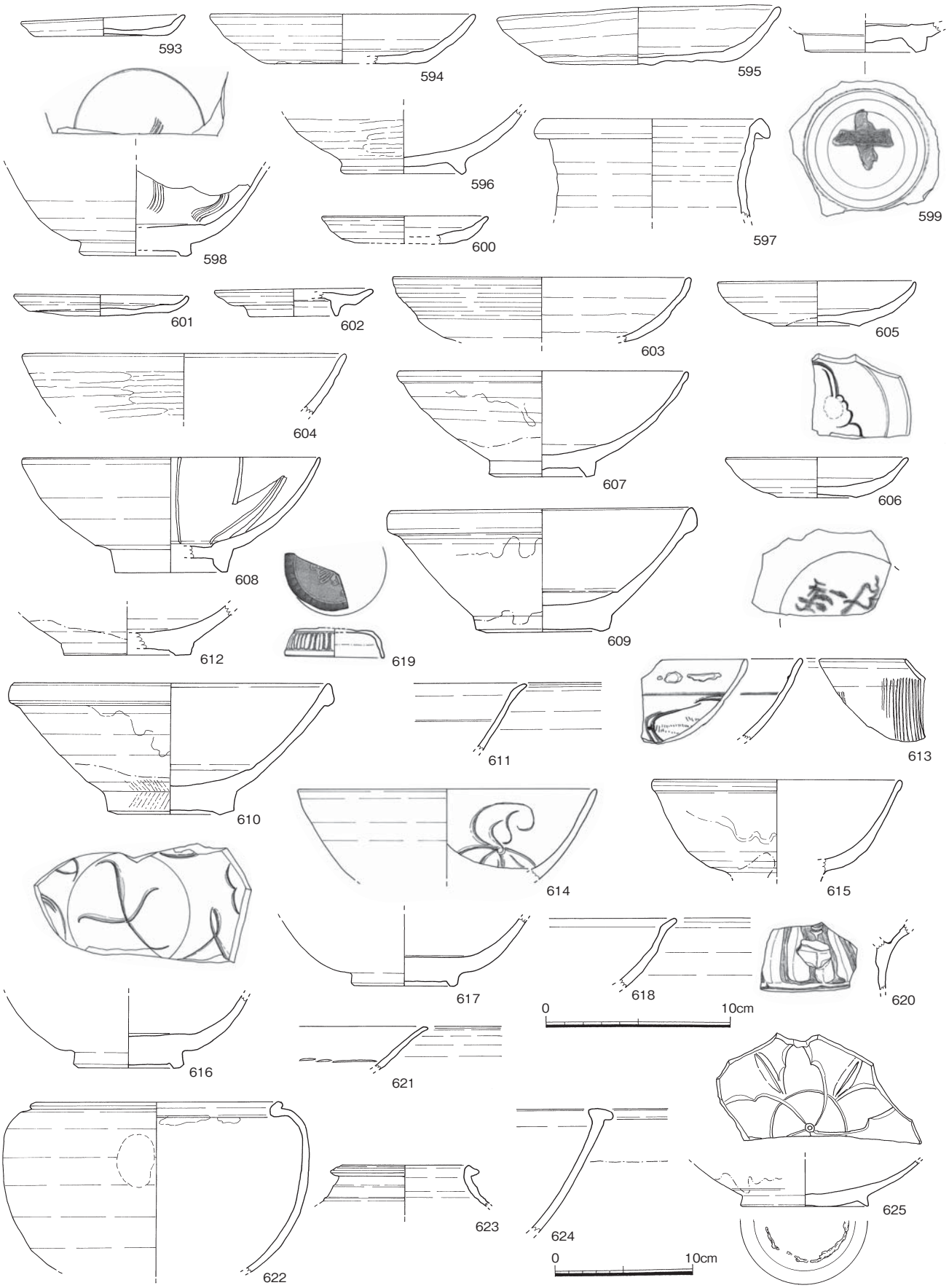


Fig.35　SE179出土遺物（622～625は1/4、他は1/3）

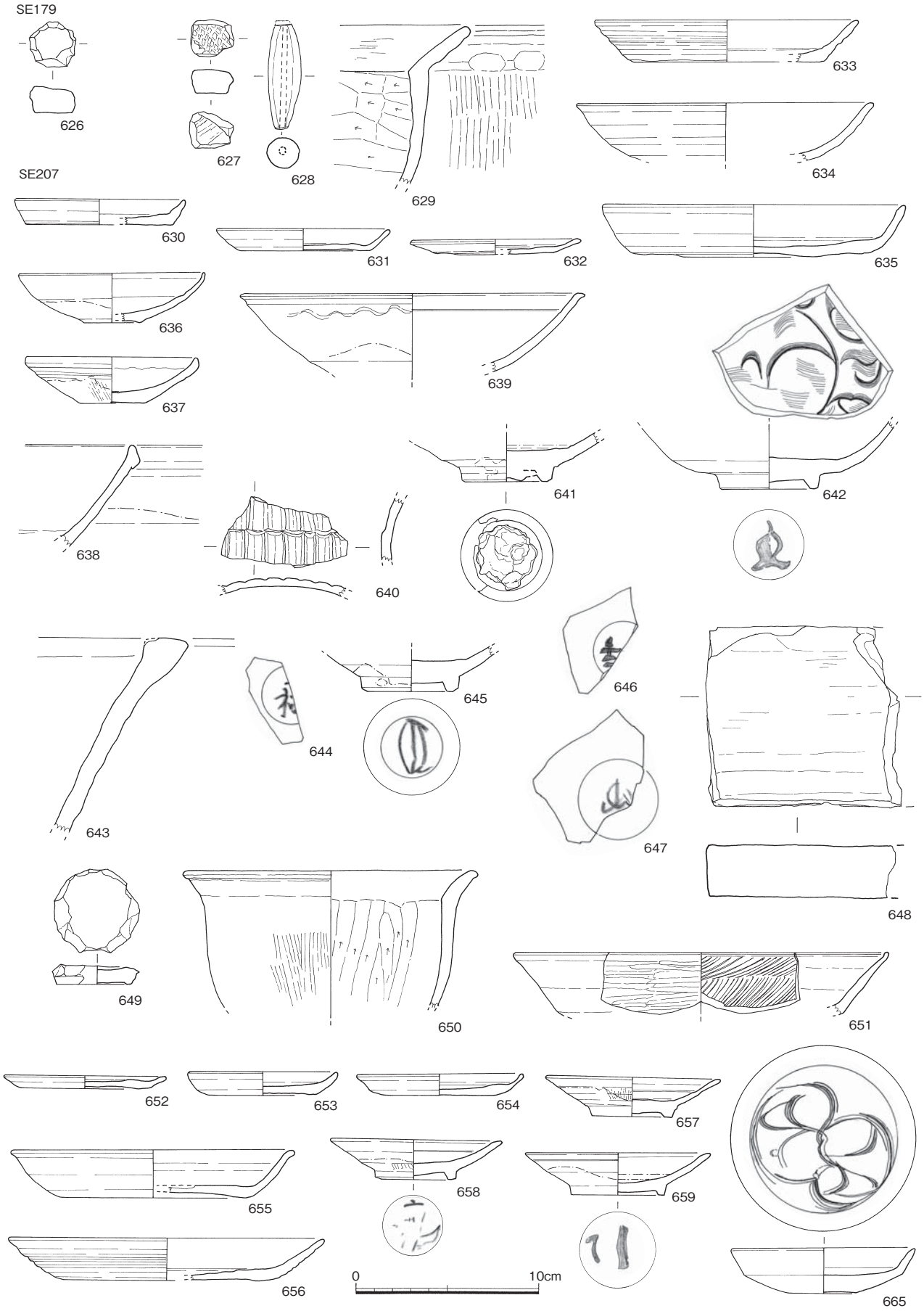


Fig.36　SE179・207出土遺物（1/3）

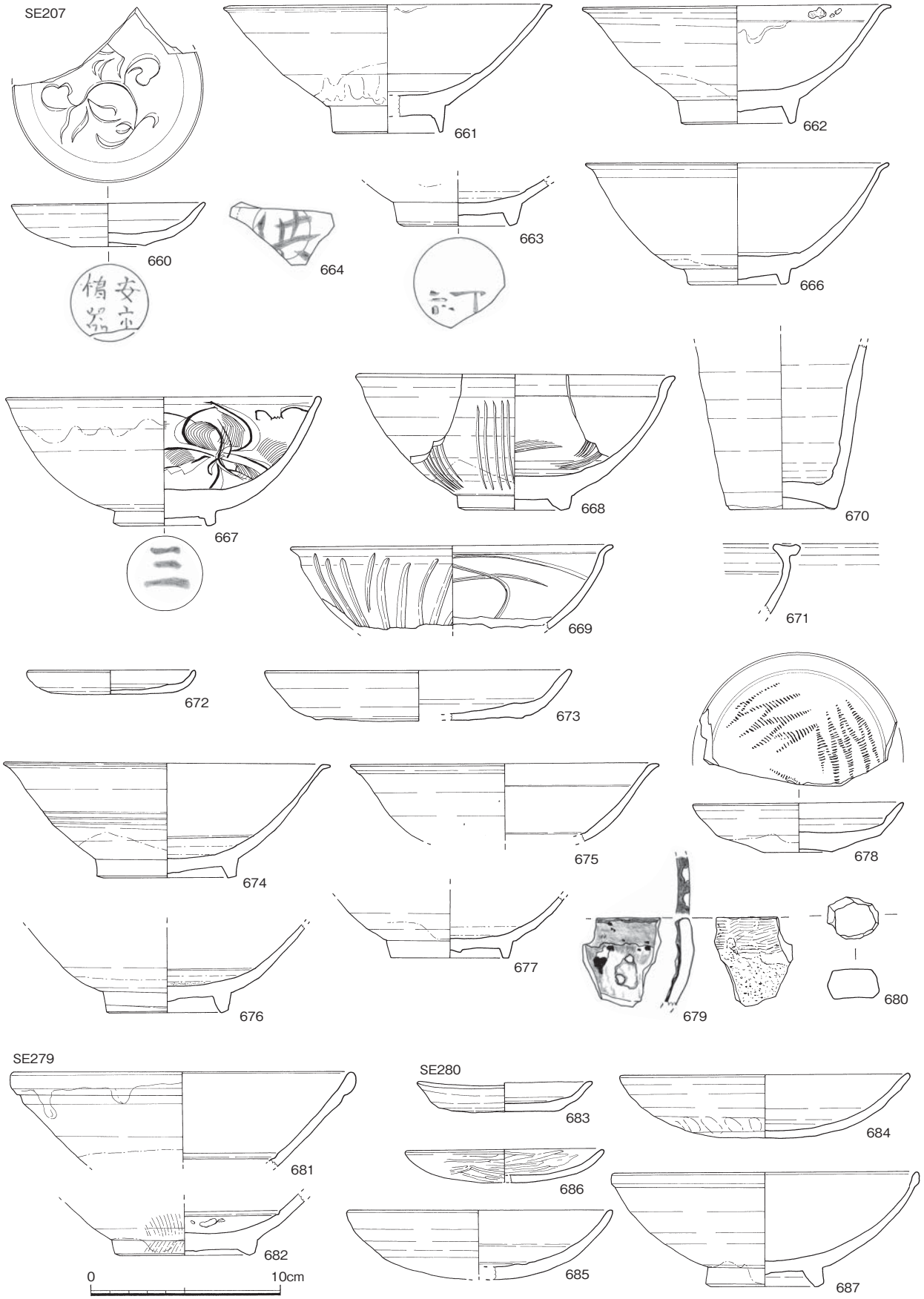


Fig.37　SE207・279・280出土遺物（1/3）

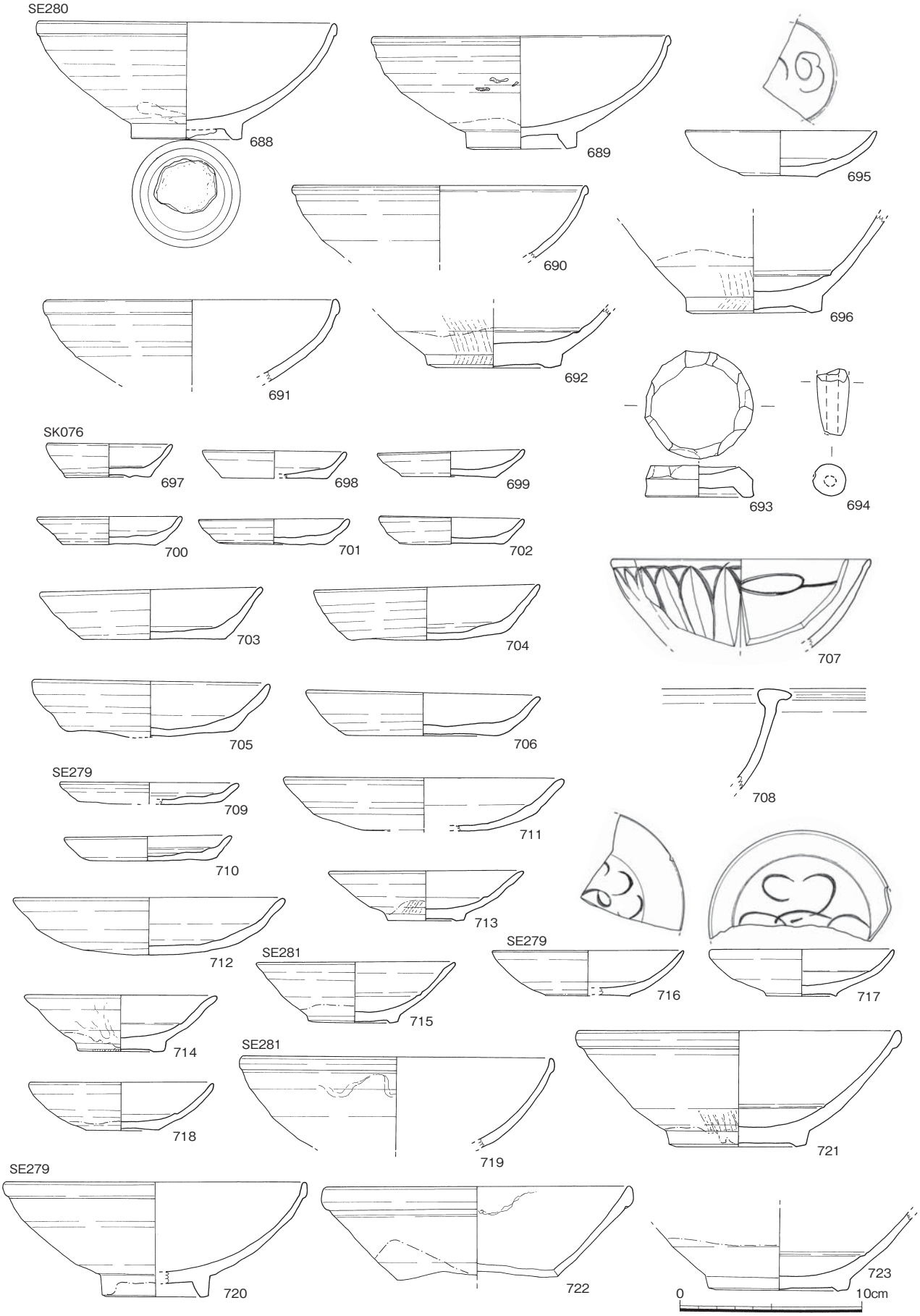


Fig.38　SE279・280・281、SK076出土遺物（1/3）

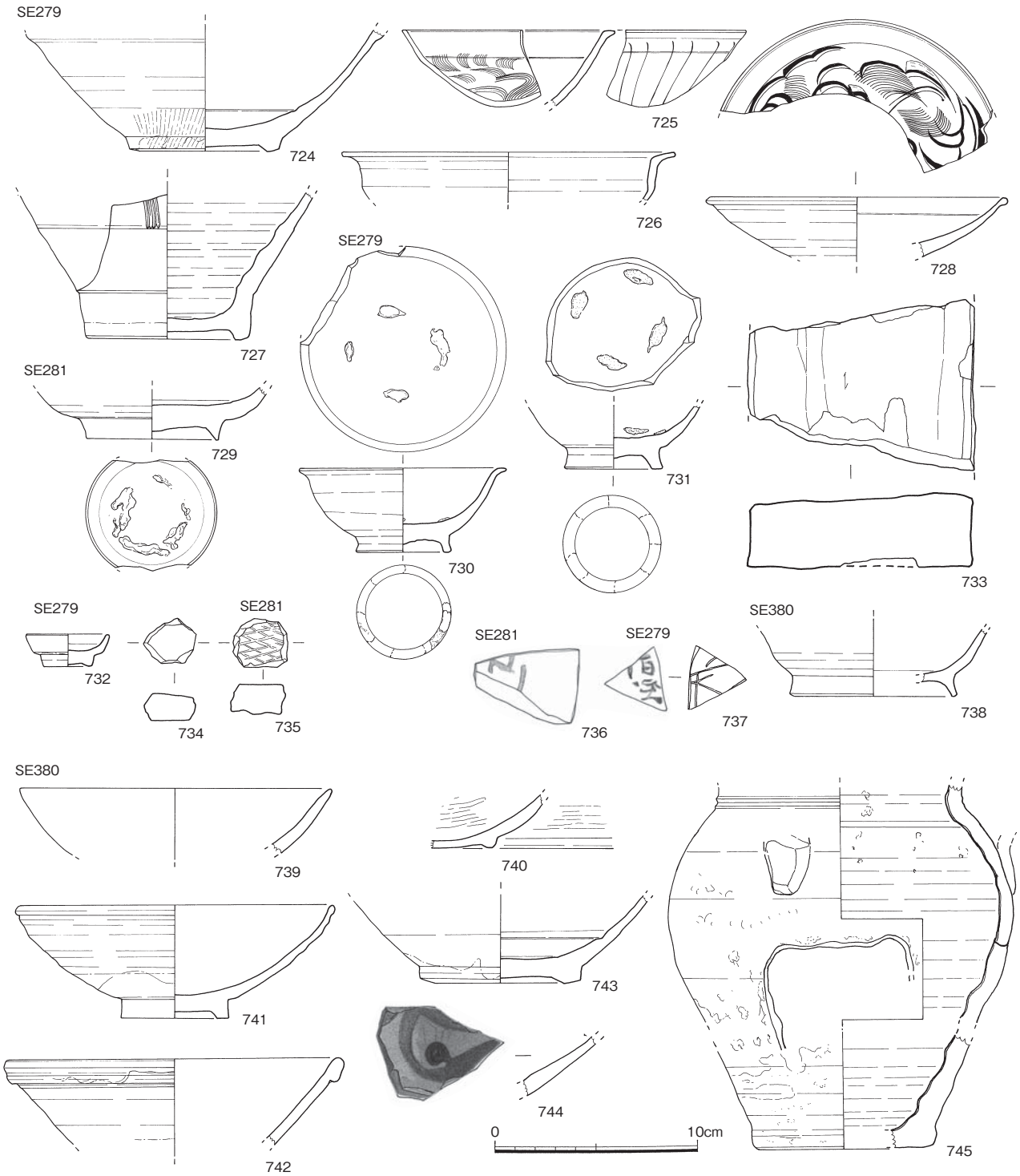


Fig.39　SE279・281・380出土遺物（1/3）

糸切板目残る。**767**～**769**は白磁碗。**767**はⅤ-1a 類片。口径16.3cm。釉が厚めで表面ピンホールが入る。**768**はⅣ類底部。飛鉋状のケズリ、**769**はⅤ-2b 類片か。外面縦ヘラ文入る。**770**は陶器壺Ⅳ-3b 類片。口径8.0cm。光沢のあるオリーブ釉。粉っぽい感じの胎土。**771**は磚片。残存長14.3cm、厚み3.9cm。工具によるタテナデ。**772**は墨書磁器片。**773**・**774**は弥生土器。**773**は小型壺。底部平底のなごり残す。終末期頃か。**774**は鉢片。口径17.4cm。外面細かいハケ目。内面ナデ。　**SK219**：**775**・**776**は陶器大型甕の口縁部と底部。**775**は甕Ⅰ類の口縁か。赤っぽい器壁に灰オリーブ色釉がかかる。**827**は青磁ⅢⅠ-1b 類片。口径10.0cm。底部墨書あり「宅」か。　**SK370**：**828**は白磁ⅢⅥ-1b 類片。口径10.4cm。　**SK378**：**829**は白磁碗Ⅳ類口縁部小片。**830**は須恵器坏蓋。　**SK406**：**831**は白磁ⅢⅥ-1b 類片。口径10.2cm。**832**は土師

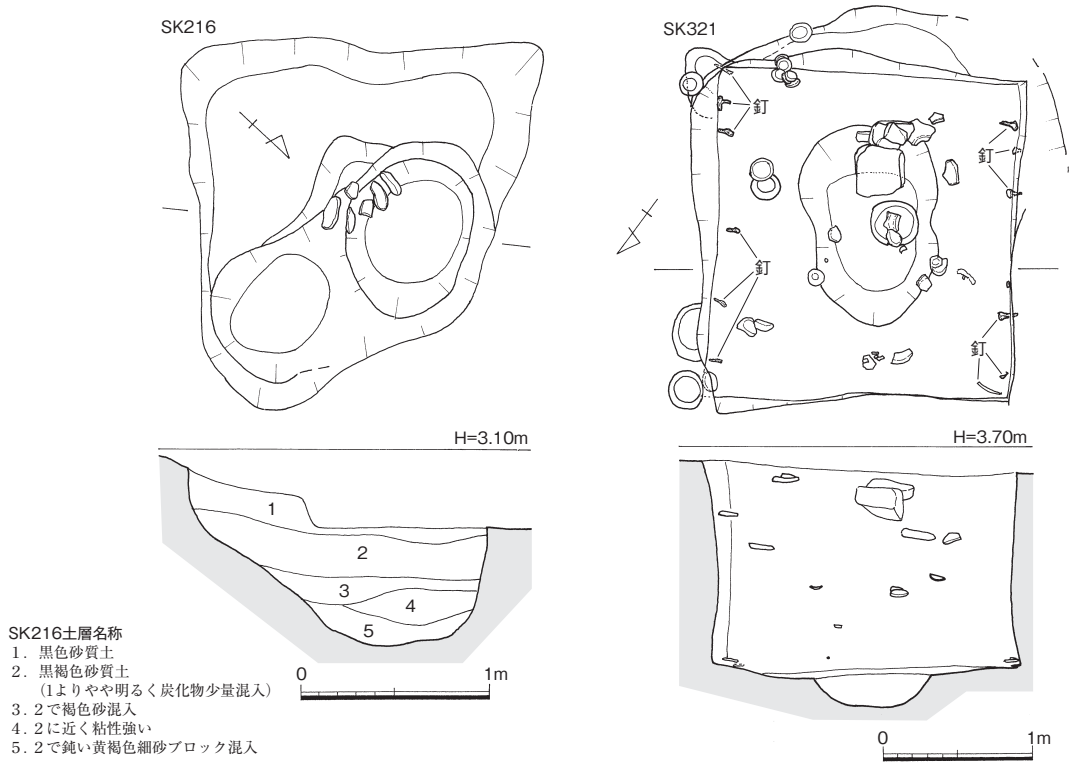


Fig.40　SK216・321（1/40、1/50）

器坏片。口径13.8cm。ヘラ切。　**SX171**（Fig.43）**833**は白磁Ⅲ類底部片。外底部釉まだらにかかる。

SK321（Fig.40・42・43、PL.6-2、7-4・5）調査区南側、**SK286**下で検出した方形土坑。規模は2×2.1m、深さ1.05mを測る。壁面はほぼ直立する。壁は板で覆われていたようで、板を止めた鉄釘が出土した。釘は四隅と南と北側面で検出されており、その面で四隅の柱と側板・底板を釘で固定していたものと思われる。地下倉庫であろう。土層を見ると中間の深さで厚10.0cm程の炭・灰・焼土層があり、倉庫として使用停止後、ある時期火災で焼けた可能性がある。この遺構からは遺物が多数出土した。　**出土遺物**　中世の土師器、瓦器、国産陶器、輸入陶磁器、獣骨などが出土。遺物の量は多い。**777～791**は番号取り上げ遺物。**777～786**は土師器。**777～783**は小皿片。口径8.8～9.5cm。**783**がヘラ切のほかは糸切。**784～786**は坏片。口径14.4・14.8・15.4cm。ヘラ切で、**785**は口縁部一部黒くなる。灯明皿に使用か。**787**は瓦器椀。口径17.2cm。内外面粗いヘラミガキ。**788～790**は白磁。**788**・**789**は皿Ⅵ-1a類片。いずれも口径10.1cm。底部露胎。**790**は碗Ⅱ-4類片。口径15.2cm。黄みがかった灰白色釉がかかるが、高台部ケズリで露胎。**791**は初期龍泉・同安窯系青磁0類片。口径15.8cm。**792～795**は灰層より上の上層。**792**は瓦器椀底部。内外面ミガキ。**793～795**は白磁。**793**は皿Ⅵ-1b類片。口径10.6cm。底部露胎。**794**は口縁輪花状の碗Ⅶ類片か。**795**は底部。高台部は露胎であるが、内底部は施釉があり、鉢かも知れない。**796**・**797**は中層。**796**は土師器小皿。ほぼ完存。口径9.0cm。ヘラ切板目。**797**は白磁碗Ⅳ-1b類片。口径16.4cm。高台部露胎。飛鉋状のケズリ。**798～804**は下層。**798**・**799**は土師器の坏。口径14.8・15.3cm。底部は押し出しナデ、粘土紐の巻上げ痕が残る。**798**は外面には指押さえ痕残る。**800**は瓦器椀底部片。体部から内面ヨコミガキ。12世紀前半か。**801**は白磁碗Ⅳ-1a類片。口径16.8cm。体部下半から高台は露胎。畳付擦る。**802**は越州窯系青磁の蓋片か。口径11.2cm。**803**・**804**は土製品。遊戯具の瓦玉や土弾。径1.8・2.3cm。側面を擦って丸く仕上げる。**805**は土層ベルト出土。白磁皿Ⅺ′-3類片。口径9.6cm。**806～815**は床・最下層出土。**806**は黒色土器B類皿片。口径11.0cm。11世紀後半か。**807～811**は白磁。**807**・**808**は皿Ⅵ-1b類片。口径10.2・10.4cm。**809～811**は碗。**809**はⅡ-1類片。口径15.6cm。高台部露胎。**810**はⅣ-1b類

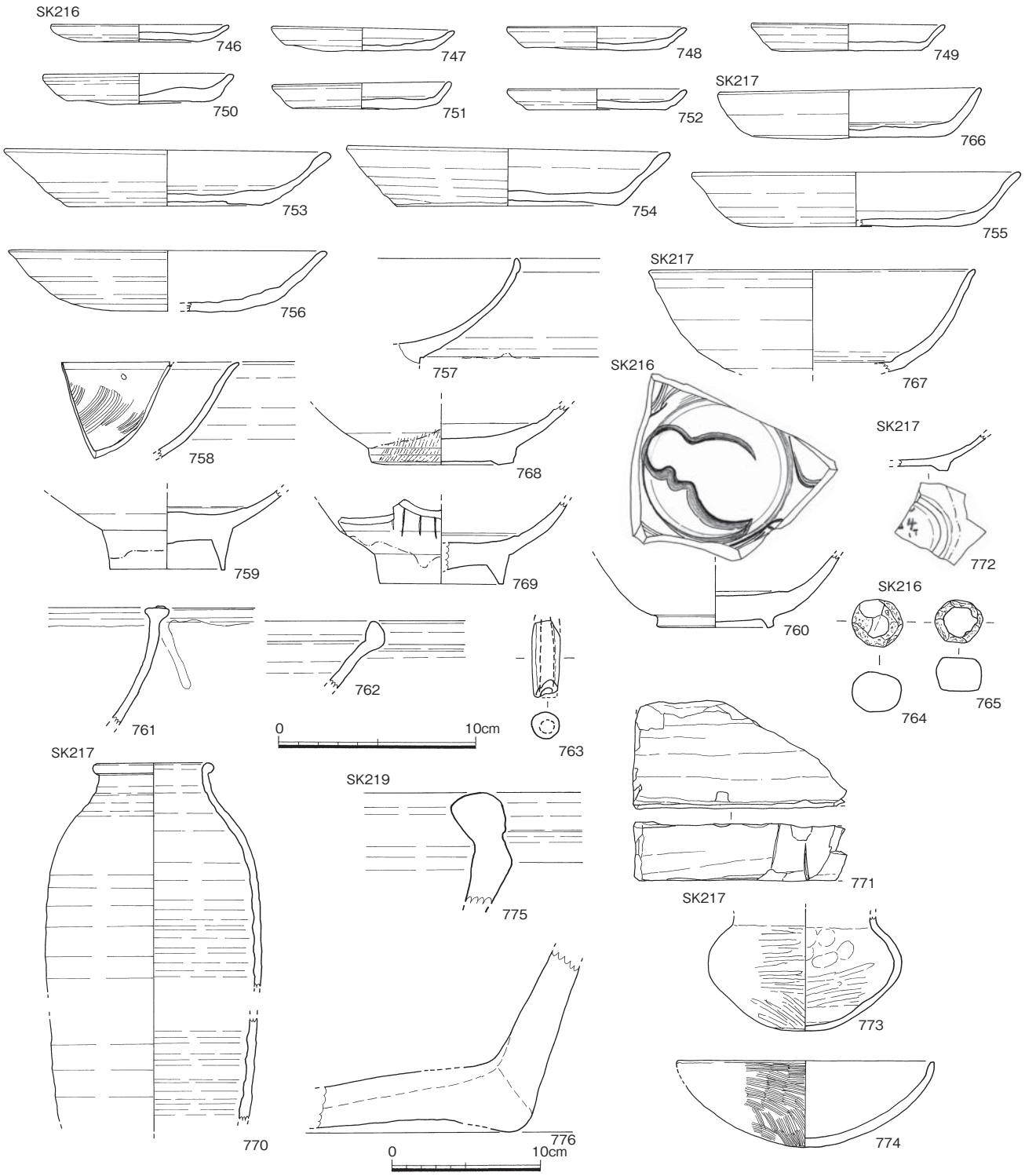


Fig.41　SK216・217・219出土遺物（1/3、770～775は1/4）

片。口径16.4cm。焼成やや不良。**811**はⅫ-1b 類片。**812**は四耳壺Ⅱ類胴・頸部。破片から復元。大型品。残存高41cm 以上。外面下半に波状の沈線。**813**・**814**は蓋。**813**は白磁。型作り沈線で区画する。**814**は青白磁片。天井部は型で花文を打ち出す。**815**は土師器脚台付小皿片。口径9.8cm。**816**～**820**は底層炭化物下。**816**は土師器丸底坏片。口径14.4cm。底部押し出し。**817**は瓦器椀片。口径14.4cm。**818**・**819**は白磁。**818**は碗Ⅱ-4a 類片。口径15.0cm。**819**は広東系大鉢片。口径27.5cm。見込み櫛目文とヘラ沈線。**820**は瓦玉。白磁碗底部利用。径7.1cm。**847**は床面出土。風化し白味を帯びるガラス玉。径５㎜。

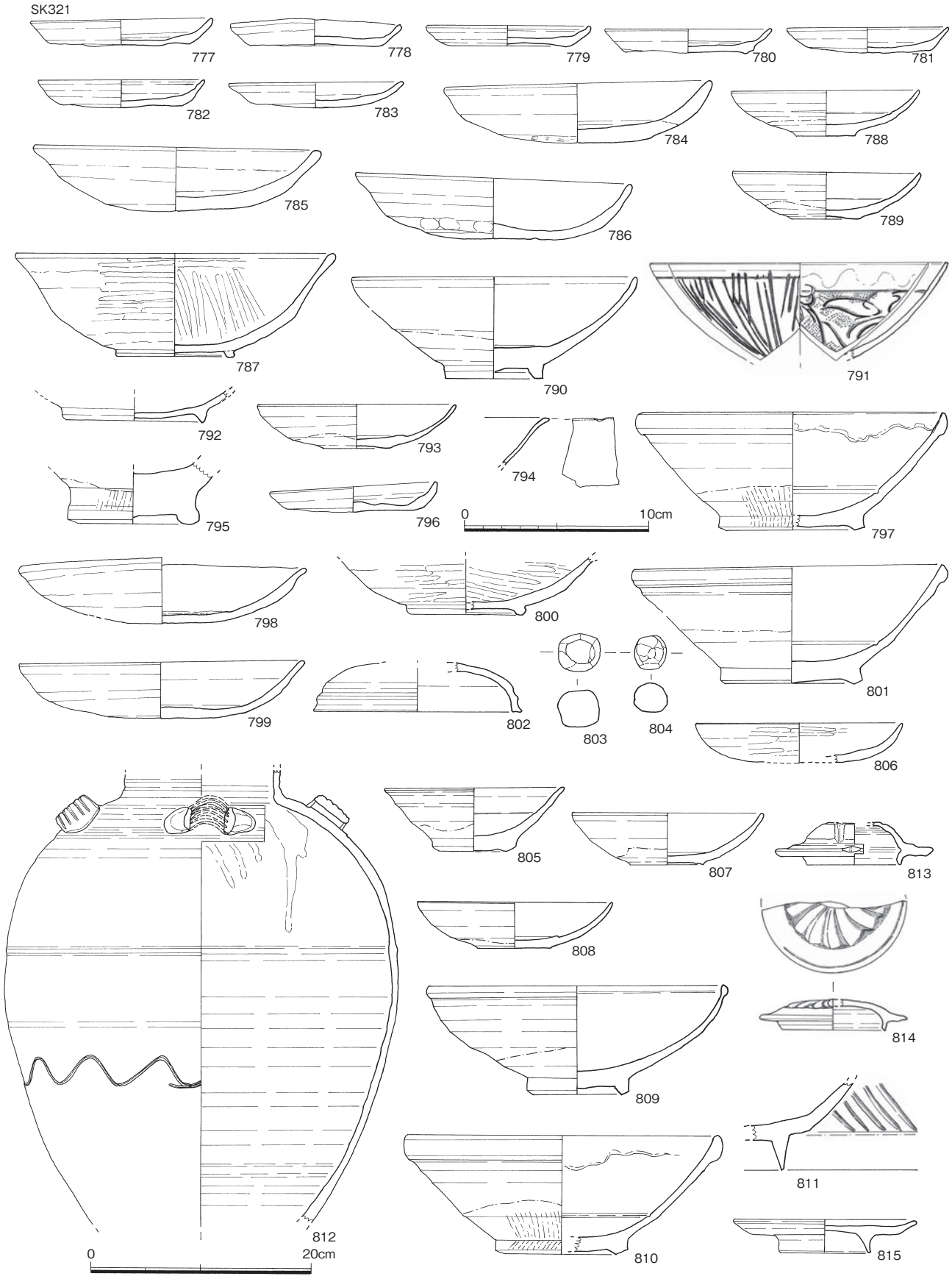


Fig.42　SK321出土遺物（1/3、812は1/5）

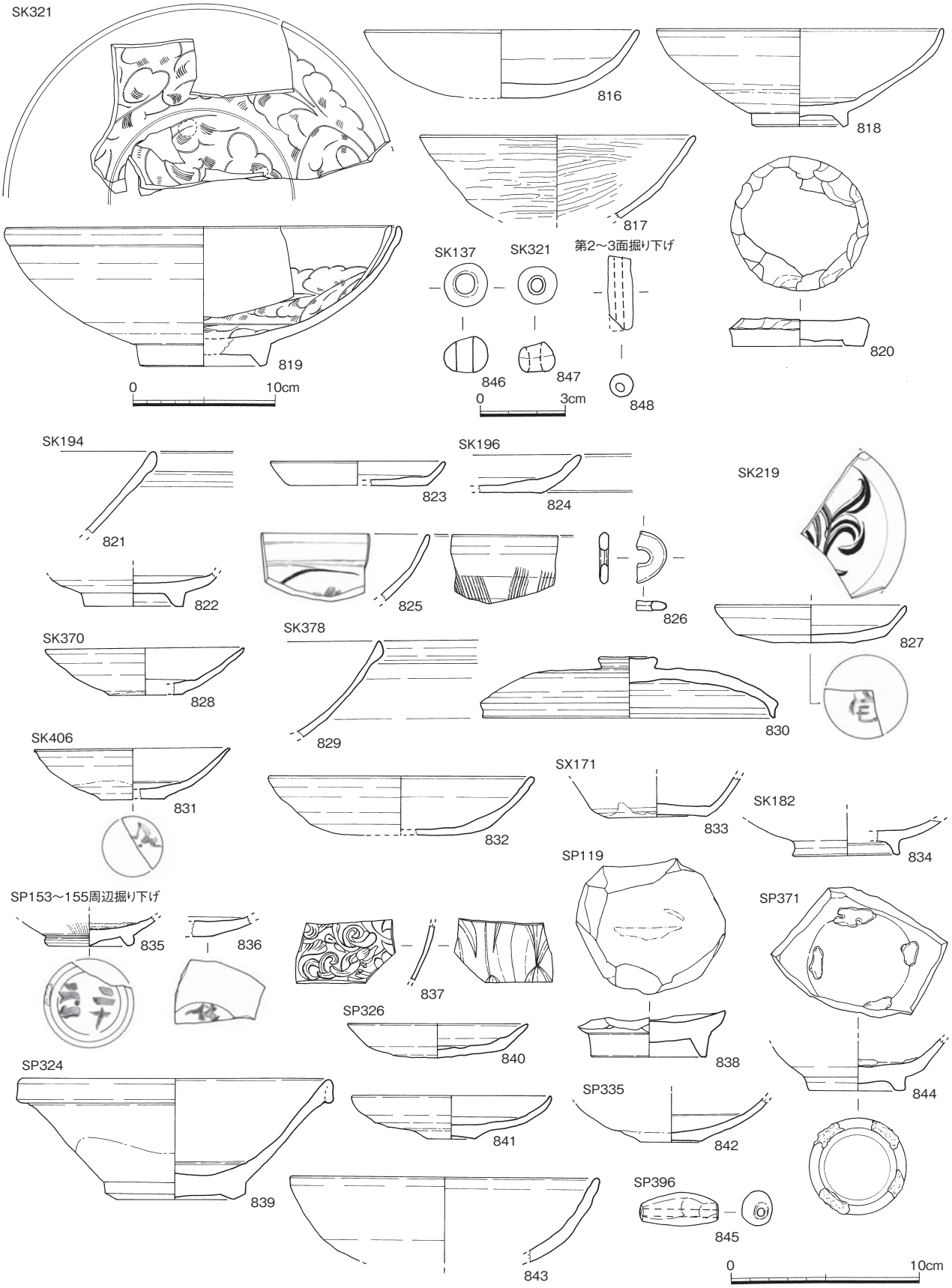


Fig.43　各土坑、SX171、ピット出土遺物（846・848は1/2、819は1/4、他は1/3）

（３）ピット出土遺物（Fig.43）

835～837は **SP153～155**周辺第2面掘り下げ、**835・836**は青磁皿片に書かれた墨書。**835**は底部に「二十六口」とある。**836**は意味不明。**837**は白磁で薄胎の優品。内面は浮彫文様、外面は鎬蓮弁文。**838**は **SP119**出土の瓦玉。白磁片利用。**839**は **SP324**出土。白磁碗Ⅳ-1b 類片。**840・841**は **SP326**出土。**840**は土師器小皿片。ヘラ切。**841**は白磁皿Ⅶ-1a 類か。**842・843**は **SP335**出土。**842**は白磁皿Ⅶ-1a 類か。**844**は **SP371**出土。高麗青磁碗片。見込み・高台部目痕残る。**845**は **SP396**出土の管状土錘。全長4.2cm。

４　第４面の調査（Fig.44、PL.7-7）

基盤の砂丘層まで掘り下げ、弥生時代の住居跡２棟を検出した。この面の上面で古墳後期や古代遺物が出土しているが後世の遺構で破壊され、遺構としては把握出来なかった。出土土器については本市埋蔵文化財調査課職員久住猛雄氏に教示を受けた。

（１）竪穴住居跡

SC233（Fig.45・46、PL.7-6）

北東隅で検出したコーナーの一部。残存長1.1m、壁高22cm。　**出土遺物：849**は鉄製の素環頭の刀子。残存長9.7cm。

SC417（Fig.44～46、PL.7-7）

中央部で検出。当初調査でわからず下げてしまった部分もある。規模は長軸長4.6m、短軸長3.6m、壁高30㎝を測る。主柱穴は不明。一部床面が高いところがあり、ベッドを有していた可能性がある。弥生時代終末期頃のものか。　**出土遺物：850**は壺1/3片。口径14.0㎝。伝統的Ⅴ様式系在地変容Ｂ系統か。底部

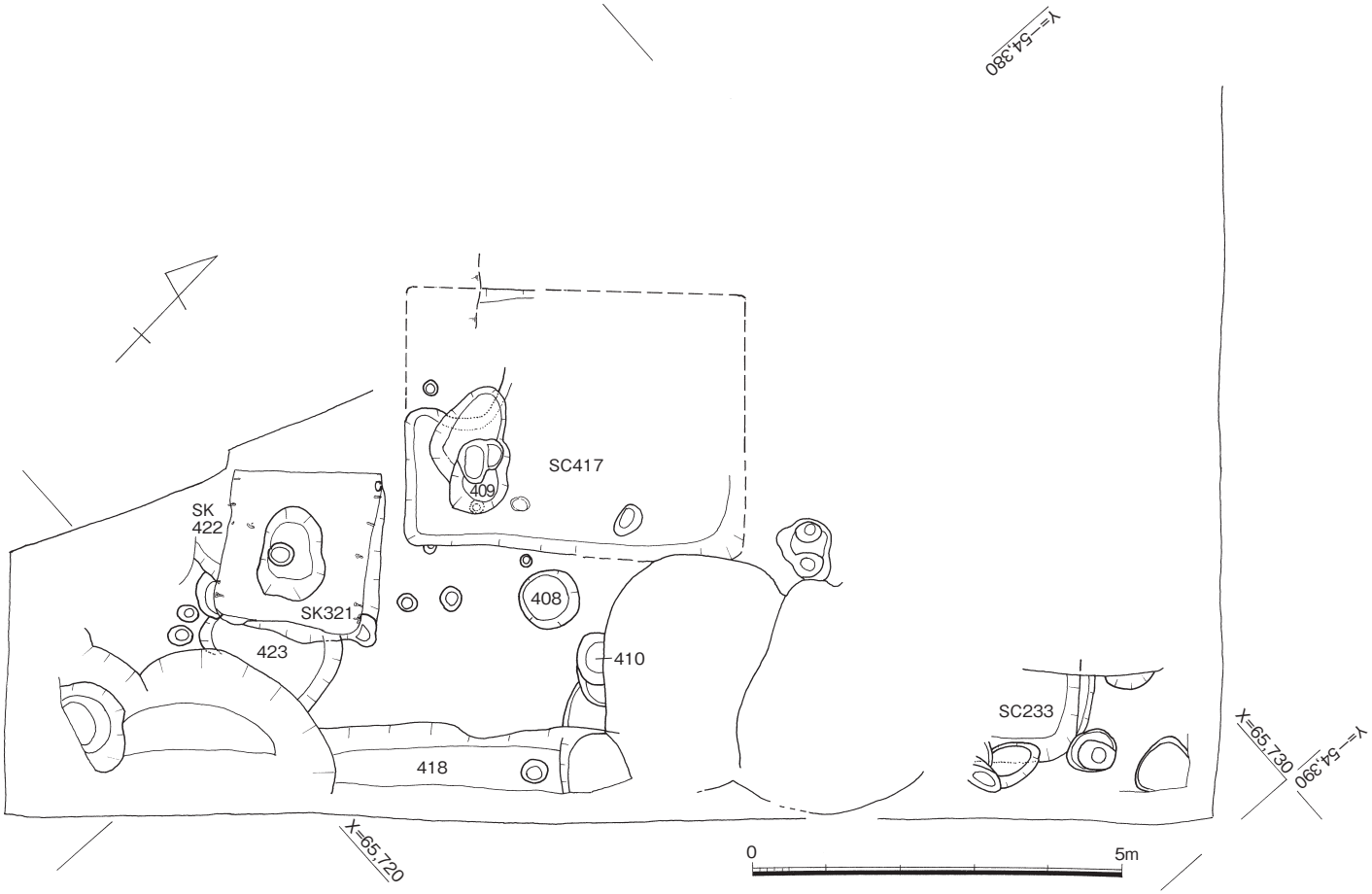


Fig.44　第４面遺構全体図（1/100）

と体部上半接合して作る。外面ヘラミガキ、内面粗いハケ目。**851**は甕片。口径22.8cm。内外面粗いハケ目。外面黒斑がある。伝統的Ｖ様式系の在地甕。**852**は壺片。口径10.1cm。外面ヘラミガキでハケ目残り、内面ヨコハケ目。**850**と同系統のもの。**853**は壺か甕の底部片か。外底部に円形粘土を詰めた痕跡が残る。

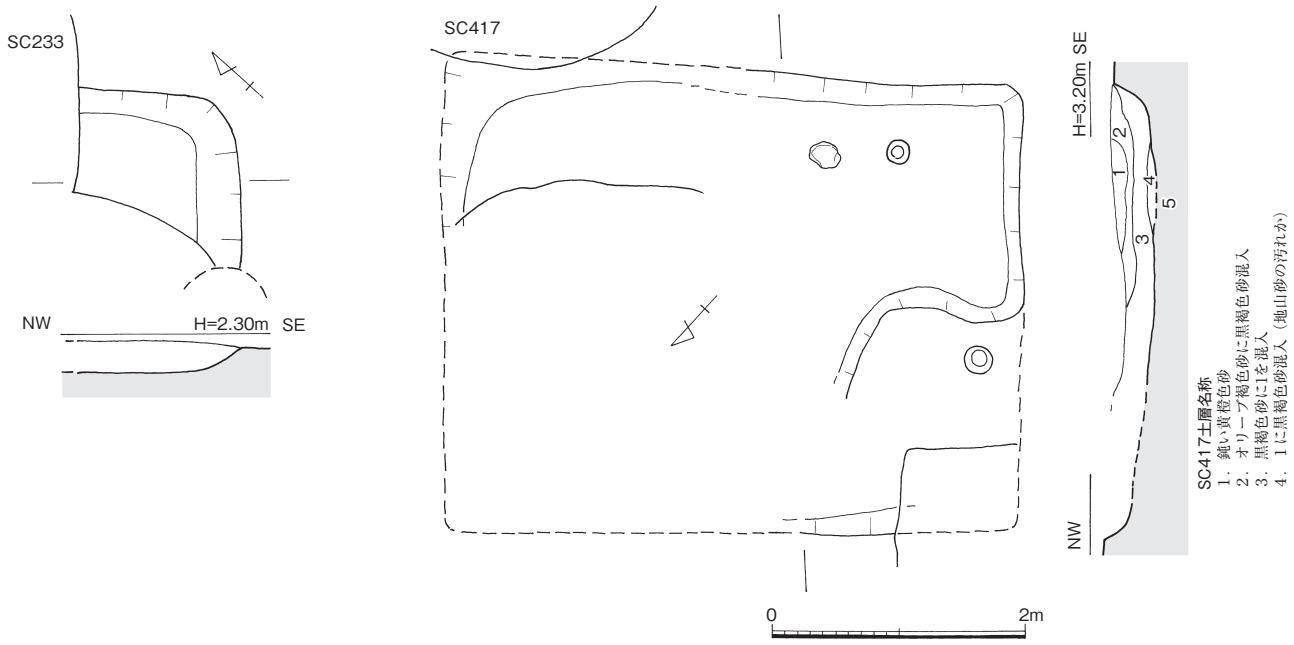


Fig.45　SC233・417（1/60）

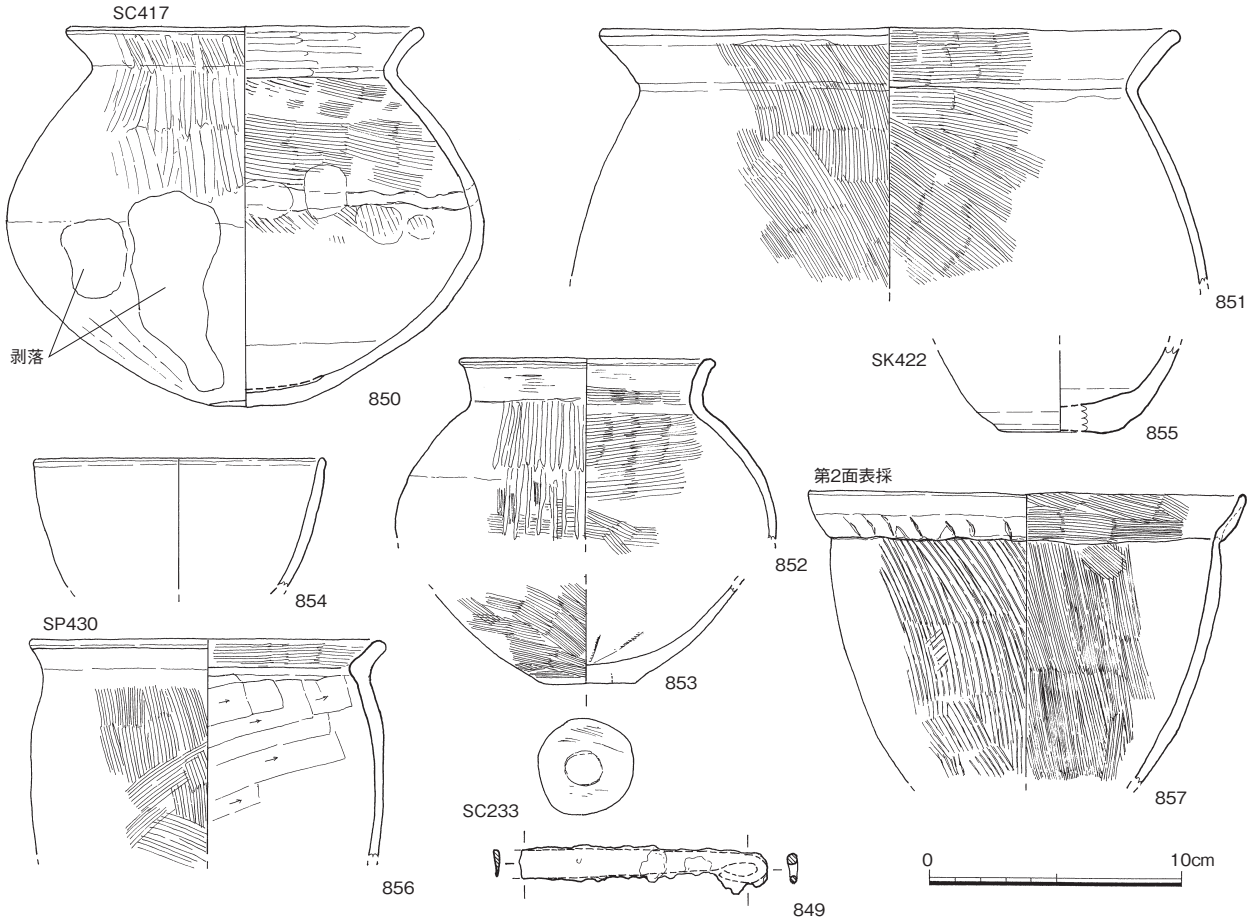


Fig.46　第４面出土遺物（1/3）

854は鉢片。口径11.4cm。ナデ調整。

（２）土坑・ピット出土遺物（Fig.46）

855はSK422出土。須恵器の壺か甕底部片。856はSP430出土。土師器甕片。口径14.0cm。外面ハケ目、内面ヘラケズリ。

５　包含層、その他の遺物（Fig.47・48、PL.8）

848は**第２～３面北西隅**掘下げで出土の碧玉製管玉。色調緑灰色で残存長1.3cm。857は**第２面表採**。朝鮮無文土器三角系粘土帯土器。口径17.3cm。弥生時代後期頃のもの。口縁外面粘土帯を貼り付け肥厚させ、ヘラで押さえ込んだような痕跡が残る。外面粗いハケ目に比べ内面ハケ目は細かい。858は人形。SK014出土。破片であるが僧侶の立像で、型作りで表面胡粉が残る。額に墨書痕がある。近世のものか。859は南壁出土。白磁Ⅲ-2a類。860～862は墨書土器片。**１～２面包含層**出土。860は土師器坏底両面に墨書。861は白磁底部利用の瓦玉で、朱書きの花押か「五？」がある。862は土師器底部に墨書がある。863は**第１面攪乱**出土の軒丸瓦。瓦頭文様は黒田家の藤巴。燻しが良くかかる。864・865は土製鋳型小片。内面は黒く焼けている。864は孔が、865の口縁部には段が付く。866はSE176出土の砥石片。砂岩。867～870は石鍋片。867はSE174出土。小型で口径20.6cm。868はSE207出土の鍔片。869はSX171出土の鍔片。870はSK219出土。大型の石鍋片。871はSK047出土の黒碁石。径2.0cm。872はSE179出土。滑石製円板。表面は煤が付着。径4.7cm。873・874は軽石製品。SE179**掘方**出土。874は孔が空き、浮子か。875はSK134出土。石弾か。876～878はSE207井筒出土。876は環状の滑石製品。丁寧な研磨仕上げ。877は石弾。878はおはじきか。879はSE336井筒。白い丸石。表面円滑。880はSK134出土。荒割りした石弾。881はSK286出土。灰緑色で表面円滑。882～890は鉄製品。882・883はSE176。下層出土。882は鉄製刀子で長さ14.1cm。883は井筒内出土の釘。断面方形。長さ13.0cm。884～890はSK321の四壁の板枠の固

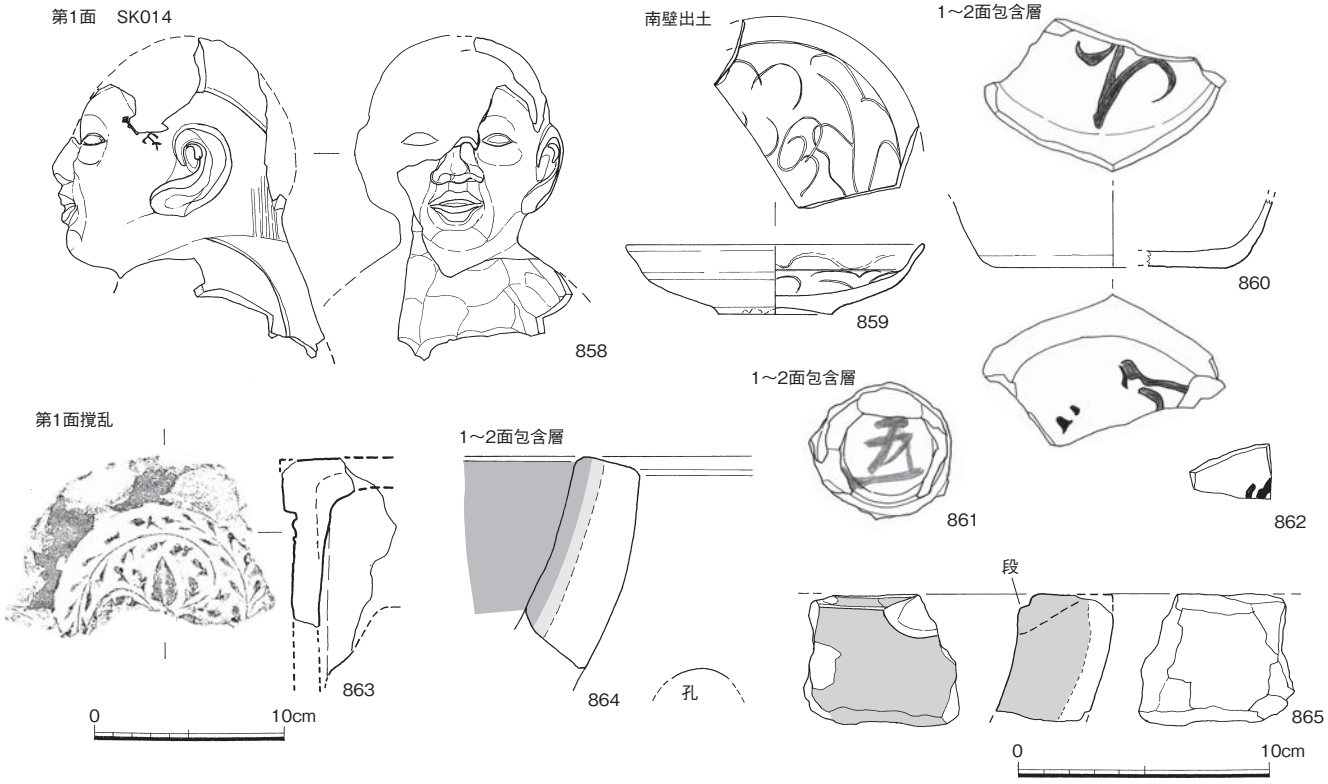


Fig.47　包含層・その他の出土遺物（1/3・863は1/4）　※864・865アミカケは黒化部分

定に使われた釘。錆がひどく木質が残る。断面は方形。長さ11.2～13.0㎝。

PL. 8は未図化の重要遺物と銅銭。**891**は**北区３面**。宋時代の天目碗片。**892・893**は**２～３面下げ**。**892**は型作りで優品の白磁皿片。**893**は墨書白磁片。花押か。**894**は**２面表採**。型作りの人の顔。近世か。**895**は**表採**。青白磁の脚部。龍頭か。**896**は**北側廃土**出土。墨書で『王天』、人名か。**897**は**３面西側掘下**げ。褐釉陶器蓋。**898**は**北区３面西側**。滑石製石鍋。**C01**は**SE002**の寛永通宝。**C02・C03**は**SK011**の天聖通宝・寛永通宝。**C04**は**022**の元祐通宝。**C05**は**027**の紹聖元宝。**C06**は**029**の元豊通宝。**C07・C08**は**SK286**の開元通宝。**C09～C12**は**北１～２面包含層**。**C09**は紹聖元宝。**C10**は嘉祐元宝。**C11**は聖和元宝。**C12**は至和元宝。

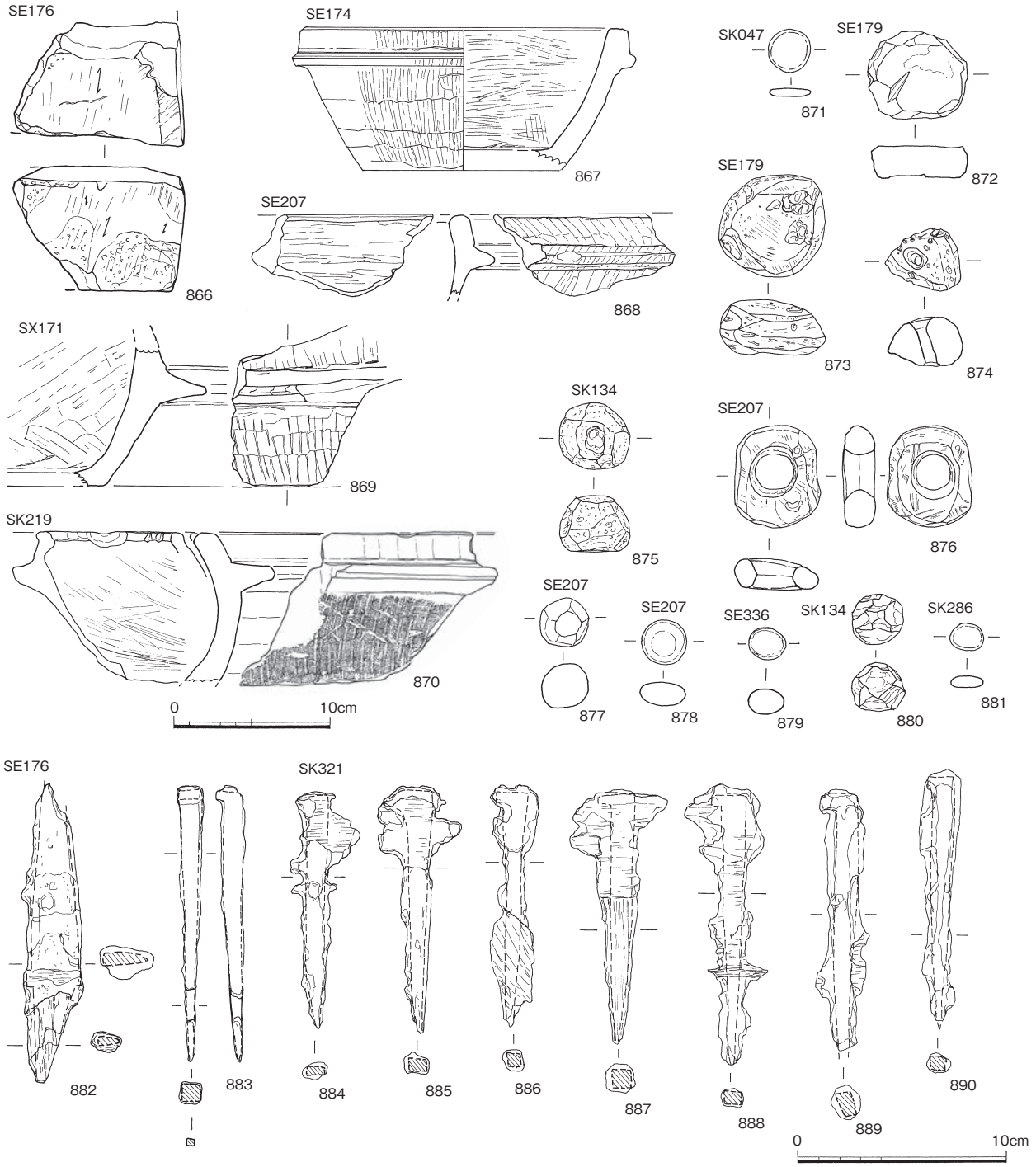


Fig.48　各遺構出土石製品・金属器（866～870は1/4、その他は1/3）

６　出土動物遺存体の分析

屋山　洋

博多遺跡200次調査からおよそ20点の動物遺存体が出土した。いずれも遺存状態は不良で骨の表面の解体痕や火熱を受けて焦げた痕跡などの観察はできない。出土した動物遺存体はいずれも哺乳類で、遺構の掘り下げ時に目視で確認し取り上げたもので、土壌のフローテーション等は行っていない。動物遺存体が多く出土したSK103（Fig.25）は土坑、SE207（Fig.33）は井戸である。SK103は12～13世紀に属し、骨15点が出土した。15点ともすべて哺乳類で、その中の９点はイルカ・クジラ類である。008は骨髄のみだが径6.5cm以上あり、また014も部位は特定できないが幅と長さからこれもクジラ類と思われる。017はSK113（Fig.25）から出土したクジラ類の椎骨で椎体のみの出土である。表面の遺存が悪く解体痕は観察できなかった。イルカ・クジラは博多遺跡群で多く出土する動物であるが、時期的には13世紀後半以降に増える傾向に有り、それまではイノシシ・シカなどが多いとしてきたが、最近12世紀代のイルカ類の出土例が増えてきつつある状況である。

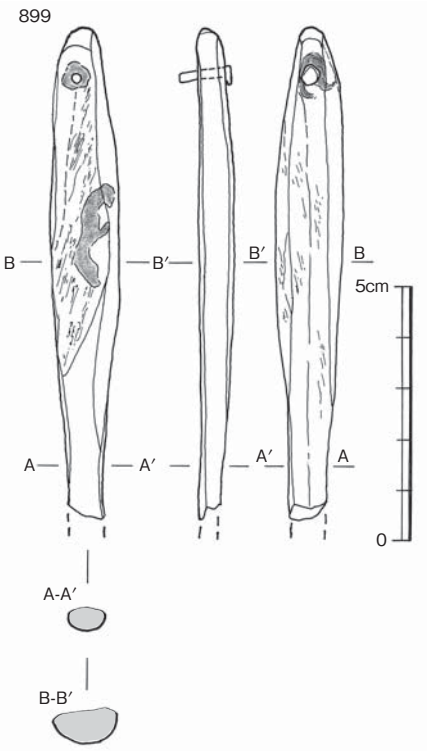
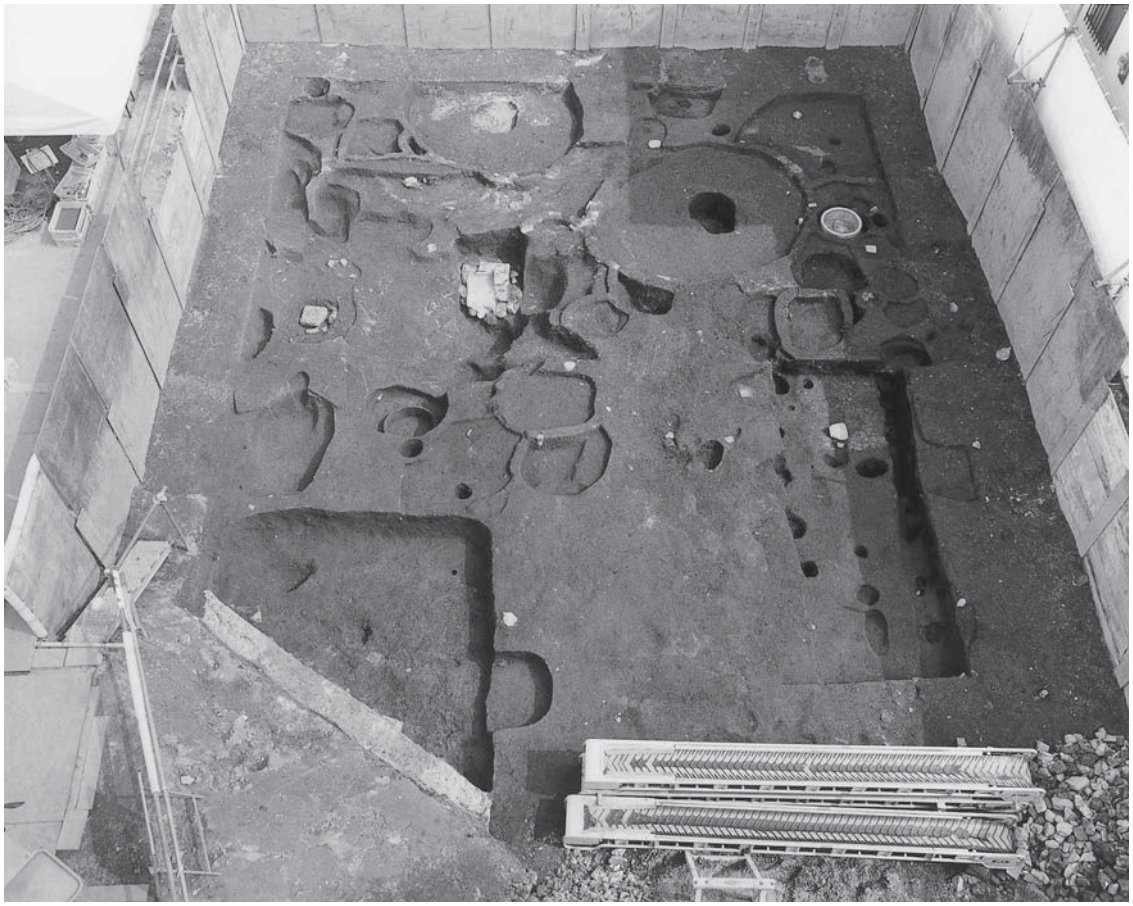


Fig.49　SX028出土骨製品（2/3）

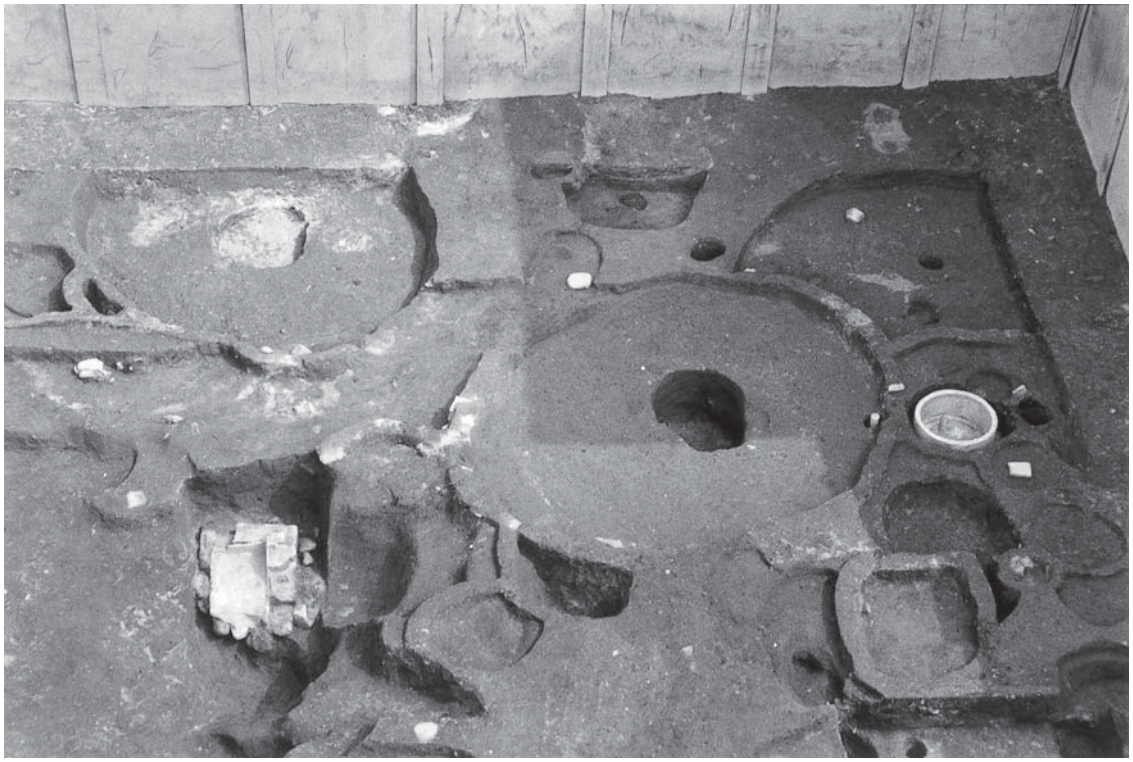
骨角器899はSX028のピット３から出土したブラシの柄である。ブラシ部分を欠き、現状で長さ9.8cm、幅1.3cmを測る。上端に目釘が打ってあるのはぶら下げる為の輪をつけるためと思われる。ブラシとしての用途は不明であるが、博多131次調査で出土したブラシは柄に歯楊枝と線刻されていた。同様の用途の可能性がある。骨表面の緻密質にスが多くみられ、クジラ類の骨を使用したものと思われる。これら骨製のブラシは近代に入って多く作られるようになるが、セルロイドに取って代わられて短期間で廃れてしまったと考えられ、出土列は少ない。SX028は防空壕に使われた可能性がある。

	地区	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分１	成長度	切痕	火熱	備　　考	時　　代
001	第2面	SK103　①	哺乳類	不明	骨髄のみ			不明	不明		径6.5cm以上。	12世紀～13世紀
002	第2面	SK103　②	哺乳類	イルカ・クジラ類	不明			不明	不明		骨は平らで厚さが7mm程。肋骨、棘突起の可能性有り	12世紀～13世紀
003	第2面	SK103　③	哺乳類	不明				不明	不明		遺存不良	12世紀～13世紀
004	第2面	SK103　④	哺乳類	イルカ･クジラ類？	不明			不明	不明		遺存不良	12世紀～13世紀
005	第2面	SK103　⑤	哺乳類	イルカ・クジラ類	不明			不明	不明			12世紀～13世紀
006	第2面	SK103　⑥	哺乳類	イルカ・クジラ類	椎体の上半、棘突起			不明	不明	なし	遺存不良で解体痕等は不明	12世紀～13世紀
007	第2面	SK103　⑦	哺乳類	イルカ・クジラ類	椎体の上半、棘突起			不明	不明		遺存不良で解体痕等は不明	12世紀～13世紀
008	第2面	SK103　⑧	哺乳類	クジラ類	骨髄のみ			不明	不明		径6.5cm以上。椎体か上腕骨等の骨端部か。	12世紀～13世紀
009	第2面	SK103　⑨	哺乳類	イルカ・クジラ類	頭蓋骨		後頭骨？	不明	不明		遺存不良で解体痕等は不明	12世紀～13世紀
010	第2面	SK103　⑩	哺乳類									12世紀～13世紀
011	第2面	SK103　⑪	哺乳類	不明	不明			不明	不明		遺存不良。細片化	12世紀～13世紀
012	第2面	SK103　⑫	哺乳類	不明	長骨？			不明	不明			12世紀～13世紀
013	第2面	SK103　⑬	哺乳類	不明				不明	不明		遺存不良	12世紀～13世紀
014	第2面	SK103　⑭	哺乳類	クジラ類	肋骨 or 上腕 or 橈骨			不明	不明		遺存不良。幅6.5cm、長さ25cm以上	12世紀～13世紀
015	第2面	SK103　⑮	哺乳類	クジラ類	不明			不明	不明		遺存不良	12世紀～13世紀
016	第3面	SE179	哺乳類	ウシ？	大腿骨？	右？	遠位部？	不明	不明		遺存不良	12世紀～13世紀
017	第2面	SK113	哺乳類	クジラ類	椎骨		椎体のみ	化骨化済み	不明		径9cm以上、長さ11cm以上遺存不良	13世紀
018	第3面	SE207	哺乳類		細片のみ							12世紀半ば～後半
019	第3面	SE207　①	哺乳類	不明	長骨		幹部	不明	不明		遺存不良	12世紀半ば～後半
020	第3面	SE207　②	哺乳類	イルカ・クジラ類	長骨？		幹部	不明	不明			12世紀半ば～後半

表１　各遺構出土動物遺存体一覧表



(1) 第1面全景（南から）



(2) 第1面北東側（南から）

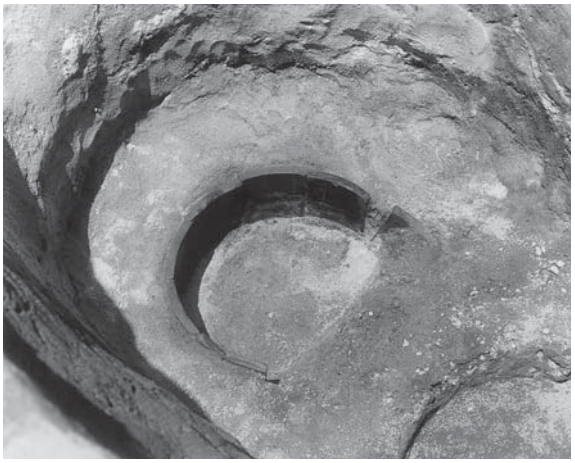
PL.2

(1) 第1面北西側（南から）

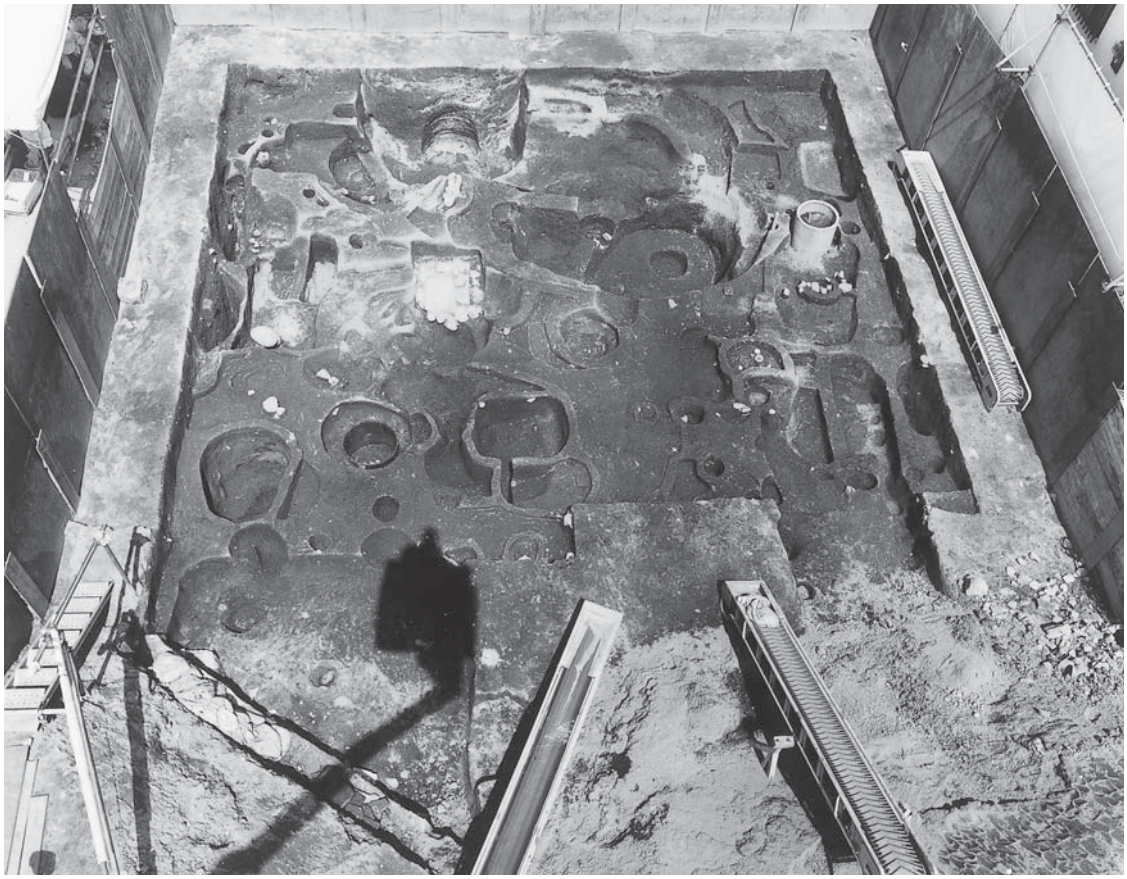
(2) SE001（南から）

(3) SE002検出状況（北西から）

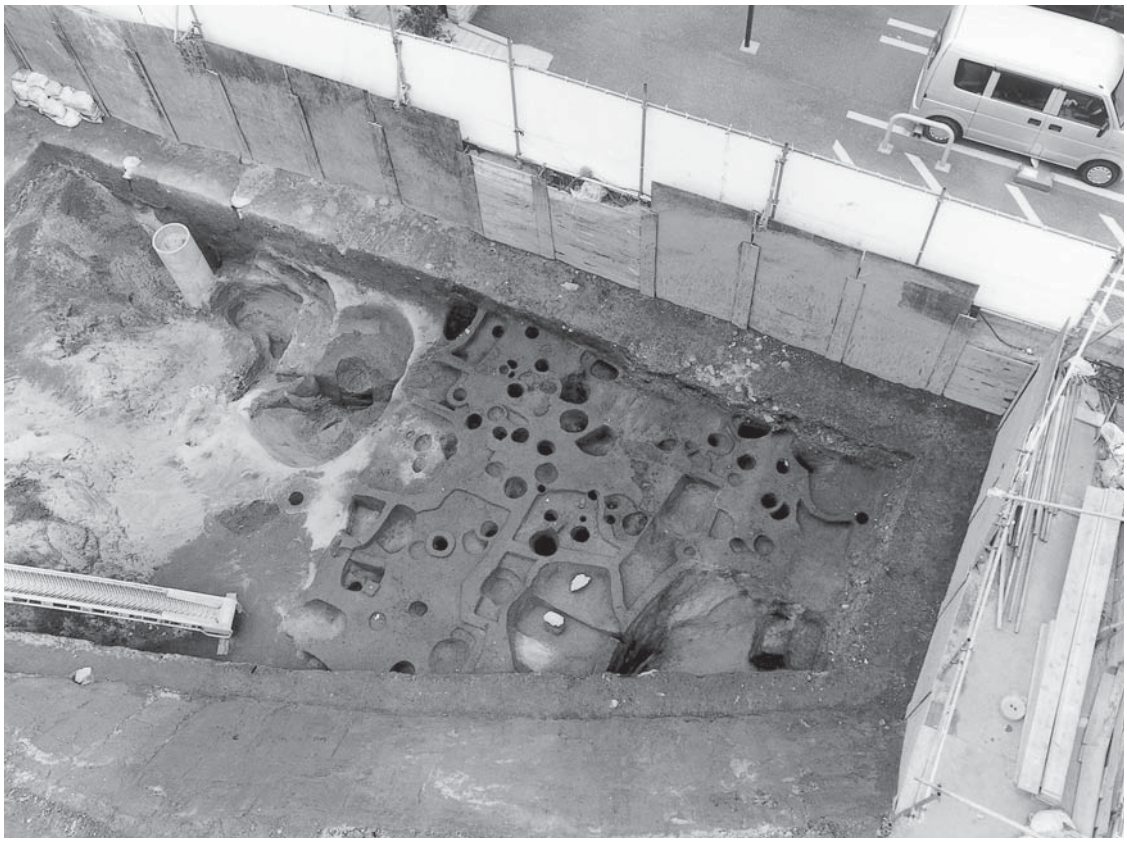
(4) SE002井筒検出状況（南から）



(5) SE002瓦井筒検出状況（北東から）

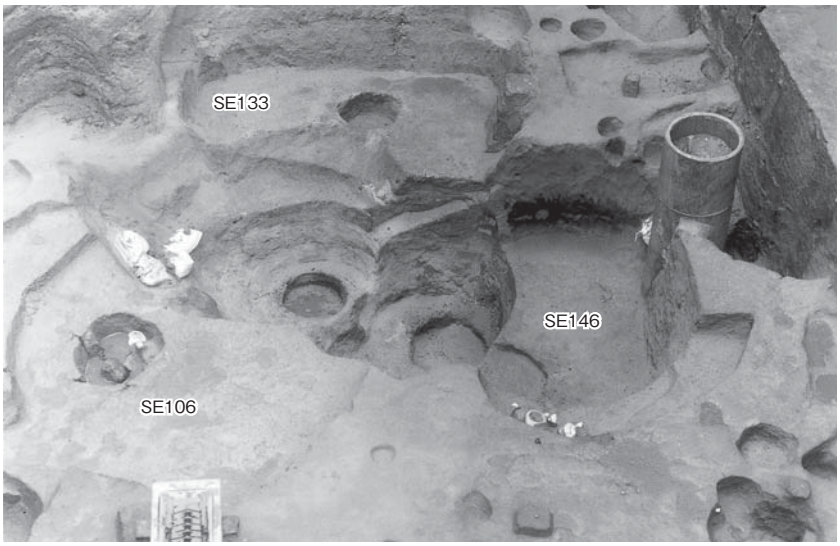


(1) 第2面北側全面（南から）



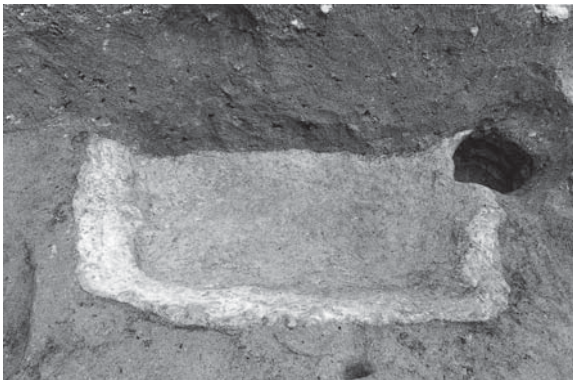
(2) 第2面南側全景（西から）

PL.4



(1) 北東側井戸群検出状況（南東から）

(2) SE336（北東から）



(3) SK064（南から）

(4) SK100（西から）

(5) SK137（南から）

(6) SK103（東から）

(7) SK113（南から）

(1) SK236（南から）

(2) SK242（南から）

(3) SK286（南東から）

(4) SX171礫群（南から）

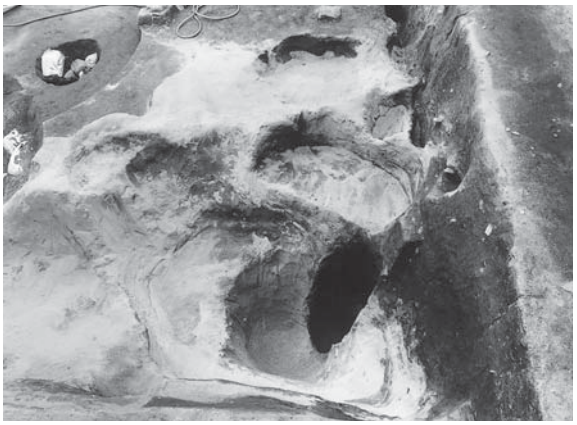
(5) 第３面北側全景（南から）

PL.6

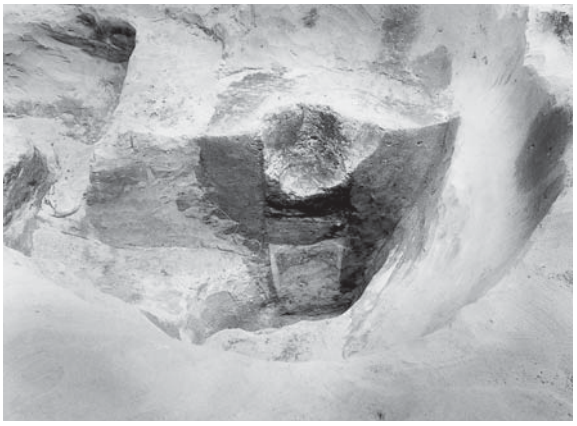
(1) 第3面南側全景（西から）

(2) SK236・321、SE380（南から）

(1) SE133断面など（南から）



(2) SE176・177（北から）



(3) SE280（北から）

(4) SK321遺物出土状況（南東から）

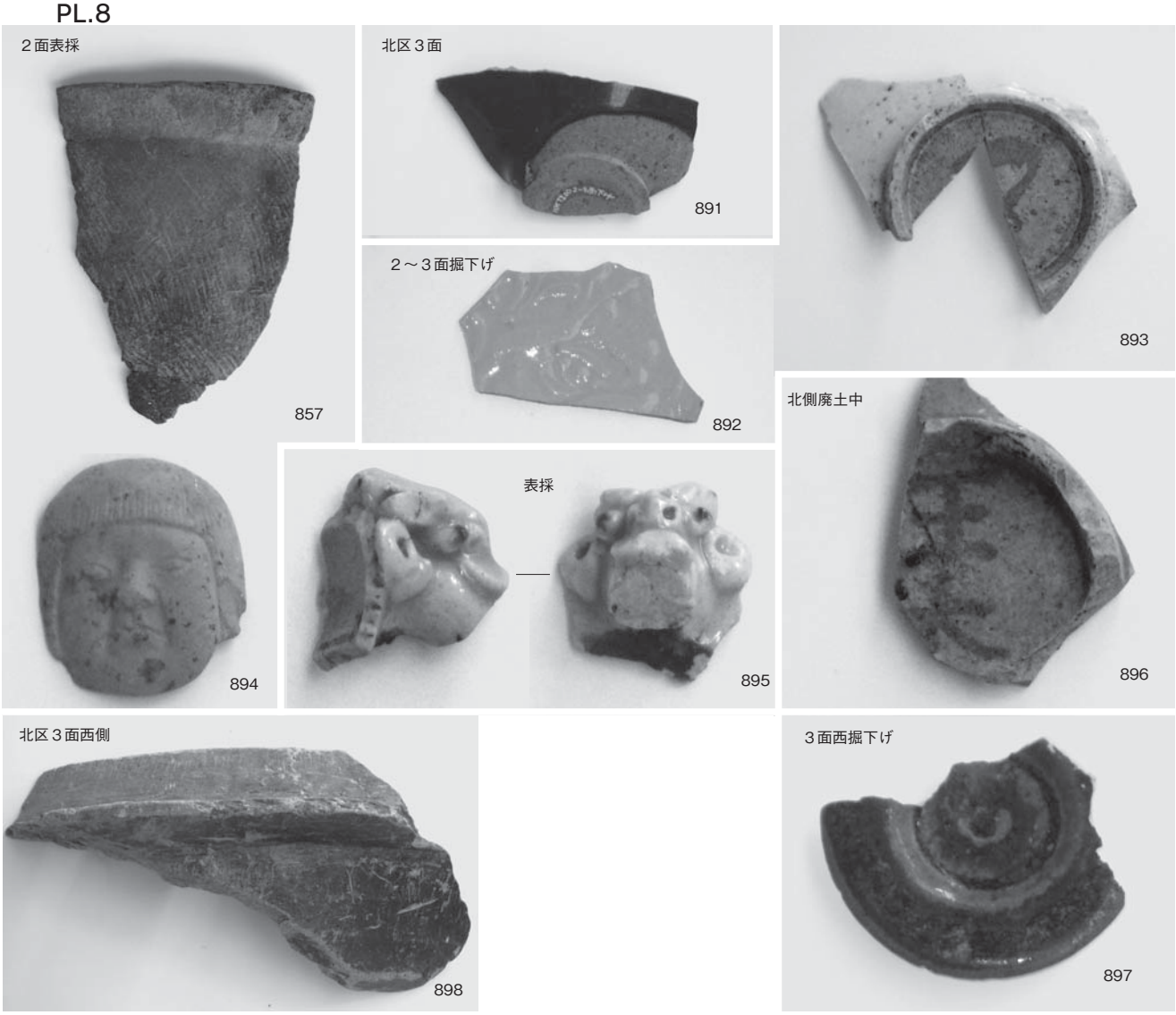
(5) SK321完掘（西から）

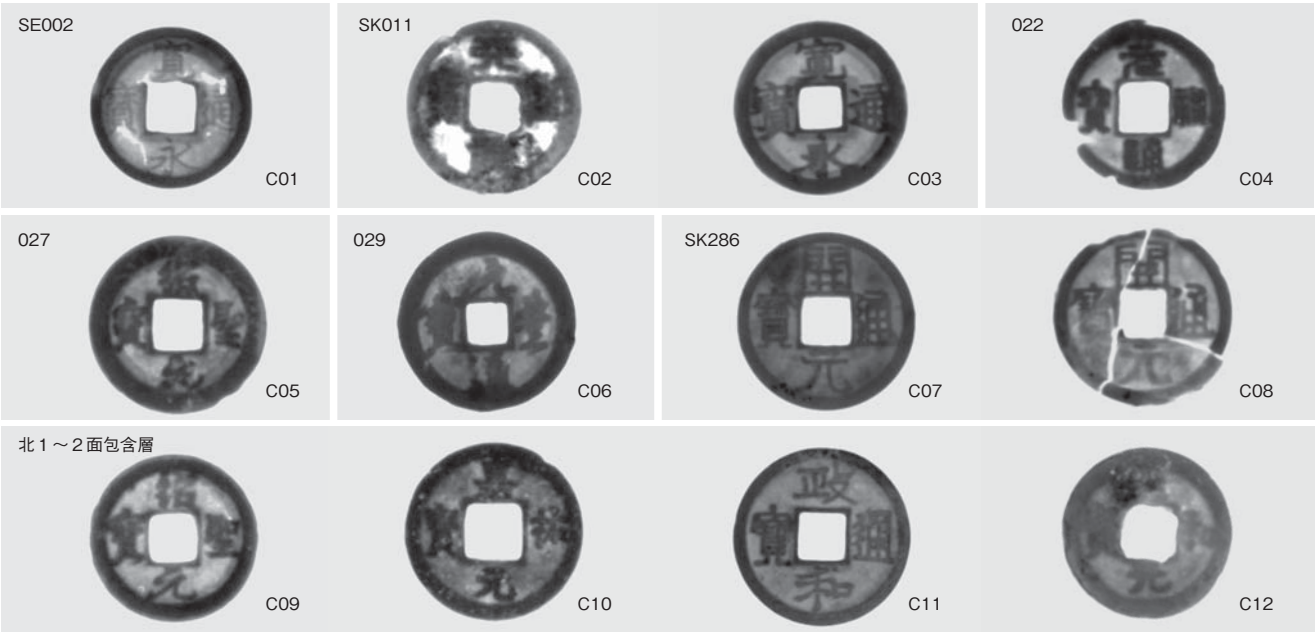
(6) SC233（西から）

(7) SC417（東から）

(8) 東側土層（西から）

PL.8





各面未図化遺物・各面出土銅銭（縮尺不統一）
銅銭初鋳年　C01：1636年、C02：1023年、C03：1636年：C04：1086年、C05：1094年、C06：1078年
C07：621年、C08：621年、C09：1094年、C10：1096年、C11：1111年、C12：1054年

PL.8　各面出土遺物、銭貨（縮尺不統一）

報　告　書　抄　録

ふりがな	はかた
書名	博多155
副書名	第200次調査報告
巻次	博多155
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1290集
編著者名	山崎龍雄、吉武　学、屋山　洋
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8621　福岡市中央区天神1丁目8－1　TEL092－711－4667
発行年月日	西暦2016年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
博多遺跡群（はかたいせきぐん） 第155次調査	福岡市（ふくおかし）博多区（はかたく） 冷泉町（れいせんまち）222～225	40132	021319	33度 35分 41秒	130度 24分 42秒	20140218 ～ 20140620	228	事務所ビル 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群 第155次調査	集落	弥生から 近世	竪穴住居跡・井戸・地下倉庫・土坑、ピット	弥生土器、古墳時代～古代土師器・須恵器・中世土師器・輸入陶磁器・中国銭	

要約	調査は４面の調査。上面の第１面は近世から中世後期で、瓦井戸や土坑がある。第２～３面は中世で、井戸や地下倉庫、動物骨が廃棄された土坑があった。第４面は古墳時代から弥生時代で、後期頃の竪穴住居跡２棟検出。中世の井戸に切られ、残存状態は良くなかった。

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1290集

博多155

－博多遺跡群第200次調査報告－

2016年（平成28年）３月25日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1丁目8-1
印　刷　株式会社富士印刷社
　　〒815-0035　福岡市南区向野1丁目19番1号